

日 本  
生理学教室史

下 卷

1988年

日本生理学会  
教室史編集委員会

日本  
生理学教室史

近代日本生理学 100 年の歩み

下 卷

菅野義信  
酒井敏夫  
佐藤昭夫  
高比良英輔 編  
竹宮隆司  
望月政一  
山岸俊一

日本生理学会  
教室史編集委員会

## は し が き

昭和33年5月、故浦本政三郎先生（慈恵医大名誉教授）は、日本に於ける生理学の歴史を百年史として編纂することを提議された。以来、浦本政三郎、内山孝一、名取礼二、酒井敏夫の諸先生のご努力下、昭和58年4月、日本生理学教室史の上巻が刊行された。

この発刊と相前後して、一県一医科大学をモットーに、急速に医科系の大学が増設された。この他、新設の歯学系の大学、及び、健康科学系の大学でも生理学に関連の教室の数が増し、生理学を中心とした研究所も新設された。そこで、昭和61年4月、第63回日本生理学大会が山形で開催された折、教室史下巻出版の議が提案され、承認された。編集委員会は、菅野義信、酒井敏夫、佐藤昭夫、高比良英輔、竹宮 隆、望月政司（委員長）、山岸俊一によって構成され、編集活動が開始された。

編集方針は、上巻に倣い、教室創設の経緯、教室の歴史的変遷、教室の人物史、教室の主たる研究の流れを骨子として、自由に書いて頂いた。但、教室数も合計すると、150以上になるので、一教室当たりの原稿字数を制限することはやむをえなかった。大多数の教室は設立後なお日浅く、活躍の程が手に取るように鮮やかである。本巻に掲載されている教室の原稿締切の期限は昭和61年12月20日とした。また、既に日本生理学雑誌にも掲載されているが、生理学談話会の歴史的推移、生理学教育委員会の活動を加え、更には、生理学会員による著作物の一覧を作製、付録とした。いずれも、日本生理学百年の歩みのあかしであり、貴重な資料といえる。

昭和61年に編集を開始してから比較的短期間で完成の運びとなったのは、編集委員及び執筆者各位の御協力の賜物と心から感謝している。

昭和63年9月1日

望 月 政 司

目次

目次

はしがき 望月政司

日本生理学会年次大会一覧表及び第61回～第65回大会記念撮影写真

昭和57年(1982)以後の日本生理学会の歩み 佐藤昭夫

I 大学医学部, 及び医科大学生理学教室史

1	海 外 国立北京大学医学院生理学教室史	1
2	北海道 旭川医科大学第一, 第二生理学教室史	8
3	東 北 秋田大学医学部第一, 第二生理学教室史	16
4	山形大学医学部第一, 第二生理学教室史	23
5	関 東 新潟大学医学部第二生理学教室史	29
6	自治医科大学第一, 第二生理学教室史	31
7	独協医科大学第一, 第二生理学教室史	38
8	筑波大学基礎医学系生理学教室史	45
9	埼玉医科大学第一, 第二生理学教室史	48
10	防衛医科大学第一, 第二生理学教室史	56
11	聖マリアンナ医科大学第一, 第二生理学教室史	63
12	北里大学医学部生理学教室史	69
13	東海大学医学部生理学 I, II, III 教室史	75
14	東 京 帝京大学医学部第一, 第二生理学教室史	86
15	東京大学医学部附属脳研究施設神経生物学部門史	93
16	杏林大学医学部第一, 第二生理学教室史	94
17	中 部 山梨医科大学第一, 第二生理学教室史	100
18	金沢医科大学第二生理学教室史	105
19	福井医科大学第一, 第二生理学教室史	108
20	富山医科薬科大学医学部第一, 第二生理学教室史	112
21	岐阜大学医学部附属反射研究施設反射生理学部門史	118
22	浜松医科大学第一, 第二生理学教室史	121
23	愛知医科大学第一, 第二生理学教室史	128
24	藤田学園保健衛生大学医学部第一, 第二生理学教室史	133
25	近 畿 滋賀医科大学第一, 第二生理学教室史	137
26	京都大学医学部附属脳神経研究施設生理学部門史	143
27	近畿大学医学部第一, 第二生理学教室史	148
28	兵庫医科大学第一, 第二生理学教室史	154
29	中四国 島根医科大学生理学教室史	161
30	川崎医科大学第一, 第二生理学教室史	165

31	中四国	徳島大学医学部第二生理学教室史	172
32		愛媛大学医学部第一, 第二生理学教室史	178
33		高知医科大学第一, 第二生理学教室史	184
34		香川医科大学第一, 第二生理学教室史	189
35	九州	産業医科大学第一, 第二生理学教室史	196
36		産業医科大学産業生態科学研究所応用生理学教室史	205
37		福岡大学医学部第一, 第二生理学教室史	206
38		佐賀医科大学第一, 第二生理学教室史	213
39		大分医科大学第一, 第二生理学教室史	220
40		宮崎医科大学第一, 第二生理学教室史	225
41		琉球大学医学部第一, 第二生理学教室史	232

## II 大学歯学部, 及び歯科大学生理学教室史

1	北海道	北海道大学歯学部口腔生理学教室史	237
2		東日本学閥大学歯学部口腔生理学教室史	240
3	東北	岩手医科大学歯学部口腔生理学教室史	242
4		東北大学歯学部口腔生理学教室史	247
5		東北歯科大学口腔生理学教室史	249
6	関東	日本歯科大学新潟歯学部口腔生理学教室史	252
7		明海大学歯学部口腔生理学教室史	253
8		日本大学松戸歯学部口腔生理学教室史	257
9		東京歯科大学生理学教室史	258
10		鶴見大学歯学部口腔生理学教室史	263
11		神奈川歯科大学生理学教室, 及び口腔生理学教室史	266
12	東京	東京医科歯科大学歯学部口腔生理学教室史	271
13		日本歯科大学生理学教室史	273
14		昭和大学歯学部口腔生理学教室史	275
15	中部	松本歯科大学口腔生理学教室史	278
16		朝日大学歯学部口腔生理学教室史	281
17		愛知学院大学歯学部口腔生理学教室史	284
18	近畿	大阪歯科大学生理学教室史	287
19		大阪大学歯学部口腔生理学教室史	293
20	中四国	岡山大学歯学部口腔生理学教室史	297
21		広島大学歯学部口腔生理学教室史	299
22		徳島大学歯学部口腔生理学教室史	302
23	九州	九州歯科大学生理学教室, 及び口腔科学教室史	305
24		九州大学歯学部口腔生理学教室史	309
25		福岡歯科大学口腔生理学教室史	312
26		長崎大学歯学部口腔生理学教室史	314
27		鹿児島大学歯学部口腔生理学教室史	317

## III 大学生理・健康科学系生理学教室史

1	関東	筑波大学体育科学系運動生理学部門史	321
2		順天堂大学体育学部運動生理学・生理学研究室史	332
3		横浜市立大学文理学部体育医学教室史	337
4		東海大学体育学部運動生理学研究室史	341
5	東京	東京大学教育学部体育学健康教育学科体育学講座史	343
6		日本体育大学体育生理学教室史	346
7		日本女子体育大学運動生理学研究室史	349
8		東京慈恵会医科大学体力医学研究室史	352
9		東京学芸大学運動生理学研究室史	356
10		杏林大学保健学部臨床生理学教室史	360
11	中部	名古屋大学総合保健体育科学センター運動生理学教室史	362
12		中京大学体育学部運動生理学教室史	366
13	近畿	京都大学教養部保健体育学教室運動生理学研究部門史	370
14		大阪大学健康体育部運動生理学部門史	373
15		大阪大学基礎工学部生物工学科, 刺激生理学教室史	376
16		大阪体育大学機能系運動生理学教室史	378
17		神戸学院大学栄養学部生理学研究室史	382
18	中四国	広島大学総合科学部生理学研究室史	386
19		広島大学総合科学部運動生理学研究室史	388
20	九州	九州大学健康科学センター史	389
21		鹿屋体育大学体育学部生理学・バイオメカニクス研究室史	392

## IV 生理科学系研究機関研究室史

1	東京	東京都老人総合研究所生理学部基礎第一, 第二生理, 及び臨床第一, 第二生理研究室史	395
2		東京都神経科学総合研究所神経生理学, 病態神経生理学, 神経生化学, 神経医化学, 医学心理学研究部門史	409
3		三菱化成生命科学研究所脳神経生理学, 生理心理学研究室史	420
4		NHK放送技術研究所・視覚情報研究部神経生理学部門史	425
5		国立公衆衛生院生理衛生学部史	431
6		国立栄養研究所運動生理研究室史	435
7		明治生命厚生事業団体力医学研究所生理学, 生化学, 形態学研究室史	437
8	中部	岡崎国立共同研究機構生理学研究所神経化学, 超微小形態生理, 細胞内代謝, 生体膜, 機能協同, 能動輸送, 神経情報, 液生情報, 高次神経機構, 情報記憶, 高次神経性調節, 生体システム, 高次液性調節研究部門史	443
9		愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所生理学部門史	484
10		京都大学霊長類研究所神経生理研究部門史	487
11	近畿	近畿大学高血圧研究所史	489

12	近畿	国立循環器病センター研究所心臓生理部, 循環動態機能部史	493
13		血栓止血研究神戸プロジェクト (済生会兵庫県病院) 史	500
14	九州	長崎大学熱帯医学研究所疫学 (環境生理学) 部門史	503

付 録

生理学談話会の歴史的推移 (I)			
1.	生理学東京談話会小史 (市河三太)	509	
2.	近畿生理学談話会成立の経過 (吉村寿人)	519	
生理学談話会の歴史的推移 (II)			
3.	日本生理学会北海道地方会の歩み (広重 力)	522	
4.	日本生理学会中国・四国地方会の歩み (中山 沃・岡 芳包・福原 武)	527	
5.	西日本生理学会小史 (後藤昌義)	530	
6.	生理学中部談話会30年史 (大原孝吉)	538	
7.	東北生理学談話会の歩み (鈴木泰三)	543	
日本生理学会教育委員会の歩み			
		545	
名著復刻への道 (酒井敏夫)			
		551	
生理学書及生理学者の出版物 (1903~1955)			
		563	
生理学書及生理学者の出版物 (1956~1986)			
		565	
大学, 学部, 及び研究機関所在地一覧			
		589	
日本生理学教室史 (下巻) 編集後記			
	酒 井 敏 夫	592	

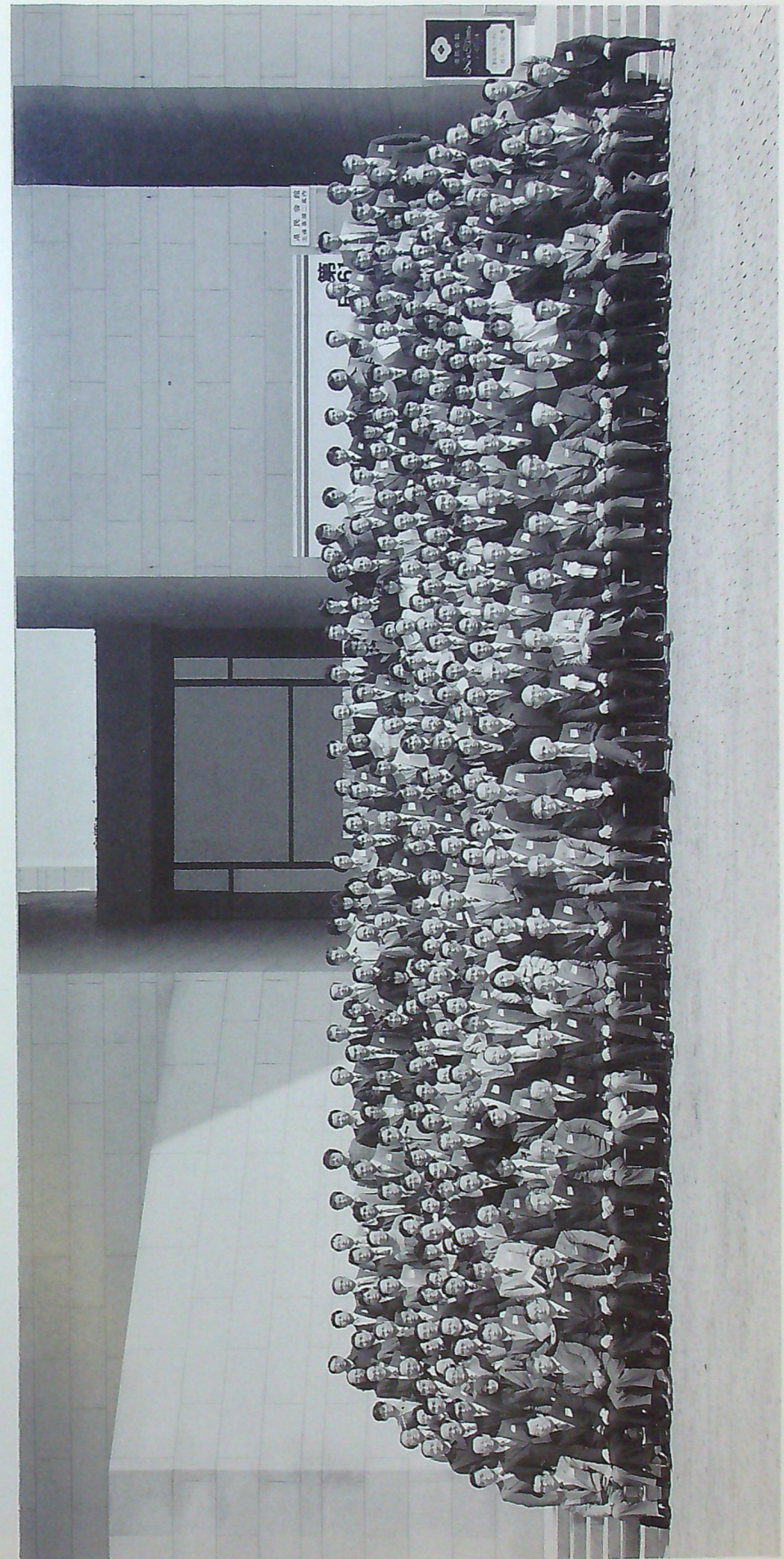
## 日本生理学会年次大会一覧表及び 第61回～第65回大回記念撮影写真

日本生理学会大会一覧表 (\*日本医学会の分科会)

回	開催年月	開催地	主催校	当番幹事	演題数
第1回	大11. 7	東京	東大	永井 潜, 橋田邦彦	37
第2回	大12. 4	福岡	九大	石原 誠, 板垣政参	75
第3回	大13. 7	仙台	東北大	藤田敏彦, 佐武安太郎	107
第4回	大14. 8	奉天	満州医大	久野 寧	104
第5回*	大15. 4	東京	東大	永井 潜, 橋田邦彦	82
第6回	昭2. 4	岡山	岡山医大	生沼曹六	142
第7回	昭3. 4	京都	京大	石川日出鶴丸, 正路倫之助	140(デモ 8)
第8回	昭4. 7	札幌	北大	宮崎彪之助, 朴沢 進	121
第9回*	昭5. 4	大阪	阪大	中川知一	116
第10回	昭6. 3	長崎	長崎医大	緒方大象	136
第11回	昭7. 3	新潟	新潟医大	横田武三	103
第12回	昭8. 7	金沢	金沢医大	上野一晴	206
第13回*	昭9. 4	東京	慈恵医大	浦本政三郎	159(紙上 30) デモ 5)
第14回	昭10. 10	京城	京城大	中西政周, 大塚藤吉	302(紙上191)
第15回	昭11. 10	倉敷	労研	暉峻義等	211
第16回	昭12. 4	名古屋	名古屋医大	福田邦三	154
第17回*	昭13. 4	京都	京大	石川, 久野, 越智, 正路, 勝	222
第18回	昭14. 4	熊本	熊本医大	小玉作治	195
第19回	昭15. 4	千葉	千葉医大	鈴木正夫	119
第20回	昭16. 7	台北	台北大	細谷雄二, 竹中繁雄	119(紙上 56)
第21回*	昭17. 3	東京	慶大	加藤元一	138
第22回	昭18. 3	福岡	九大	板垣政参, 緒方大象	165
休会	昭19.				
休会	昭20.				
第23回	昭21. 11	仙台	東北大	佐武安太郎, 本川弘一	42
第24回*	昭22. 4	大阪	阪大	久保秀雄	101
第25回	昭23. 5	新潟	新潟大	高木健太郎	180
第26回	昭24. 4	京都	京大	笹川久吾, 大谷卓三	193(紙上 71)
第27回	昭25. 5	呉	広島医大	西丸和義	346
第28回*	昭26. 4	東京	東大	坂本嶋嶺, 福田邦三	337
第29回	昭27. 7	札幌	北大	箕島 高	388(紙上285)
第30回	昭28. 4	福岡	九大	瀬尾愛三郎	397(紙上309)
第31回	昭29. 5	名古屋	名大	久野 寧, 伊藤 龍	233

回	開催年月	開催地	主催校	当番幹事	演題数
第32回*	昭30. 4	京都	京大	笹川久吾, 大谷卓造	324(紙上240)
第33回	昭31. 5	岡山	岡山大	林香苗, 福原武	234
第34回	昭32. 5	神戸	神戸医大	正路倫之助, 須田勇, 古沢一夫	369
第35回	昭33. 5	金沢	金沢大	斎藤幸一郎, 岩間吉也	388
第36回*	昭34. 3	東京	日本医大	戸塚武彦	252(デモ 5)
第37回	昭35. 4	徳島	徳島大	岡芳包, 山野俊雄	292
第38回	昭36. 4	京都	京都府立医大	吉村寿人, 岩瀬善彦	202(デモ 5)
第39回	昭37. 7	弘前	弘前大	佐藤熙, 中村勉	253(紙上 31)
第40回*	昭38. 4	大阪	阪大	久保秀雄, 吉井直三郎	146
第41回	昭39. 4	千葉	千葉大	鈴木正夫, 福田篤郎	169(デモ 9)
第42回	昭40. 5	岐阜	岐阜大	竹中繁雄, 田村喜弘	249(デモ 2)
第43回	昭41. 5	松本	信州大	和合卯太郎, 宮川清	275(デモ 3)
第44回*	昭42. 3	名古屋	名大	伊藤龍, 高木健太郎	277(デモ 2)
第45回	昭43. 4	熊本	熊本大	緒方維弘, 佐藤昌康, 田中育郎	360(デモ 2)
第46回	昭44. 4	米子	鳥取大	山田守, 及川俊彦	288(デモ 2)
第47回	昭45. 4	東京	昭和大	井上清恒, 市河三太, 武重千冬	278(デモ 3)
第48回*	昭46. 4	東京	東京医歯大	勝木保次, 市岡正道, 村田計一, 渡辺昭	281
第49回	昭47. 5	盛岡	岩手医大	三田俊定, 八木舎四, 高下弘夫	365(デモ 4)
第50回	昭48. 4	福岡	九大	間田直幹, 後藤昌義, 栗山熙, 桑原万寿太郎	405(デモ 1)
第51回	昭49. 6	札幌	北大	伊藤真次, 藤森聞一, 中村治雄	434(特別招待講演 2シ)
第52回*	昭50. 4	津	三重大	勝田稔, 村上長雄	401(シ)
第53回	昭51. 6	仙台	東北大	鈴木泰三, 青木健, 中浜博, 田崎京三, 星猛	465(シ)
第54回	昭52. 4	鹿児島	鹿児島大	松本保久, 橋村三郎, 笹原泰夫	458(ポ 10)
第55回	昭53. 4	新潟	新潟大	小林庄一, 新島旭, 丸山直滋, 島田久八郎, 村上俊樹	476(ポ 15)
第56回*	昭54. 4	東京	慈恵医大	増田允, 酒井敏夫	460(ポ173シ)
第57回	昭55. 4	神戸	神戸大	須田勇, 岡本彰祐, 埴功	473(ポ187シ)
第58回	昭56. 4	徳島	徳島大	松本淳次, 井上五郎, 高田允	505(ポ 72シ)
第59回	昭57. 4	東京	慶応大	塚田裕三, 村上元彦	671(ポ 36)
第60回*	昭58. 4	大阪	阪大	岩間吉也, 中馬一郎, 中山昭雄, 河村洋二郎	657(シ 1) (特別講演1)
第61回	昭59. 3	前橋	群馬大	高木貞敬, 三浦光彦, 平尾武久, 鈴木光雄	735(教育シ1)
第62回	昭60. 3	久留米	久留米大	額綱教三, 西彰五郎	741(シ 6)
第63回	昭61. 4	山形	山形大	望月政司, 加藤宏司	824(教育シ1)
第64回*	昭62. 4	千葉	千葉大	本間三郎, 本田良行	814(生理薬理シ 4)
第65回	昭63. 4	和歌山	和歌山大	松下宏, 辻本毅, 辻繁勝	819(特講 2)

注：(ポ：ポスター, シ：シンポジウム) (生理学会事務局調べ)



第61回 日本生理学会大会  
昭和59年(1984)3月 群馬県民会館



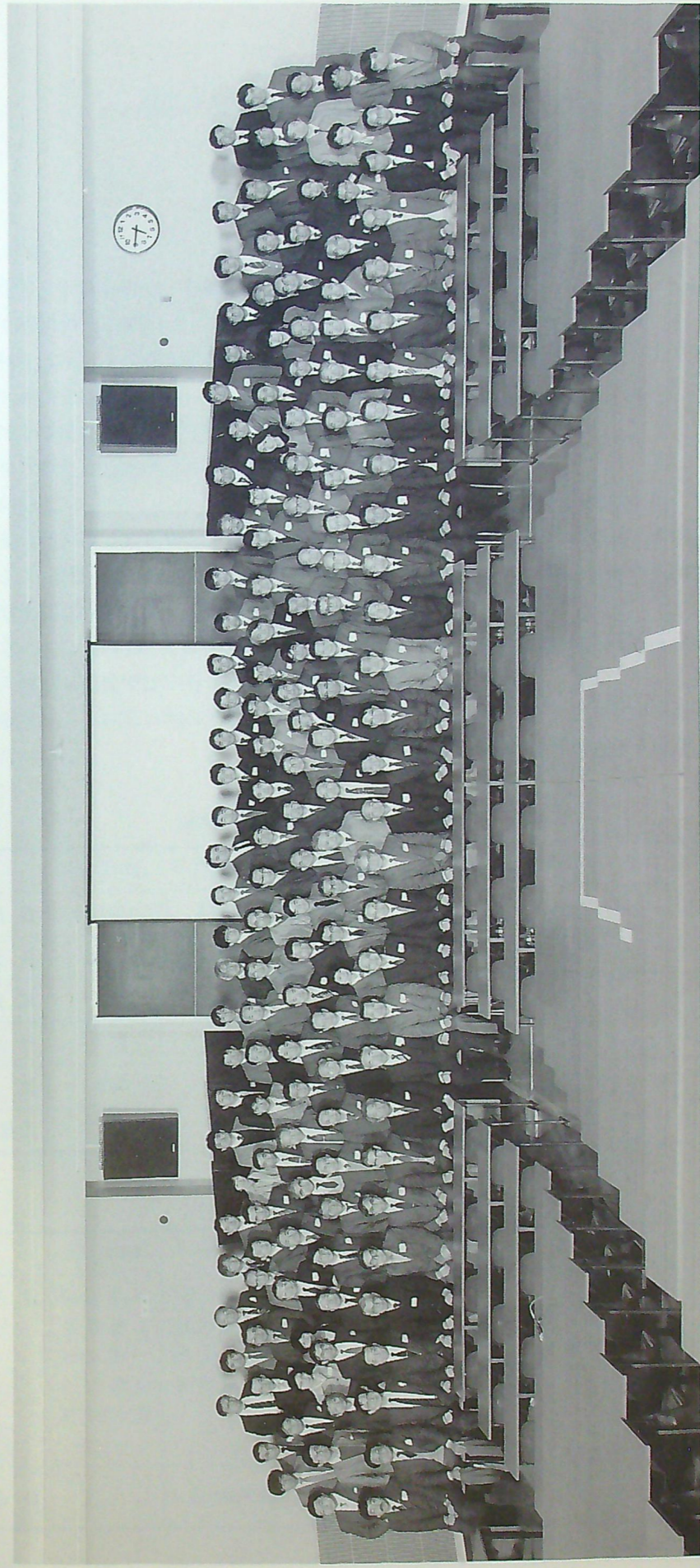
第62回 日本生理学会大会  
昭和60年(1985)3月 久留米大



第63回 日本生理学会大会  
昭和61年(1986)4月 山形大



第64回 日本生理学会大会  
昭和62年(1987)4月 千葉大



第65回 日本生理学会大会  
昭和63年(1988)4月 和歌山大

## 昭和57年(1982)以後の日本生理学会の歩み

佐藤 昭夫

## 1. はじめに

日本生理学教室史上巻で、日本生理学会の歴史について昭和48年(1973)迄を名取禮二先生が、昭和48年(1973)より昭和57年(1982)迄を酒井敏夫先生が紹介された。

本書ではその後の昭和57年(1982)より昭和63年(1988)までの日本生理学会の主な歩みを紹介させていただく。

文中、委員名が出てくる場合、その順序は、例えばJ. J. P. 編集委員会の場合はABC順に、日本生理学雑誌編集委員会の場合は北から南の順に掲載されているので、その慣例を尊重して記載した。慣例が明確でない場合は、極力五十音順で記載するように努めたので最初にお断りしておきたい。

## 2. 日本生理学会会員数の推移

生理学会会員は一般会員、特別会員、名誉会員、準会員より成る。総会員数は1982年以来、3,186名より1988年の3,551名へと過去6年間に約1割の増加があった。年度別の推移を表1に示す。

## 3. 日本生理学会特別会員、名誉会員

過去6年間に特別会員、名誉会員として推薦・承認された人名を表2に示す。

## 4. 日本生理学会各種幹事及び各種専門委員会委員長

昭和57年以後の日本生理学会各種幹事及び各種専門委員会委員長を表3に示す。

表1. 日本生理学会会員数の推移

	S 57(1982)	S 58(1983)	S 59(1984)	S 60(1985)	S 61(1986)	S 62(1987)	S 63(1988)
総会員数	3,186	3,222	3,225	3,319	3,372	3,470	3,551
一般会員	2,914	2,953	2,981	3,055	3,110	3,207	3,285
特別会員	21	25	28	28	25	25	30
名誉会員	1	1	1	3	3	3	3
準会員	250	243	243	233	234	235	233
新規評議員	57	56	42	56	33	49	53

表2. 特別会員及び名誉会員新規推薦の推移

	S 57(1982)	S 58(1983)	S 59(1984)	S 60(1985)	S 61(1986)	S 62(1987)	S 63(1988)
特別会員	問田直幹 名取禮二 藤森聞一 三田俊定 吉井直三郎	朝比奈一男 伊藤真次 伊藤龍 福田篤郎			岡芳包 永井寅男 中村治雄	市岡正道 井上章 内菌耕二 銭場武彦 西田勇 山田守	須田勇 松本淳治 横山正松
名誉会員		H. Grundfest	田崎一二 C. McC. Brooks				

表3. 昭和57年(1982)以降の日本生理学会各種幹事ならびに専門委員会委員長

	S 56~S 59(1981~1984)	S 59~S 62(1984~1987)	S 62~S 65(1987~1990)
庶務幹事	伊藤正男	伊藤正男	伊藤正男
会計幹事	星 猛	星 猛	本郷利憲
編集幹事	酒井敏夫	酒井敏夫	酒井敏夫
会計監事	真島英信, 島津 浩	真島英信, 島津 浩	島津 浩, 竹内 昭
選挙管理委員会	島津 浩	真島英信, 竹内 昭	竹内 昭
会則委員会	島津 浩	島津 浩	島津 浩
評議員選考委員会	高木貞敬	本間三郎	本間三郎
研究費委員会	御手洗玄洋	新島 旭	新島 旭
生理学教育委員会	菊地 隼二	中馬 一郎	中野昭一
生理学教室史編集委員会	酒井敏夫	酒井敏夫	望月政司
生理学用語委員会	酒井敏夫	酒井敏夫	酒井敏夫
J. J. P. 編集委員会	入沢 宏	中山昭雄	星 猛
動物実験に関する委員会			塚田裕三

注: J. J. P. 編集委員会委員長は2年毎に改選される。

5. 日本生理学会大会

昭和57年(1982)4月以後に開催された日本生理学会大会の一覧表を表4に示す。

昭和52年4月より昭和56年4月の日本生理学会大会までの5年間の演題数は、500題前後であったが、昭和57年4月の第59回大会より演題申し込みの制限(1教室あるいは1講座当り2題程度)が取り除かれ、同大会では682題へと飛躍的に増加した。更に過去3年間には何れも800題を越えるに至っている。

6. 日本生理学雑誌

編集委員会(編集幹事:酒井敏夫)は日本生理学雑誌を過去6年間毎月発行してきた。この間、生理学論文表題集が57年度から日本生理学雑誌と切り離し、号外として印刷されることになった。

日本生理学雑誌の日本生理学会大会英文抄録号をJ. J. P. 誌の supplement として発刊する

ことになり、実施は昭和64年度の第66回大会からとなる。編集は当番幹事、日本生理学雑誌編集委員会、J. J. P. 誌編集委員会の3者で行われることになる。

昭和63年度の日本生理学雑誌編集委員会は第50巻を数え、現在の編集委員会構成は次の通りである。

- 幹事: 酒井敏夫
- 委員: 林 秀生, 真野範一, 登坂恒夫, 松井洋一郎, 平野修助, 黒島晨汎(北海道), 丹治 順(東北), 本間信治(関東), 小野武年(中部), 藤本 守(近畿), 村上 恵(中・四国), 堀 哲郎(九州)

表4. 日本生理学会大会一覧

回	開催年月	開催地	主催校	当番幹事	演題数	特別講演	モータリニクチャレンジャー	シム
第59回	S 57. 4 (1982)	東 京	大 慶	塚田裕三, 村上元彦	682			解説講演 10分野
第60回	S 58. 4 (1983)	大 阪	大 阪	岩間吉也, 中馬一郎, 中山昭雄, 河村洋二郎	655	T. N. Wiesel		臨床医学との交流シンポジウム 10課題
第61回	S 59. 3 (1984)	群 馬	群 馬	高木貞敬, 三浦光彦, 平尾武久, 鈴木光雄	735	K. E. Hagbarth R. R. Llinas		
第62回	S 60. 3 (1985)	久 留 米	久 留 米	額綱教三, 西 彰五郎	740	C. McC. Brooks I. Tasaki		シンポジウム 6課題 生理学教育シンポジウム
第63回	S 61. 4 (1986)	山 形	山 形	望月政司, 加藤宏司	824	M. Cabanac R. E. Forster II J. Piiper	三 額綱教三 伊藤正男 伊藤真次	生理学教育シンポジウム
第64回	S 62. 4 (1987)	千 葉	千 葉	本間三郎, 本田良行	811			生理薬理合同シンポジウム 4, 23課題 生理学教育シンポジウム
第65回	S 63. 4 (1988)	和 歌 山	和 歌 山	松下 宏, 辻本 毅, 松 繁勝, 辻 渡 辺	819	名取 禮二 渡 辺 裕	本 間 三 郎 浅 沼 広	シンポジウム 17, 94課題 動物実験に関する解説講演 生理学教育シンポジウム

### 7. Japanese Journal of Physiology (J.J.P.)

J.J.P.は過去6年間、1982年の第32巻より1988年の第38巻に至るまで隔月で順調に発刊されてきた。表5に論文数と頁数を示す。J.J.P.の編集委員会は表6に示すような委員会の構成で2年毎に表6に示すような主な活動を行った。

表5. Japanese Journal of Physiology の発刊経過

発行年	巻	編数	頁数	編集委員長
S 57(1982)	32	97	1,080	入沢 宏
S 58(1983)	33	91	1,085	中山昭雄
S 59(1984)	34	98	1,163	中山昭雄
S 60(1985)	35	89	1,123	星 猛
S 61(1986)	36	108	1,301	星 猛
S 62(1987)	37	90	1,093	本田良行
S 63(1988)	38			本田良行

表6. J. J. P. 編集委員会の活動

S 56 ~ S 58 (1981~1983)	委員長：入沢 宏 委員：本田良行, 星 猛, 真島英信, 中山昭雄, 大村 裕, 高木貞敬, 渡辺 昭 ・キーワード方式による Subject Index の採用。 ・ミニレビューの掲載決定(著者は編集委員会で推薦)。
S 58 ~ S 60 (1983~1985)	委員長：中山昭雄 委員：本田良行, 星 猛, 入沢 宏, 額額教三, 真島英信, 大村 裕, 佐藤昌康 ・Short Communication に速報としての性格をもたせるため, 毎号5編までは Regular Paper よりも優先させて掲載することを決定。 ・内分泌生理, 分子・細胞生理の2分野を新しく設置。
S 60 ~ S 62 (1985~1987)	委員長：星 猛 委員：広重 力, 本田良行, 入沢 宏, 菅野義信, 額額教三, 中山昭雄, 大村 裕, 酒井敏夫, 佐藤昌康 ・中国, 東欧等の研究機関のうち5ヶ所(ブルガリアの Central Medical Library など)に J. J. P. を1年間寄贈することを決定。 ・Technical Note の新設を決定(Technical Note は新しい研究法あるいは顕著な方法の改善に関する論文)。 ・Short Communication および Technical Note の投稿規程について, 刷り上がりで5頁以内, 図表は4点以内に改訂することを決定。
S 62 ~ S 64 (1987~1989)	委員長：本田良行 委員：広重 力, 星 猛, 金子章道, 菅野義信, 中山昭雄, 二宮石雄, 大村 裕, 酒井敏夫, 竹内 昭 ・人体及び動物実験に関する投稿規程を作成。

### 8. 生理学教育委員会

生理学教育委員会は表7に示すような主な活動を行った。

表7. 生理学教育委員会の活動

S 56 ~ S 59 (1981~1984)	委員長：菊地鎌二 委員：中馬一郎, 石河延貞, 小川哲郎, 熊田 衛, 富田忠雄, 鳥居鎮夫, 中野昭一, 堀 功, 林 秀生, 本間三郎, 前川杏二, 村上 恵, 森 茂美, 山下 博 ・解説講演ビデオテープを作成。 ・生理学教育に関するアンケート調査を5年ぶりに実施し, 日本生理学雑誌(第45~47巻)に報告。 ・生理学実習書を改訂。
S 59 ~ S 62 (1984~1987)	委員長：中馬一郎 委員：中野昭一, 入来正躬, 大村 裕, 神野耕太郎, 熊田 衛, 志賀 健, 富田忠雄, 鳥居鎮夫, 西山明德, 広重 力, 本間三郎, 前川杏二, 松尾 理, 村上元彦, 山下 博 ・第62回生理学大会で教育シンポジウム(生理学の新しい分野への教育的展望)を開催。 ・生理学研究所研究会(医学教育と生理学)を開催。 ・H. D. Henatsch 博士(Göttingen 大学生理学教授)の講演会(西独の生理学教育)を開催。 ・第63回生理学大会で教育シンポジウム(特別研修制度)を開催。 ・第64回生理学大会で教育シンポジウム(生理学教育の中で「死」をどのように捉えるか)を開催。
S 62 ~ S 65 (1987~1990)	委員長：中野昭一 委員：富田忠雄(副委員長), 入来正躬, 神野耕太郎, 久野 宗, 栗原 敏, 小坂光男, 志賀 健, 西山明德, 広重 力, 本間三郎, 榊村純生, 松尾 理, 松村幹郎, 村上元彦, 安原基弘 ・第65回生理学大会で教育シンポジウム(総合カリキュラムの中での生理学教育を考える)を開催。

### 9. 日本学術会議との関係

日本学術会議に対しては生理科学研究連絡委員会が窓口となって対応している。昭和57年(1982)5月に生理科学研究連絡委員会委員長は勝木保次氏から本間三郎氏になった。昭和61年(1986), 本間三郎氏が日本生理学会の推薦により学術会議の会員に選出され, 第7部長に就任した。この間, 生理科学研連シンポジウムとして昭和57年(1982)に「生理科学研究の動向」「生体の神経系と体液性の関連調節」, 昭和58年(1983)「病態の生理学的基礎」, 昭和62年(1987)「宇宙医学, 生理学の現状と将来」を開催した。昭和63年(1988)7月20日までの生理科学研究連絡委員会(13期)の構成は次の通りであった。

委員長：本間三郎  
幹事：伊藤正男, 大村 裕,  
星 猛

委員：江橋節郎, 川村 浩,  
久野 宗, 佐伯 欽,  
佐藤昌康, 渋谷達明,  
中馬一郎, 塚田裕三,

昭和63年(1988)に伊藤正男氏が日本生理学会より推薦され, 学術会議会員に選出された。同年9月22日よりの委員会(14期)は次のメンバーにより構成される事になる。

委員長：伊藤正男  
幹事：本間三郎, 本郷利憲,  
佐藤昭夫  
委員：宇尾野公義, 大村 裕,  
加藤元博, 久野 宗,  
酒井敏夫, 武重千冬,  
本田良行

## 10. 国際生理科学連合(IUPS)との関係

IUPS に対しては、日本学術会議が窓口となっていて対応している。昭和57年(1982)に、IUPS の理事が勝木保次氏から伊藤正男氏に交替した。

昭和57年(1982)、これまで総額3,000ドルであったIUPS 分担金が5,000ドルに増額となった。更に、昭和60年には、一人当たり2ドルから3ドルに増額し、総額7,500ドルに、昭和62年には8,160ドル、昭和63年には8,700ドルと年々増加している。昭和63年現在の分担金8,700ドルは、アメリカに次いで2番目に多額で、デリゲートとして5名の派遣が可能となった。

## 11. 神経科学協会との関係

日本生理学会と関係の深い、国際脳研究機構(IBRO)への協力と、国内における神経科学の広く学際的研究の発展をはかるべく、昭和49年4月に日本神経科学協会(会長:勝木保次)が設立された。昭和58年8月より会長は伊藤正男氏に引き継がれた。神経科学協会の会員は8つのパネルに分類されており、パネルは以下のごとくである。1. 神経解剖学、2. 神経化学、3. 神経内分泌学、4. 神経薬理学、5. 神経生理学、6. 行動科学、7. 神経情報伝達と生物物理、8. 神経病理学。

日本神経科学協会の英文機関誌として、「Neuroscience Research」(主任編集委員:伊藤正男)が、昭和59年(1984)よりElsevier社より刊行され、現在5巻6号まで発刊されるに至っている。

現在、協会は専門会員649名、一般会員201名、賛助会員19団体、名誉会員1名より成り立つ。神経科学学術集会が毎年開催されており、本年は第12回学術集会(集会長:永津俊治)が名古屋で行われる。

## 12. 動物実験に関する委員会

日本生理学会では昭和62年4月「動物実験に関する委員会」(委員長:塚田裕三)を発足させ基本的指針の策定に当たってきた。昭和63年4月開催の委員会で成案を得、常任幹事会に提出

し、一部修正の上、日本生理学会案「生理学領域における動物実験に関する基本的指針」(Guiding principles for the care and use of animals in the field of physiological sciences)として日本生理学雑誌(1988年)に公表した。

この案の作成にあたっては、国際的に通用するものであること、できるだけ簡単なものであること、生理学には動物実験が必須であること、の3視点に留意された。

現在の委員会の構成は次の通りである。

委員長:塚田裕三

委員:入来正躬, 大村裕,  
金子章道, 菅野富夫,  
久野宗, 久保田競,  
辻繁勝, 登坂恒夫,  
広重力, 本郷利憲,  
本田良行。

## 13. 生理学教室史(下巻)編集

生理学教室史編集委員会(委員長:酒井敏夫)は昭和57年(1982)までの日本生理学会の歴史と主な大学医学部生理学教室の歴史をまとめて日本生理学教室史(上巻)として昭和58年4月21日に刊行した。

昭和61年4月に望月政司氏を委員長とする新たな編集委員会が発足し、生理学教室史(下巻)を編集することになった。そこでは、新設医科大学、歯学部、研究所、その他生理学に関する講座などを幅広く紹介することになり、昭和63年度中に出版されることになった。

現在の編集委員会の構成は次の通りである。

委員長:望月政司

委員:菅野義信, 酒井敏夫,  
佐藤昭夫, 高比良英輔,  
竹宮隆, 山岸俊一。

## 14. 研究費委員会

研究費委員会(委員長:御手洗玄洋)では昭和58年より文部省科学研究費の分科細目を現行の3細目から4細目にする方向で検討を開始した。アンケート調査などを行った結果を検討

し、61年に分科細目に「中枢統合機能」の細目を増設することを決定した。この件につき、2月に生理科学研究連絡委員会に申し入れた。63年4月現在、この細目は学術会議にて重点項目として審議が行われている。

現在の委員会構成は次の通りである。

委員長:新島旭

委員:伊藤正男, 入沢宏,  
佐々木和夫, 佐藤昭夫,  
杉晴夫, 中山昭雄,  
御手洗玄洋。

## 15. 評議員選考委員会

委員長:本間三郎

委員:熊田衛, 高橋國太郎

## 16. 選挙管理委員会

委員長:竹内昭

委員:神野耕太郎, 本郷利憲

## 17. 会則委員会活動

日本生理学会の会則については、会則委員会(委員長:島津浩)で一部改正に取り組み、以下に示すような会則が昭和63年4月に評議員会にて承認された。

現在の委員会構成は次の通りである。

委員長:島津浩

委員:入沢宏, 岡田博匡,  
加藤正道, 久野宗,  
西彰五郎, 西山明德,  
本郷利憲, 本田良行。

### 日本生理学会会則

(昭和63年4月5日改定)

1. 本会は日本生理学会と称する。
2. 本会は生理学の進歩発展をはかることを目的とする。
3. 本会は毎年1回大会を開いて会員の業績を発表討議し、総会および評議員会を開いて会務を評議する。大会の開催は前もって全会員に通知し演題を募集する。なお会員は各所在地において適宜地方会をつくり、業績を発表討議することができる。
4. 本会は会員の原著、大会および地方会の講演抄録を発表するため邦文機関誌の日本生理学雑誌を発行し、欧文の The Japanese Journal of Physiology を編集する。
5. 会員は、本会の趣旨に賛成する同学者で評議員の紹介あるものに限る。会員は年額7,000円の会費を負担し、学会および機関誌に業績を発表することができる。また日本生理学雑誌の頒布を受ける。  
学校、図書館、研究所等の団体は準会員として年額9,500円の購読料を前納し、会誌の頒布のみを受ける。  
特別会員は多年本会に功勞のあった会員で、評議員から推薦され総会の賛同によって定められる。特別会員の会費は免除される。  
名誉会員は、本会に多大の貢献のあった外国人で、評議員から推薦され総会の賛同によって定められる。名誉会員の会費は免除される。
6. 本会の役員には評議員、常任幹事、当番幹事がある。
7. 評議員は本会の中核となる会員であって、評議員の推薦により選考委員会を経て評議員会に附議して決定される。  
評議員会は毎年大会の際開催され本会に必要な事項を評議する。  
評議員会は地区別に定数の常任幹事を選出し、日常および緊急の会務を委嘱する。
8. 常任幹事の中に庶務・会計・編集等幹事をおく。
9. 当番幹事は大会の開催を引受けた評議員であって、大会の一切の事務を行なう。大会終了後次回当番幹事に事務引継を行なって任期を終る。この任期中は常任幹事会の一員に加わる。当番幹事は大会開催中常任幹事会・評議員会および総会を招集しこ

れを司会する。

10. 常任幹事会は必要に応じて各種の専門委員会を設け委員を委嘱することがある。必要に応じその委員は常任幹事会に出席し専門事項の審議に参加する。
11. 本会の会計年度は毎年1月に始まり12月に終わる。
12. 本会の事務報告は総会および日本生理学雑誌に発表する。
13. 本会の事務所は東京都文京区本郷3-30-10 布施ビル(4階)内におく。
14. 本会則を変更するには評議員会の決議を経て総会の承認を得なければならない。

#### 附則

##### <常任幹事に関する事項>

全国を8地区に分け、常任幹事は各地区の評議員の互選により選出される。地区及び定員は下表による。任期は3年とし重任を妨げない。各地区の評議員は、地区の定員に相当する数以内の氏名を所定の投票用紙に記入して投票を行う。投票は無記名とする。投票用紙に同一氏名を複数記入した投票は無効とする。得票数同数の場合は入会順、年長順に順位を決定する。欠員を生じた場合は、常任幹事会の議を経た後、次点者を以てこれにあてることができる。この場合の任期は前任者の残任期間とする。選挙事務は選挙管理委員会に委嘱する。選出された常任幹事の氏名は日本生理学雑誌上に報告する。

幹事の選出区分	定員(計30名)
北海道地区	2名
東北地区	2名
関東地区(新潟を含む・東京を除く)	4名
東京地区	8名
中部地区	5名
近畿地区	4名
中国四国地区	2名
九州地区	3名

#### 内規

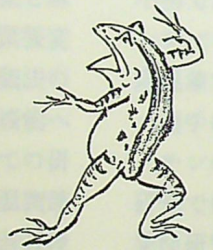
- 1) 評議員選考基準：多年本会員として在籍し相当の生理科学の業績発表があり、満5年以上の研究歴が

- あるもので本会評議員の推薦がなければならない。
- 2) 評議員は The Japanese Journal of Physiology を購読するものとする。
  - 3) 会費滞納の会員は会員の資格が自然消滅する。
  - 4) 庶務幹事は必要な場合に限り日本生理学会代表と称することができる。
  - 5) 常任幹事会で選ばれた2名の監事が本会の会計を監査する。

- 6) 本会に次の常置委員会をおく。日本生理学雑誌編集委員会、The Japanese Journal of Physiology 編集委員会、評議員選考委員会、選挙管理委員会。
- 7) 文部省科学研究費補助金審査委員候補者の選出方法は別に定める。
- 8) 臨時会費として3,500円を納めたものは、当該年度のみ、本会の主催する大会および地方会に会員と連名で業績を発表することができる。

熱帯医学雑誌に於ては、熱帯医学の発展を促進し、熱帯地域の衛生と医療の向上に寄与することを目的として創刊された。本誌は、熱帯地域の医学的進歩を促進し、熱帯地域の衛生と医療の向上に寄与することを目的として創刊された。本誌は、熱帯地域の医学的進歩を促進し、熱帯地域の衛生と医療の向上に寄与することを目的として創刊された。

熱帯医学雑誌は、熱帯地域の医学的進歩を促進し、熱帯地域の衛生と医療の向上に寄与することを目的として創刊された。本誌は、熱帯地域の医学的進歩を促進し、熱帯地域の衛生と医療の向上に寄与することを目的として創刊された。



熱帯医学雑誌は、熱帯地域の医学的進歩を促進し、熱帯地域の衛生と医療の向上に寄与することを目的として創刊された。本誌は、熱帯地域の医学的進歩を促進し、熱帯地域の衛生と医療の向上に寄与することを目的として創刊された。

熱帯医学雑誌は、熱帯地域の医学的進歩を促進し、熱帯地域の衛生と医療の向上に寄与することを目的として創刊された。本誌は、熱帯地域の医学的進歩を促進し、熱帯地域の衛生と医療の向上に寄与することを目的として創刊された。

# 付 録

熱帯医学雑誌は、熱帯地域の医学的進歩を促進し、熱帯地域の衛生と医療の向上に寄与することを目的として創刊された。本誌は、熱帯地域の医学的進歩を促進し、熱帯地域の衛生と医療の向上に寄与することを目的として創刊された。

## 生理学談話会の歴史的推移 (I)

### 1. 生理学東京談話会小史

——草創期と戦後の変遷——

市 河 三 太

(昭和大学医学部第二生理学教室)

酒井編集委員長から、生理学東京談話会小史を書くように依頼を受けた。談話会に余り出席していないが、次の談話会の当番幹事であるから、この機会に談話会のことを少し勉強しろと云われて引受けざるを得なくなった。

私は昭和17年(1942)、慈恵医大に入学すると同時に生理学会に入会し、西丸和義先生の主管する脈管学研究室(当時は臨床検査室と云われていた。)で血管生理学の実験を始めた。その頃、西丸先生の所で第31回生理学東京談話会が開催された。その手伝いをしたこと、名前は色々聞いているが逢ったこともない立派な生理学の先生方などに紹介されて感激したことなどを覚えている。また、生理学余外集や試道集、生理学評論などに目をとおり色々感激したことをなつかしく思い出す。特に余外集で見た戸塚武彦先生の“生理的と生理学的”という随筆などは今でも、うっすらと覚えている。私が生理学をやることになった芽生えも、このような経験から生じたものであろう。以上のようないきさつから談話会の歴史を振り返る興味もあるわけで、この小史の執筆を引き受けた次第である。

さて、生理学東京談話会についてであるが、それには胎動期のことを知らねばならない。日本生理学会の沿革については、名取禮二(以後本文中の先生方の敬称は凡て略します)が日生誌35, 697に書いている。“明治35年(1902)に開かれた第1回日本聯合医学会の時に学会が芽生え、大正11年(1922)7月に医化学、薬物学との共同学会から独立して、第1回大日本生理学会が東大で開かれている。”同じような長い胎動期が、生理学東京談話会にもあった。

### § 東京生理学雑談会と余外集の刊行

昭和9年(1934)5月5日、同好の士の親睦ならびに意見交換のため会合をもちたいと、福田邦三、福原 武、林 隼、久保盛徳、西丸和義、鈴木正夫、杉本良一、戸塚武彦、内山孝一の9名が発起人となり、生理学雑談会を結成し、全国医科大学、研究所に勧誘状を出した。5月13日に赤坂の幸楽に於て、日本生理学雑誌発刊の件、雑談会会規、幹事、評議員の件などについて相談をしている。会規の第一にある目的の項では、生理学研究に役立つような雑談をし、且つ会員相互の親睦を計るため、定期的に会合を催すとある。この他に、大日本生理学会として軽々しく動くことができないことも、生理学雑談会としては案外呑気に手をつけられるので、生理学会を援助しようということも含まれている。会食の後、江戸時代末期の生理学文献と題して内山孝一が、また、英国の生理学会について東 龍太郎が講演を行なっている。第2回は7月19日9時から29名が徳川生物研究所に参集し、研究所内を参観後、脾臓の生理について西丸和義が講演を行なっている。ついでに、この時の会計を見ると、前回残額に加えて参加者が1名1円宛会費を出し、合計46円10銭、支出19円80銭であったという(余外集第2号)。

この東京生理学雑談会が生理学余外集を刊行したのは昭和9年(1934)7月1日である。編集は内山孝一で、慶大生理学教室内生理学雑談会が発行所となっている。余外集発行の目的の第一は、日本生理学会で日本生理学雑誌創刊を促進することであった。

“言語に死活なくして句に活死あり、之を人に一任す。科学を会得せんとせば須らく先づ言

語を生々たらしむべし、他なし其の人を識るにあるのみ。凡そ科学は理智の極むる所にして人の人たる理智にあると云ふを得可けんも、科学のみを通じて識らんこと難し。蓋し人に情あり、意あり、意の響り所情の溢るゝ所自ら言句となる。理智よりして之を觀れば餘外に過ぎずと雖も、しかも人の全幅始めて躍如として現前す。故に人を識らんと慾せば餘外を見るに如くはなし。之を餘と云い外と云う赤心の片々なり。”とは橋田邦彦の余外集創刊の辞である。これを“生理学者は理智と共に情意をもっている人であるから、情意が流露しておのずから言葉となって表現されるようになる。理智からみれば情意は餘外であり、絵で云えば餘白のようなものであるが、この餘外と考えられるものを含め、知情意の表現によって、その人の生理学者としての、ひとの全幅がはじめて躍動として表現されるのである”と内山孝一が現代語に訳している(日生誌 35, 730)。この“余外”が今の人に軽視ないしは無視され勝ちであるように私には思えてならない。極めて能率的? であり、無駄ということをしていない現代の若い研究者をみているとこれで良いのかとさえ思えてくる。もう少し余外を大切に、無駄な仕事をやり巾広い大きな研究者となって貰い度いと思ふのである。

余外集は、米国生理学会発行の Physiologist とよく似た内容であるが、生理学雑誌発行に対する熱意の他、当時の若き生理学者の人生観から、生理学に対する熱情のほとぼしりが綿々と現われている。最近、これが復刻されることが決ったようであるが、生理学雑誌誕生前の姿として、またかつての若き生理学者の情熱を知る意味でも、私はこの復刻を喜ぶもの一人である。

生理学雑誌の第3回は、昭和9年(1934)8月28日にヘーリング百年記念祭として開催される予定であった(余外集1, 3, 4号)が、延期され結局11月24日千葉医大において34名を集めて開かれた。教室員の実験供覧、講演、生理学雑誌発行の議事などが行なわれた。昭和10年

(1935)2月24日の日曜日に第4回雑談会が、新宿中村屋で開催、川上理一による“ロトカの人口解析学”という講演に次いで生理学雑誌発行の議事が行なわれた(余外集2, 1号)、生理学雑誌発行の費用の調達などの苦勞がしのばれる。第5回は W. B. Cannon の講演会と晩餐会として6月26日内幸町の大坂ビルで開催された。260名という雑談会空前の大会であった。演題は「感情の生理学的根拠」で、“通訳を極めて平易にいたしますから、どなたも御出で下さい”と案内状に書いてあるのも今から見ると面白い。Cannon 氏送迎3回分のタクシー代が1円50銭の時代の話である。第6回は京城で生理学会の開かれた時、すなわち昭和10年(1935)10月4日に行なわれたとある。この会合で大日本生理学会が雑誌発行を行なうことが決定され、生理学会の評議員会に提出されることとなり、生理学会による生理学雑誌発行が文字通り正式に決定されて、雑談会推挙の橋田邦彦、浦本政三郎、および、戸塚武彦が雑誌編集委員となっている。そして翌昭和11年(1936)2月に待望の大日本生理学雑誌が刊行されることになるのである。雑誌は第3巻迄は紙質も最高のもので用いられ、岩波書店から出ている科学と同じであった。50年経った現在も、私の蔵書を見ると、しっかりしている。これに対し、10巻頃のもの、もはや黄変しポロポロになりかかっている。

生理学雑誌発行の時点で余外集の発刊およびその母体である雑談会は、もう止めてもよいのではないかという意見も出てきたが、益々発展せねばならぬという意見もあり“余外”の方面を余外集に出すべくその存続が決るような次第であった。第6回雑談会は昭和11年(1936)5月17日の日曜日に京橋の八重州園で24名が集まり、雑談会、余外集の存続が決定された。このように記録によると第6回雑談会が重複している。第7回は6月28日、47名が集まり、実験法とでも云うべきものについて話しをしている。戸塚武彦は、“これぞ皆一騎当千の四十七士であろう。いずれをみても一癖あり気な猛者揃

い”と余外集8, 11号に記事をのせている。第8回は12月18日慈恵医大において、教室公開、実験供覧、講演の後、忘年会を行っている。第9回は昭和12年(1937)3月9日、赤坂幸楽において開催された。余外集をみると、第14回会合が昭和12年7月6日に東大生理学教室で開催され、議事討論が行なわれたとあるが、これは第10回の誤りであろう。同年11月7日に、第11回雑談会が慈恵医大、臨床研究室で54名を集めて開催され、綜説的な講演7題と実験供覧が行なわれた。演題、演者などの記録は余外集終刊号(3, 8, 9号)に見られる。

### § 生機学談話会と機発会

昭和8年(1933)、橋田邦彦の生理学講義を聴講した若手生物学者、井上清恒、川本信久、八木誠政、末広恭雄らが、橋田の提唱による生機学という言葉を取り、生機学談話会を発足させた。会長に橋田邦彦がなっている。“動物又は農科出身者で生理学に興味をもつ人達である。死んだ標本をいじくっているだけでは本当の意味の生物学は判らぬ。生きたまゝの事を知り度いという慾求から生じたもので、色々な方面の専門家を呼んで毎月例会を開いたのである。”“我国の動物学、植物学、医学、農学らが、おのがじし小さな殻にとじ籠って互に交際をしようもしない事を遺憾に思った人達である”と本川弘一は記している。会費は年2円、例会費30銭で会員は60名程で、毎例会30~40名の出席者があった。会合は東京大学生理学教室の会議室で第4木曜日の夜と大体決って居た。記事は養賢堂発行の「植物及動物」の生機学談話会欄に掲載され、その別刷を以て会報としていた。この談話会の件については、試道集4月号および5巻1号に本川弘一が、また日生誌35, 733に若林 勲が記述している。試道集4月号の記事によると昭和9年度の例会内容は次のようである。

1月 自然(橋田邦彦)、2月 座談会(寺田寅彦)、3月 血液型(三田定則)、5月 凝膠体の化学(鮫島実三郎)、6月 座談(橋田邦

彦)、9月 人工癌の研究(佐々木隆興)、10月 ゲル効果とその応用(提 秀夫)、11月 両棲類初期発生生理学の最近の進歩(佐藤忠雄)、12月 家蚕に於けるモザイク生成機構(勝木喜董)

何れもその界の第一人者で、今日このプログラムを見せられたら是非聞きに行きたいもの許りである。若林 勲の記述には昭和17年(1942)迄に行なわれた講演題目が記されているが、これによると上記の例会は昭和10年(1935)に開催された会合の題目である。手元に記録がないのでこの談話会が昭和8年から開催されたのか、9年からなのか詳しいことはわからない。何れにしろ、この生機学談話会の会員も殆んど東京生理学雑誌会の会員であり、“若手研究者が毎月集まり親しくなり議論などして意気さかんであった。自分の畑以外から何かを得られないかと考えた。……しかし楽しい時代であった”と若林は回顧している。試道集5, 1号に本川がこの会についてのその後の様子を簡単に記している。生機学談話会も第二次大戦直前まで続いた10年近くの歴史を持つ会合であった。

一方、東京および近郊の生理学会会員で主に教職にある一定年輩以上の人々で作られた会がある。昭和13年(1938)1月15日に暉峻義等、浦本政三郎、戸塚武彦3氏の肝煎で第1回の会合が虎の門、晚翠軒で行なわれ、年4回会合をすることとなった。第2回は10月22日に行なわれ、橋田邦彦によりこの会を機発会と命名され、“和を以て尊しとなす”がこの会の第一義であることが明らかにされた。当時の会員は橋田邦彦、暉峻義等、加藤元一、中西政周、浦本政三郎、坂本嶋嶺、久保盛徳、東 龍太郎、福田邦三、戸塚武彦、鈴木正夫の11名である。第3回は昭和13年(1938)12月22日に東京生理学談話会の第1回会合と合併、開催され、第4回は昭和14年(1939)1月15日、田端で懇親会をもっている。生理学各教室の教育上の問題、薬理学、医化学との相互連絡、生理学会の演題を制限するにはどうするかなどが話題になったと、試道集4月号に記されている。試道集11月

号には第4回機発会が10月21日夕刻より、田端で開かれ、橋田、坂本、久保、戸塚、中西、浦本の6氏で懇談を行ない、次回は、翌年1月に開催することが決められたとある。その後の記録がなく、昭和17年(1942)6月16日に第7回が虎の門晩翠軒で開かれ、会員の年令を40才に引き下げたと、生理学評論2巻の試道欄4頁に記されている。

### § 東京生理学談話会の成立と試道集

昭和13年(1938)4月、第17回日本生理学会総会の折、生理学雑談会が途絶えたため、何らかの形で年2~3回会合を開こうという話しが出された。これに対し福田邦三は、東京部会を開催したらという案を出したが、部会となると少し堅くなり、報告、演説の抄録を生理学雑誌にも出すこととなるので行き悩んだ。そこで戸塚武彦が、それでは雑談会を別の形で継続しようという案を出し、東京生理学談話会と名付けた。一方、余外集の方も新しい会で引継いだらということになったのである。生理学余外集は、第3巻8、9号を以て昭和14年(1939)10月に終刊となり、生理学試道集として引き継がれた、発行者は浦本政三郎で事務所は慈恵医大生理学教室である。

余外集第3巻8、9号の次は試道集4月号となった。ここに第1回東京生理学談話会開催通知がのっている。“予ねて東京には生理学雑談会がありまして、日本生理学界の爲め色々の企画をやって頂きました。……雑談会の最も主眼とした日本生理学雑誌の刊行促進は所期の目的を達しました。同会は主として東京における日本生理学界中堅の方々によって企画されたのでありましたが、日本生理学界も段々成長して参りましたので、オフィチアルにならざる自由な型に於てもっと全体的なものを作った方がよからうという雰囲気になり、私共にやれという事になりましたので……、談話会の設立は本来日本生理学発展のための非公式な団体であることでもありますので、今後の会合にしても雑誌にしても各位の充分なる御理解と御援助を得なけ

ればうまく行かない事と思えますから……”は案内状の抜粋である。

第1回東京生理学談話会は昭和13年(1938)12月22日慈恵医大生理学教室で行なわれ、経過報告、久野 寧の帰国談などがあつた。第2回は翌年2月28日、東大生理学教室において講演4題と実験供覧、自己紹介などが行なわれたが、この時、談話会を発展させて地方会をやれば演題過剰に悩む生理学会の苦難も解消するだろうという話しが出ている。第3回は4月2日熊本において第18回日本生理学会総会の折に開催された。第4回は5月28日に東大生理学教室において開催、今後の会の運転、会の名称を東京生理学談話会では、東京生機学談話会と間違いやすいから、生理学東京談話会にしてはどうか、いやもっと大きく生物科学談話会としてはどうかなどについて、話し合いが行なわれたことが試道集5月号に詳しく記されている。

### § 東京生理学談話会から生理学東京談話会へ、生理学評論の刊行

第5回東京生理学談話会は昭和13年(1938)5月19日、日本医大で開催され、会の名称を生理学東京談話会とした。毎月19日に原則として東大生理学教室で開催、東京ならびに近郊の大学が一単位となり、当番幹事となって開催の世話をやく。7、8月および生理学東京地方部会開催の月は休会とし、会員は年額3円を払い、生理学試道集の配布を受けることなどがこの時、決っている。なお、昭和14年、第18回生理学会で200題以上にもなった演題をこなすため、年4回(内2回は東京、2回は地方)地方部会を開催することが決定され、同年暮、12月16日に東大において生理学会学術小講演会が開催された(日生誌5, 153)、翌15年(1940)9月29日に第2回が大阪で、16年(1941)4月10、11日に東大において第3回講演会が、12月26日に第4回が慶応大学で開催され、演題により5~30分の時間が割り当てられ、昭和17年(1942)11月には東北大学で小講演会が開催された。(日生誌5, 6に内容要旨が記載、第4回迄は生理学評論

にも演題が記されている)。なおまた、昭和16年(1941)6月17日に仙台で実験生物学談話会が本川弘一の提案で誕生している。これは東京生機学談話会を真似たもので、研究室を横に連絡する会であることが試道集(5, 7号)に記されている。また生理学地方部会について本川弘一が試道集(5, 3号)に提言を行っている。

さて、生理学東京談話会が生理学評論を刊行したのは昭和16年(1941)2月11日である。編集者は浦本政三郎で事務局は慈恵医大生理学教室におかれ、岩波書店より刊行された。“日本生理学会も亦茲に20周年の学会を迎へんとし、新たな体制が要請されている。……余外集は日本生理学雑誌の刊行を促すことによって役目を果たしたが、今や試道集は……生理学評論、年鑑の如きを発行せしむる充分の義務がある。……本誌の内容は綜説と展望を主役とする。”“今や試道集は日本生理学評論を産むこととなった。……ここに試道頁を設け、従来の如く、実験の回顧、思索実験、書評、学会記事、教室通信、同学消息などを網羅し、学人の視野を拓げ、思索助長の一端とするのみならず、日本生理学の歴史の歩みの跡としたい……”と浦本政三郎は生理学評論創刊の辞の中で述べている。これからもわかるように生理学余外集を引き継いだ生理学試道集は、昭和15年(1940)12月発行の第5巻9号(12月号)を以て終刊となっている。この5巻というのは生理学余外集からの通巻の数

字である、生理学評論は Physiological Review ないしは Annual Review of Physiology のようなものであり、その目次は日生誌35, 720に見られる。しかしこの評論も戦時のため、第2巻で廃刊となり、復刊の計画もない。現在の日生誌にみられる綜説、展望などにその形跡を留めているに過ぎない。浦本政三郎の“日本生理学の歴史の歩みの跡としたい”という考えは、生理学100年史の編集となる。実はその第二部として、生理学研究をその起源より探り map を作るという考えがあつた。研究の流れを研究題目の面より画くのである。その見本として、動物性機能、植物性機能を円の中心に置き、研究課題がその外輪に、そして最も外輪に九大板垣、千葉鈴木などと画かれているのを私はどこかで見たことを覚えているが、どこに出たか詳らかでない。何れにしても第一部の研究者を中心とした生理学の歴史は、内山孝一、名取禮二、酒井敏夫と引継がれ、昭和58年(1983)日本生理学教室史上巻として刊行されたことは記憶に新しい。

### § 生理学東京談話会

以上述べて来たような胎動期、0才期をへて生理学東京談話会は成長して来た。次に第1~60回迄の談話会開催年月日と当番校あるいは会場を記しておく。重複している所があるがこれは記録にあるとおり忠実に記した。

1.	昭和13年12月22日	慈恵医大	談話	
2.	昭和14年2月28日	東京大	母音合成に関する実験供覧 単一筋線維の収縮について 筋縮機構と不等質部の変化について 単時間持続する電流の作用 (刺激についての新しきイデー)	富田 恒男他 巨田 泰信 杉本 良一他 坂本 嶋嶺
3.	4月2日	熊本医大	自由談話	
4.	5月28日	東京大	中北支視察談 談話会の今後の運転について雑談	鈴木 正夫
5.	5月19日	日本医大	談話会の種々な問題について談話	
6.	6月19日	千葉医大	情緒生理学に於ける問題	中西 政周
7.	9月23日	慶応大	大脳皮質と自律神経との関係 動物と植物との興奮の比較	林 巖 本川 弘一

7.	10月19日	東京大	発声機構と語音調節	颯田 琴次
9.	昭和15年1月19日	東京大	談話	
10.	2月19日	慈恵医大	談話	
11.	4月9日	千葉医大	日本生理学会のため上京した諸氏と談話	
12.	5月19日	東京大	核電導体模型について	江上 義之
13.	6月21日	東京大	刺激度の閾の測定法に関する実験	坂本 嶋嶺
14.	7月16日	東京歯科専	隔壁誘導法による電気生理学的実験	杉 靖三郎
15.	9月19日	東京女子医専	中性子 Neutron の生物学的作用	村地 孝一
16.	11月7日	公衆衛生院	ドイツ医学の近況	石橋 長英
16.	12月	東京医専	欧米の生理学教室	松岡 修吉
17.	昭和16年1月28日	日大歯	胼胝体の機能に関する私共の研究	林 謙
18.				
19.	2月26日	慈恵医大	自由談話 (大阪レインボーグリルにて)	
20.	3月24日	蚕糸試験場	カイコの血液循環について カイコ血液の還元力について	横山 忠雄 桑名 壽一
21.	4月10日	日本医大 (学士会館)	懇談	
22.	5月27日	徳川生研	呼吸の化学仕事について	宮田 博
23.				
24.	9月29日	植物生理化学 研究所	植物の同化作用について	柴田桂太郎
25.	10月28日	東京大	働作流の波形について	小溝 協三
26.	11月19日	日本医大	有髄神経線維に於ける刺激と動作流と興奮伝導	田崎 一二
27.	昭和17年2月19日	慶応大	Vitamin A および Provitamin A について	藤田 秋治
28.	3月29日	精養軒	生理薬理合同懇親会 日本薬理学史 日本生理学史	林 春雄 浦本政三郎
29.	4月24日	東京歯科専	硬組織の縞模様と生物の週期生	岡田 正弘
30.	5月22日	千葉医大	ウニの卵膜の電気容量および透過性の受精による変化	飯田 俊武
31.	6月20日	慈恵医大臨研	アドレナリンの定量	佐藤 照
32.				
33.	昭和18年	(奥)		
34.		日本医大(戸塚)		
35.	6月	慶応大(久保)		
36.	7月	慈恵医大(杉本)		
37.	9月	千葉医大(鈴木)		
38.	10月	帝国女子医専(森?)		
39.	11月	労 究(勝木)		
40.	昭和19年1月	厚生省研究所(石川知福)		
41.	2月	慈恵医大衛生(矢崎芳夫)		

42.	6月	東京大		
43.	10月	東京大		
44.	12月	日本医大(戸塚)		
45.	昭和21年3月	東京医歯専(暉峻, 浦本, 戸塚)		
46.	5月	労 研		
47.	7月	公衆衛生院(石川知福)		
48.	10月	慈恵医大脈研(西丸)		
49.	昭和22年2月	千葉医大(鈴木)		
50.	6月	慶応大(林)		
51.	10月	東京大		
52.	12月	日本医大(戸塚)		
53.	昭和23年2月	東京女医大(富田)		
54.	4月	慈恵医大(杉本)		
55.	6月	徳川研究所		
56.	9月23日	東京大		
57.	10月31日	日本大歯科(栖原)		
58.	12月4日	東京医歯大(山極)		
59.	昭和24年1月22日	昭和医大(井上)		
60.	5月28日	日本大(内山)		

第1~16回返は試道集に、第16~31回返は生理学評論に18, 23回を除いて、記録が残っている。しかし、第33~55回返は、生理学談話会記録に、回数、年月、当番幹事の名が記してある一枚の紙片として添付してある他に記録が見当たらない。第56~59回は日生誌11巻に演題が記してある。第60回以後は日生誌12巻以後に、抄録が記載されている。演題、会計、出席者名は、第61~105回は談話会記録第1冊に、第106~160回は第2冊に記録され、生理学会事務局に保存されている。第161回以降は、談話会記録第3冊として、現在、当番幹事の持ち廻りとなっている。

前述の如く、昭和13年(1938)12月22日、慈恵医大生理学教室で第1回談話会が開催され、第2回から、講演、談話、教室開放、実験供覧、議事などが行なわれていた。第28回は昭和17年(1942)3月に上野精養軒で、生理学会、薬理学会の合同懇親会が開かれ、169名が会合している。このように学会懇親会の役割りも初期には果していた。昭和19年(1944)12月以後、戦争のため1年3ヶ月開催が中断されたが、昭和21年(1946)3月、東京医科歯科専門学校で

特別例会と称し、暉峻、浦本、戸塚が当番幹事となり第45回談話会を開いている。多分、終戦後6ヶ月を経て再開の計画を立てたのであろうと思われるが記録がないのでわからない。第46回は労働科学研究所で5月に開催された。

第60回は昭和24年(1949)5月28日に日大で行なわれ、それ以後は日生誌に抄録が記載されており、完全な地方会の様式であることがわかる。これを裏付けるように昭和24年頃から中四国、近畿、北海道、九州などで、それぞれ生理学談話会が開催されるようになった。すなわち、昭和24年(1949)6月24日には第1回札幌談話会、10月16日には第1回中国四国談話会、11月26日に第1回九州談話会、昭和25年(1950)10月1日に第1回近畿談話会が開かれている。

東京談話会では発表、討論などの時間には全く制限がなく、時には一つの演題に一時間以上も費されたことがあった。したがってプログラムにのって居ても次回に廻される場合もあり、またそれを承知で演題を出したものである。参加者からは大体会費を50~100円受取っていた。私の記憶によると受付で菓子袋を受けとり、会場で菓子を食べ、日本茶をのみながら話しを開

いたこともある。今ではこのような行儀の悪いことはせず、休憩時間に茶菓が出される。参加費はとられないこともしばしばあった。また休憩時間に評議員会を開き、次の当番校を決めたり、何かことがあった場合に相談をもちかけることもある。ここに雑談会の面影が残っている。また別に評議員会も開かず参加者全体に次の当番校について相談することもある。これは全て当番幹事にまかされているのは会の発足以来の伝統である。最近では、会合も片苦しくなり、雑談会の面影もうすく、講演にも時間制限がみられるようになり、せち辛い時代を表徴している。

第71回は昭和医大において昭和25年(1950)12月16日、井上清恒によって行われているが、この時のプログラムの下に食券、茶菓券とミンソンの目が入っているのは面白い。第97回は群馬の松本政雄が伊香保温泉で会合をもっている。昭和29年(1952)8月25日のことである。10題の一般演題につづき、午後8時から生理学自由談話会と称し“生理学上の問題に就ての自由談話を行ない、10時半に閉会している。松本政雄の鉄と硝酸による模型の映画と、名取、竹中、鈴木、高木、伊藤、福田、若林らの談話があった。次の第98回は千葉大学の鈴木正夫の当番で、国立農業技術研究所を午前に見学し、昼食は研究所内の草原で弁当を食い、午後談話会を行っている。午後の休憩時間に“魚の全体刺激”という実験供覧が行なわれている。9月23日のことである。

第104回は昭和30年(1953)8月28日に第1回生理学中部談話会と合併し、信州松本において116名を集めて開かれた。和合卯太郎の当番である。演題数は27で、翌29日には29名がバスで上高地に遊んでいる。第124回は、昭和33年(1958)1月25日に昭和医大で午前10時30分から井上清恒、市河三太により開催され、特別談話として、広島大の西丸和義がアメリカとことごとく題し、2時間に渉って話しをしている。この頃は一日を費した時も時にあったのである。第143回は、昭和36年(1961)8月25日、椿

山荘に115名を集め、The 143rd Official Meeting of the Tokyo Physiological Society と称して、Eyzaguirre, McIntyre, Hunt 3氏の講演が、鈴木正夫司会の元で行なわれている。第144回は東京医科歯科大学で勝木保次、市岡正道が当番で9月23日、Eldred, Laport, Boyd, Cooper 4氏の講演があり、終了後ビールパーティーを開いている。参加者82名。

第151回は昭和37年(1962)10月20日、第8回生理学中部談話会と合併し、和合卯太郎、宮川清の元で46名を集め信州松本で開催された。演題10題に加え、戸塚武彦、大原孝吉の特別講演、さらに“第22回万国生理学会に出席して”と内山孝一が講演をしている。なお、第23回IUPSの会議は東京で開催されている。翌10月21日はバスで上高地の紅葉と北アルプスの新雪を觀賞している。第154回は東大で東京医学会と共催で Eccles の特別講演を聞いている。この頃迄は談話会の開催通知を全国120ヶ所程に出していたらしい。しかし、それ以後は関東一円、信州、山梨、新潟に出しているようで、現在は以上地区の大学の研究室単位、定年退職後の評議員、その他通知を希望された薬理学、動物学、体育医学の研究室など120ヶ所に案内を発送している。

昭和47年(1972)10月28日に第198回生理学東京談話会が東京女子医大で行なわれた。特別講演一題に次いで、本間三郎の生理学会会則委員会報告について討論がなされている。これ以後5年間、理由ははっきりしないが東京談話会の開催は中断されている。生理学会が少し動揺した時のように思える。日生誌にも34, 716に第194回の談話会抄録が見られた後、日生誌40, 65の第199回談話会抄録迄は記載がない。195~198回の内容は、生理学談話会記録第3冊を見るより方法がない。

昭和52年(1977)10月1日、慈恵医大において増田允、酒井敏夫により生理学東京談話会は復活されるのである。この第199回談話会で、13題の一般演題をかかえたため、内4題は次回に廻された。第200回は昭和大学歯学部の松本

政雄により12月10日に開催され、持越しの4題に加えて3題、計7題の講演が行なわれた。ここで久し振りに教室縦覧、実験供覧が行なわれた。教室を見学に来た人は10名を越し、昼食をともにし、松本政雄著の「神経模型」が配布された。この方法は談話会初期の形式である。この時松本は生理学東京談話会の歴史について、一枚の紙に記し、“この会は成文化された会則が全くない“無会則の会”で会員の良識と慣習によって200回、数十年にわたって続けられた珍しい会であります”と結び、これを参加者に配布した。

### § 結 語

以上のように、生理学東京談話会は、生理学雑談会として、気まゝな飾り気のない自由な会合として発足し、余外集を刊行、生理学雑誌の産婆役を果たした後も、東京生理学談話会として試道集の刊行から生理学評論を刊行し、東京生機学談話会、機発会を吸収し、また地方会開催の刺激となりつつ、漸次東京地方会の性格を強めて行った。昭和48年(1973)から丸5年間、開催が途絶えたが、再開後は年5~9回という開催回数も、年2~4回に減少している。これは昔と異なり、研究会、各種の学会、科研費の発表会などと会合が多くなり、同学者間の連絡の場が多くなったこと、学問が細分化され奥深くなったことの当然の成り行きであろう。そこで当番幹事は何とかして会を盛大にと頭を悩ませる。シンポジウムを組み、来人外国人の特別講演を行うなどして苦勞している。

歴史を書くには史実に忠実で、しかも筆者の歴史観、あるいは哲学がその流れの中に現われなければ、書いた意味は少ない。しかし生理学東京談話会の歴史を振り返ってみると、凡そ考えられる全ての試行が行なわれ、ある時は減衰し、ある時は増強されている。その原因も簡単には解析できない。私がこれ以上駄筆をとる事は無用と思える。生理学東京談話会をどのよう

にしたらよいか、そのあり方はどうすれば良からうか?、私には良い智慧も浮ばないし、良い考えも浮ばない。只、彼れこれ半世紀を過ぎようとする伝統の焰を絶やすことだけはせず、思行錯誤を重ね、初心を忘れることなく、同学の士の楽しい会合として行けば良いのではなからうか。

昭和59年(1984)6月2日、私と武重千冬、市岡正道が当番幹事となって第217回生理学東京談話会を開催した。始めは2月に開催の予定であったが、3月末に群馬大学で生理学大会が開かれ、この時は演題提出に制限が全くつけられなかった。したがって2月開催は不相当と考え6月に延期した。演題募集を行なったが一向に集まらない。さて、どうしたものかと悩んだが、演題メ切日になって次々と葉書が舞い込み、遂に9題となり、不本意ながら、時間制限を一応つけざるを得なくなった。談話会とはこのようなものでもある。

最後に生理学東京談話会誕生前後の年表と61回以後の開催日、参加者、会費、当番校を抜粋してみた。

東京生機学談話会	1934年1月~1942年?
東京生理学雑談会	1934年5月13日~1937年11月7日(11回)
生理学余外集	1934年7月1日~1939年10月(第3巻8, 0号)
日本生理学雑誌	1936年2月→
機 発 会	1938年1月15日~1942年6月16日?
東京生理学談話会	1938年12月22日~1939年5月28日(1~4回)(5月は4月の誤りか?)
生理学東京談話会と改称	1939年5月19日→(5回→)
生理学試道集	1939年3月(4月号)~1940年(第5巻9号, 余外集と通巻)
生理学評論	1941年2月11日~1942年(第2巻3号)

回	一般演題数	年 月 日	参加者	会 費	時間制限	当 番 校
61	7	昭和24年6月26日	52			横浜市大
70	10	昭和25年11月25日	43	130		東京医科歯科大
80	9	昭和27年4月19日	80			東京医大
90	3及婦期談	昭和28年10月24日	85	50		東京大
100	5	昭和29年11月28日	40			順天堂大
110	9	昭和31年6月23日	80	50		順天堂大
120	6	昭和32年7月27日	57	50		日本医大
130	9	昭和34年2月7日	72	50		日本大
140	シンポジウム	昭和36年1月28日	90	50		東京医大
150	特別講演	昭和37年9月18日	78	400		東京大
160	5及シンポ3題	昭和39年5月30日	102	50		慶応大
170	6	昭和41年4月28日	30			労研
185	シンポジウム	昭和44年11月15日				慶応大
190	9	昭和45年11月28日	32		15分	東京歯科大
195	7	昭和47年4月1日	49	200		千葉大
196	シンポジウム	昭和47年7月8日	117	100		東京医大
197	9 特別講演	昭和47年9月9日	78	100	30分	杏林大
198	特別講演	昭和47年10月28日	74	100		女子医大
199	委員会報告	昭和52年10月1日	66	500		慈恵医大
200	13	昭和52年12月10日	32	200		昭大歯
201	4 特別講演1	昭和53年3月11日	61	200		東京医科歯科大
202	シンポジウム5	昭和53年4月22日	112	100	30分	帝京大
203	4	昭和53年7月1日	28	100		聖マリアンナ大
204	4	昭和53年11月11日	40			日本医大
205	7	昭和54年6月16日	44			埼玉医大
206	シンポジウム7	昭和54年10月20日	49		20分	東京医大
207	6	昭和55年2月9日	29	500	30分	北里大
208	9	昭和55年6月14日	32	200	20分	杏林大
209	5 特別講演1	昭和55年10月16日	41	200	20分	都立神経研
210	6	昭和55年12月8日	85	200		三菱化成
211	11	昭和56年5月30日	57		20分	東海大
212	5 特別講演3	昭和56年11月21日	43		20分	東邦大
213	7 シンポジウム4	昭和57年5月8日	83	500	20分	自治医大
214	5 特別講演3	昭和57年10月23日	56	600	20分	筑波大
215	4 特別講演2	昭和58年5月28日	47	500	20分	独協医大
216	12	昭和58年10月15日	77	500	20分	順天堂大
217	9	昭和59年6月2日	64		20分	昭和大

## 2. 近畿生理学談話会成立の経過

吉 村 寿 人  
(京都府立医大名誉教授)

敗戦後一時途絶えた日本生理学会が昭和21年11月に東北大学において復活し、日本の生理学会の活動が段々と活発となり、昭和23年9月から生理学東京談話会も復活し、戦前には月に1回ずつあった総説的講演会の形をやめて会員の学術報告の集いに姿をかえて発足した。その後昭和24年には札幌、中国四国、九州にと次々に生理学談話会が開かれるようになった。この気運におされて近畿でも談話会を開いてはどうかという声を耳にするようになったので、私は当時まだ健在で活躍中の大谷卓三教授(昭和37年病没)と相談し、近畿地区に談話会をつくることに意見が一致した。当時東京談話会は1ヶ年間に何回となく開かれていたが、近畿地区ではそれぞれの医科大学の所在地が分散し、遠隔の地に点在していることでもあるから、1ヶ年に2回の程度に開催することにした。また毎年開かれる本大会には出題者が多くて、各教室からの出題数を制限される結果、若手生理学者が出題して口演する機会を逸する事情にあることをふまえて、この談話会では若手生理学者に研究発表の機会をあたえることを目的とするということで意見が一致した。

当時大阪市立大学には細谷雄二先生、阪大には久保秀雄先生、兵庫県立医大には正路先生が居られることより、これらの長老教授の御賛同をえる必要があった。そこで大谷教授は大阪市立大学の臨時講師をしていた関係上、同君から細谷先生の御賛同をとってもらふこととし、久保、正路の両先生との話し合いは私が引受けた。かくして何れも大賛成であるとの御返辞をいただき、丁度私の属する京都府立医大の生理学舎が河原町通り西側のキャンパス(西構とい

う)に新築された時でもあったから、まず京都府立医大で開くことになった。かくて、勝義孝先生(当時は生物物理化学教授)と私が当番幹事となって昭和25年10月1日に大学の講堂で口演会を開いた。また、その夕刻より懇親会を西構の生理学教室の実習室に急場の会場をつくって開くことにした。

演題募集は近畿地区に属する医科大学のみならず、当時中部地方には談話会が無かった関係上岐阜大学や金沢大学にも案内を出すことにした。(時には金沢大学にて開いたこともあった。)集まった演題は24題で、動物性官能や一般生理学に属するもの12題、植物性官能や応用生理学に属するもの12題というバランスのとれたものであった。そこで当時、国際生理学会常任委員をせられ、たびたび欧州へ旅行しておられた久野寧先生が京都にお住いのことでもあるから「欧州生理学の近況」という題下で特別講演をお願いして、プログラムを組んだ。その夕方から懇親会を開き近在の若い生理学者は可なり遅くまで、相互親睦の実をあげることができた。かくて次回は大阪市立大学に当番を渡すことにして、近畿地区生理学談話会はここに目出度く発足して、以後ずっと円滑に進められることになったのである。以下現在までに近畿生理学談話会の開催された年月日と当番校と幹事名を表にして示すこととする。学会記録は大学ノートに記して次の当番幹事に渡すことにしたが、これは今でも引き継がれ、大学ノートも9冊になったので製本されて順々に幹事に受け継がれている由である。

昭和59年8月22日

## 生理学近畿談話会開催当番校, 開催年月日

回次	当番校	当番幹事	開催年月日
1	京都府立医大	勝 義孝, 吉村 寿人	昭和25年10月1日
2	大阪市立医大	細谷 雄二	昭和26年2月2日
3	奈良医大	鎌倉 勝夫	昭和26年11月9日
4	兵庫県立医大	正路倫之助	昭和27年4月13日
5	大阪女子医大	幸塚 嘉一	昭和27年10月26日
6	三重大医	勝田 稔	昭和28年2月8日
7	和歌山医大	長井 音次	昭和28年8月30日
8	大阪医大	中西 政周	昭和28年11月8日
9	阪大医	久保 秀雄	昭和29年2月14日
10	京大医	笹川 久吾, 大谷 卓造	昭和29年11月28日
11	金沢医大	斎藤幸一郎, 岩間 吉也	昭和30年7月3日
12	京都府立医大	勝 義孝, 吉村 寿人	昭和30年10月30日
13	大阪市大医	細谷 雄二	昭和31年2月26日
14	奈良医大	鎌倉 勝夫	昭和31年10月12日
15	大阪歯大	関根 道夫	昭和32年2月24日
16	関西医大	幸塚 嘉一	昭和32年10月13日
17	三重大医	勝田 稔	昭和32年11月30日
18	和歌山医大	長井 音次	昭和33年10月12日
19	阪大歯	吉井直三郎, 河村洋二郎	昭和34年1月31日
20	京大医	大谷 卓造, 井上 章	昭和34年6月20日
21	大阪医大	中西 政周, 笹川 久吾	昭和34年10月5日
22	神戸医大	岡本 彰祐, 須田 勇	昭和35年2月6日
23	京都府立医大	吉村 寿人, 岩瀬 善彦	昭和35年9月24日
24	大阪市大医	細谷 雄二, 木村 英一, 古河 太郎	昭和36年2月4日
25	奈良医大	鎌倉 勝夫, 中馬 一郎	昭和36年10月14日
26	大阪歯大	関根 道夫	昭和37年2月25日
27	阪大医	久保 秀雄	昭和37年10月6日
28	三重大医	久野 寧, 勝田 稔	昭和38年2月17日
29	関西医大	幸塚 嘉一, 安原 基弘	昭和38年11月9日
30	和歌山医大	長井 音次, 松下 宏	昭和39年2月20日
31	大阪医大	中西政周, 笹川久吾	昭和39年11月14日
32	神戸大医	岡本 彰祐, 須田 勇	昭和40年2月27日
33	京大医	井上 章, 荒木辰之助	昭和41年2月26日
34	阪大歯	河村洋二郎	昭和41年9月10日
35	大阪歯大	覚道 幸男	昭和42年1月29日
36	阪大医	岩間 吉也	昭和42年9月23日
37	京都府立医大	吉村 寿人, 岩瀬 善彦	昭和43年2月10日
38	奈良医大	鎌倉 勝夫, 榎 泰義	昭和43年10月19日
39	大阪市大医	木村 英一, 古河 太郎	昭和44年2月22日
40	三重大医	勝田 稔, 村上 長雄	昭和44年9月14日
41	関西医大	田代 裕, 安原 基弘	昭和45年2月22日
42	阪大医	吉井直三郎, 中馬 一郎	昭和45年9月26日
43	京大医	井上 章, 荒木辰之助, 佐々木和夫	昭和46年1月23日
44	神戸大医	岡本 彰祐, 須田 勇	昭和46年10月2日
45	和歌山医大	長井 音次, 松下 宏	昭和47年3月11日

回次	当番校	当番幹事	開催年月日
46	阪大歯	河村洋二郎	昭和47年10月21日
47	京都府立医大	岩瀬 善彦, 亘 弘	昭和48年2月17日
48	大阪歯大	覚道 幸男	昭和48年9月1日
49	大阪大基礎工	塚原 仲晃	昭和49年4月27日
50	阪大医	岩間 吉也	昭和49年11月9日
51	大阪医大	藤本 守, 今井 雄介	昭和50年5月24日
52	関西医大	田代 裕, 安原 基弘	昭和50年11月22日
53	奈良医大	榎 泰義	昭和51年10月9日
54	兵庫医大	吉村 寿人, 吉井直三郎, 堀 清記,	昭和52年10月2日
55	大阪市大医	林 泰正, 松裏 修四	昭和53年2月18日
56	神戸大医	木村 英一, 岡本 彰祐, 埜 功	昭和53年9月30日
57	近畿大医	秩父 志行, 宮本 博司	昭和54年2月17日
58	滋賀医大	横田 敏勝, 北里 宏	昭和54年10月20日
59	京大医	荒木辰之助, 佐々木和夫	昭和55年3月1日
60	三重大医	村上 長雄	昭和55年8月22~23日
61	和歌山医大	松下 宏, 辻本 毅	昭和56年2月21日
62	神戸学院大	岡本 歌子	昭和56年9月26日
63	阪大歯学部	河村洋二郎	昭和57年2月6日
64	京都府立医大	森本 武利, 外山 敬介	昭和57年9月25日
65	大阪歯大	覚道 幸男	昭和58年2月5日
66	国立循環器病センター	二宮 石雄	昭和58年10月15日
67	阪大基礎工	塚原 仲晃	昭和59年2月18日
68	阪大高次研	津本 忠治	昭和59年10月27日

## 生理学談話会の歴史的推移(II)

### 3. 日本生理学会北海道地方会の歩み

広 重 力  
(北海道大学医学部生理学第一講座)

日本生理学会北海道地方会の前身は「生理学札幌談話会」にある。終戦のショックからやっと立ち直りつつあった昭和24年6月25日に箕島教授の音頭で、第1回生理学札幌談話会が北海道大学医学部会議室でもたれた。当日箕島高教授(現在、北大名誉教授)による「最近の生理学の動向」と題した講演が行われ、役員として天野智恵美(北大名誉教授)、中村治雄(北大名誉教授)(以上、常任幹事)、永井寅雄(札幌医大名誉教授)、寿原健吉(故東京教育大名誉教授)、岩瀬善彦(京都府立医大名誉教授)(以上、幹事)が選ばれている。「札幌談話会」の名が示すように、当時の生理学会会員は札幌に限定されていた。札幌談話会は昭和25年7月までの約1年間に計8回開かれ、それぞれ、ゲストスピーカーの講演を聴く形で行われていた。

昭和25年の秋に、札幌談話会をやめて、あらためて「日本生理学会北海道地方会」を発足させることになり、その第1回の集会在昭和25年12月9日北大医学部会議室で行われた。地方会ということで一般演題を募集したところ16題が寄せられた。9日午後2時から4時の間には全演題を消化できず、残りは日を改めて発表してもらった。これは口演、討論に制限時間がなかったためであった。すでに生理学における研究意欲が旺盛であったことを物語っている。

昭和26年7月に第2回地方会を北大で、同年の12月には第3回の北海道地方会を札幌医大で開催している。第2回は8演題、第3回は16の演題が集っているが、北大医学部、札幌医科大学生理学講座、北大応用電気研究所生理部門からの発表のほか、北大触媒研究所、北大農学部獣医科、札幌大生化学講座、北大医学部の産婦人科や眼科学講座からの演題も加わっている点

が目をつく。生理学が医学の基礎科学として根をはっていた証しであろうか。

日本生理学会北海道地方会の発足に先立ち、昭和24年6月25日に、箕島教授の指示で中村治雄助手(当時)が会則草案を作製した。以下に昭和33年に改正された全文を示す。

#### 日本生理学会北海道地方会会則

1. 本会を日本生理学会北海道地方会と称する。
2. 本会の目的は同学者が寄り、生理学の進歩発展と相互の親睦を期するにある。
3. 本会会員は北海道に在住し、本会の趣旨に賛成する同学者より成る。
4. 本会は毎年1回以上、研究発表会並びに総会を開く。なお研究発表会の抄録は日本生理学雑誌に投稿する。
5. 本会に当番幹事をおき本会の事務を取扱う。当番幹事は総会において決定する。任期は1年として、1月に始まり12月に終るものとする。
6. 会費は教室単位の場合年間300円、個人入会の場合には100円とする。

(昭和33年1月25日改正)

この会則を作った当時は少なくとも教室単位の年会費は150円、個人会費(教室員も含む)100円であったが、のちに現行の教室単位年会費のみになった。昭和33年改正のときはすでに300円、昭和36年には一躍1,000円にはね上っている。その後も値上げを重ね、昭和50年に2,000円、昭和51年に3,000円、昭和53年からは現行の年会費5,000円である。しかし第1条から第5条までの内容はそののち四半世紀にわたり連続として生きつづけてきた。

日本生理学会北海道地方会の主な歩みをまと

めると表のようになる。地方会として意識して回数を数えていたのは昭和30年12月の第8回までで、そのあとはかなりの混乱がみられる。混乱の理由は人事異動のせいもあるが、あわせて昭和33年10月から北海道医学大会に合流したせいでもある。北海道医学大会はこの年すでに第38回を数えていたが、この大会の生理系分科会のメンバーの一つとして日本生理学会北海道地方会が参加することになったのである。この大会は原則として秋に開かれていたため、それまで懇親会をかねて12月に開かれることの多かった地方会が9~10月に移行する形になった。生理系分科会ということで、演題内容も解剖、生化学も参加できるわけであるが、実際には生理学会の地方会のメンバーが主力をしめている。生理学者がこの機会に生理系の他の分野のトピックスにふれうことはきわめて有意義と思われる。しかし地方会が果してきた懇親会的機能は消失せざるを得なかった。

この点は次の2つの方法で解決がはかられた。一つは箕島杯争奪野球大会のスタートである。第1回の野球大会は昭和33年10月に行われた。以来毎年行われ、昭和45年7月に第13回野球大会が開催された。真夏の太陽のもとで大汗をかき、夕日の落ちるのをまって市内のビアガーデンに全員が集い、表彰式のあと大いにビールを傾けながら談笑することになる。箕島高教授のご配慮が、サッポロビールの味とマッチして脈々と会員の血を流れる一時でもある。

このような北海道地方会の最大の特徴ともいえる箕島杯争奪野球大会も次第にスタイルを変えつつあることも事実である。各教室単位で野球チーム編成がむずかしくなったのが最大の原因だが、あるいは会員の平均年齢の上昇のせいもあるか、さらには当番幹事のもっとも得意とする種目をという意図であろうか、昭和46年にボウリング大会が試みられ、好評のせいもあってその後5年間はボウリング大会が続いた。そのあとはバレーボール、ソフトボール、卓球、登山、体力テスト、バトミントンなど多彩である。因みに、新しい種目を採用してすぐ優

勝した当番幹事チームはまだないので、必ずしも得意種目を選んだということはなさそうである。いずれにせよ、優勝チームをたたえる箕島杯授与式はビアガーデンで盛大にとり行われることにはかわりはない。

会員の懇親を図るもう一つの行事は毎年12月に開かれる総会とそのあとに続く忘年会である。総会では、いくつかの報告事項や審議事項がとりあげられるが、総会に先立って、講演やトピックスが地方会の行事として行われる。その内容は完全に当番幹事の裁量にまかされており、留学帰りの研究者の経験談、国際会議出席者のトピックス、あるいは各教室の研究紹介、特定分野の研究動向の紹介など様々である。昭和36年の暮れの第16回地方会では、玉重教授のイギリス・欧州視察談、望月教授の欧米視察談、それに藤森教授の欧州視察談が会員に披露されているが、会員が美しいスライドに見とれ、しばし声なしとメモにある。まさに隔世の感がある。最近の15年間は、人事異動がはげしく、新任教授の紹介をかねて12月の例会は特別講演をいただく形に定着しつつある。

北海道地方会がまず「札幌談話会」としてスタートしたことはすでにふれた。当時、医学校は北海道大学医学部と札幌医科大学(昭和25年2月20日に、己存の道立女子医学専門学校を母体として正式に発足した)の2校のみであった。北大医学部では箕島教授が生理学第一講座を、朴沢教授が第二講座を担当されていた。一方、札幌医大では永井教授が生理学講座を担当されていたが、昭和30年には宮崎教授が加わった。ともあれ、昭和24年6月にいち早く将来の発展を予想して「北海道地方会」の発足にふみきったのは箕島教授の卓見というほかわない。しかもその時に起草した会則が35年のながきにわたり生きつづけ、地方会の発展をささえてきたのである。

第1回から第8回までの創立期をもとに昭和30年以後、北海道地方会は成長期に入ったといえることができる。それは箕島門下に育った人材が活躍の場を求めて巣立った軌跡でもある。北

大の超短波研究所は昭和21年に現行の応用電気研究所と改称されたが、生理部門には当時小溝協三教授、寿原助教授、岩瀬助手らが、活躍しておられた。そのあとをうけて望月教授が生理部門を担当。昭和29年には新設の北大獣医学部獣医生理学講座に本間(慶)教授が着任した。また昭和30年には北大医学部生理学第二講座に藤森教授が着任し、昭和32年には第一講座に伊藤教授が着任した。いわば人事異動のラッシュ時期でもあった。時をほぼ同じくして、日本生理学会北海道地方会が北海道医学大会生理系分科会のメンバーとして再発足したことはすでに述べた。またこの頃に北大理学部動物生理学教室(玉重教授)も地方会のメンバーとして参加されたことも特筆すべきことと思われる。このようにして、3教室でスタートした「談話会」は、北大応用電気研究所生理部門、北大獣医生理、理学部動物生理、札医大第二生理を加えた。すなわち「地方会」は7教室から成立することになった。さらに昭和43年からは北大獣医薬理学教室(大賀教授)も加わった。

このようにして地方会は10年ほど経過したが、昭和42年に北大歯学部口腔生理学教室に中村教授が初代教授に就任され、また昭和44年には獣医生理に菅野教授が着任した。これらの異動はきたるべき人事異動ラッシュのさきぶれであったろうか。昭和48年に旭川医科大学が新設されるにおよび、第一講座に黒島教授、第二講座に森教授が着任した。北大医学部でも昭和49年に第二講座に加藤教授が、翌年には第一講座に広重が就任した。昭和53年には歯学部生理に

亀田教授が、また東日本学園大学には先任の中村教授とともに新しく猪股教授が着任された。昭和52年には札医大第一生理に藪教授が就任された。昭和50年10月に玉重教授が、55年8月には宮崎教授が急逝され、後任にはそれぞれ久田教授、青木教授が就任した。北大応用電気研究所でも望月教授の転出のあとをうけて小山教授が就任され、メディカルトランスデューサー部門には神谷教授が新たに昭和54年に着任された。すなわち、この10年ほどの間に、北海道地方会の構成単位である教室または部門の主任教授がほとんど入れかわってしまった。このことは教室の構成メンバー、あるいは研究テーマなどの変更をも意味する。一方、地方会を構成する教室も急増し、現在では14教室(部門を含む)になった。昭和30年代の人事異動から20年を経て、第二の人事異動ラッシュがおとずれ、構成単位は7教室から倍増して14教室になったといえる。あえてこの時期を発展期とよぶことができようか。

このような急成長にはひずみがつきものである。生理学会会員は必然的に他の色々な分野に活躍の場をひろげつつある。この場合、地方会加入教室または部門に属さない分野へ転出した会員をどのように拾収していくか。その場合、会員の親睦はいかにして深めていくべきか。会則に謳われた精神をこれまで見事に具現して来られた先達たちに応えるためにも、われわれ現会員はあらためて「地方会」のあり方に思いをいたさねばならない。

表 日本生理学会北海道地方会の歩み

回	年 月	当 番 幹 事	備 考
1	昭和25. 12	簗島 高(会長)	(演題数 16)
2	26. 7		( " 8)
3	26. 12	(宮崎 英 策)	( " 16)
4	27. 12	(岩瀬 善 彦)	( " 17)
(5)	28. 8		「筋の集い」(札医大)
6	29. 3	(中村 治 雄)	( " 14)
7	29. 12	( " )	( " 10)
	30. 6		「生物電気談話会」

第1~7回は簗島会長のもとに会長補佐幹事として( )が運営にあたった。

回	年 月	当 番 幹 事	備 考
8	30. 12	永井 寅 男	(演題数 18)(会長制廃止、当番幹事制となる)
	33. 1		会則改正
	33. 7		第1回簗島杯争奪野球大会
9	33. 10	藤森 聞 一	北海道医学大会(第38回)生理系分科会に合流 (演題数35)
10	33. 12	"	(教室(部門)研究の紹介、総会、忘年会)
	34. 7		第2回野球大会
11	34. 9	望月 政 司	北海道医学大会(第39回)分科会
12	34. 12	"	(演題数 16, 総会, 忘年会)
	35. 6		医学講演会 (ISPS 後援) (Visscher, Fessard, von Euler)
	35. 7		第3回野球大会
13	35. 11	本間 慶 蔵	北海道医学大会(第40回)分科会
14	35. 12	"	(帰国報告、総会、忘年会)
	36. 7		第4回野球大会
	36. 9		講演会(Brooks)
15	36. 10	宮崎 英 策	北海道医学大会(第41回)分科会
16	36. 12	"	(外国視察談、総会、忘年会)
	37. 8		第5回野球大会
17	37. 9	伊藤 真 次	北海道医学大会(第42回)分科会
18	37. 12	"	(トピックス7題、総会、忘年会)
	38. 8		第6回野球大会
19	38. 9	玉重 三 男	北海道医学大会(第43回)分科会
20	38. 12	"	(国際学会報告3題、総会、忘年会)
	39. 7		第7回野球大会
21	39. 9	藤森 聞 一	北海道医学大会(第44回)分科会
22	39. 12	"	(トピックス3題、総会、忘年会)
	40. 7		第8回野球大会
23	40. 9	望月 政 司	北海道医学大会(第45回)分科会
24	40. 12	"	(各教室のトピックス7題、総会、忘年会)
	41. 7		第9回野球大会
25	41. 9	宮崎 英 策	北海道医学大会(第46回)分科会
26	41. 12	"	(各教室トピックス7題、総会、忘年会)
	42. 8		第10回野球大会
27	42. 9	永井 寅 男	北海道医学大会(第47回)分科会
28	42. 12	"	(演題7, 総会, 忘年会)
	43. 7		第11回野球大会
29	43. 9	本間 慶 蔵	北海道医学大会(第48回)分科会
30	43. 12	"	(演題7, 総会, 忘年会)
	44. 7		第12回野球大会
31	44. 9	伊藤 真 次	北海道医学大会(第49回)分科会
32	44. 12	"	(トピックス2題、総会、忘年会)
	45. 7		第13回野球大会
33	45. 9	玉重 三 男	北海道医学大会(第50回)分科会
34	45. 12	"	(講演1題、総会、忘年会)
	46. 8		第14回簗島杯体育大会(ボウリング)
35	46. 9	藤森 聞 一	北海道医学大会(第51回)分科会
36	46. 12	"	(国際生理科学会議トピックス4題、総会、忘年会)

回	年 月	当 番 幹 事	備 考
	47. 4		講演会 (Denton, Shaw)
	47. 5		" (Tasaki)
	47. 8		第15回体育大会(ボウリング)
37	47. 10	中 村 治 雄	北海道医学大会(第52回)分科会
38	47. 12	"	(講演1題, 総会, 忘年会)
	48. 8		第16回体育大会(ボウリング)
39	48. 9	望 月 政 司	北海道医学大会(第53回)分科会
40	48. 12	"	(講演1題, 総会, 忘年会)
	49. 7		第17回体育大会(ボウリング)
41	49. 9	宮 崎 英 策	北海道医学大会(第54回)分科会
42	49. 12	"	(国際生理科学会議トピックス, 総会, 忘年会)
	50. 7		第18回体育大会(ボウリング)
43	50. 9	黒 島 農 汎	北海道医学大会(第55回)分科会
44	50. 12	"	(講演2題, 総会, 忘年会)
	51. 7		講演会 (Takeuchi)
	51. 9		第19回体育大会(バレーボール)
45	51. 9	菅 野 富 夫	北海道医学大会(第56回)分科会
46	51. 12	"	(講演1題, 総会, 忘年会)
	52. 2		講演会 (Botelho)
	52. 9		第20回体育大会(ソフトボール)
47	52. 9	永 井 寅 男	北海道医学大会(第57回)分科会
48	52. 12	"	(国際生理科学会議トピックス, 総会, 忘年会)
	53. 8		講演会 (Suga)
	53. 8		第21回体育大会(卓球)
	53. 9		講演会 (Brookhart, Makinose)
49	53. 9	広 重 力	北海道医学大会(第58回)分科会
50	53. 12	"	(講演1題, 総会, 忘年会)
	54. 1		講演会 (Pittendrigh, Arimura)
	54. 8		第22回第22回体育大会(卓球)
51	54. 9	加 藤 正 道	北海道医学大会(第59回)分科会
52	54. 12	"	(講演1題, 総会, 忘年会)
	55. 8		第23回体育大会(野球)
53	55. 9	久 田 光 彦	北海道医学大会(第60回)分科会
54	55. 12	"	(講演1題, 総会, 忘年会)
	56. 7		第24回体育大会(登山)
55	56. 9	森 茂 美	北海道医学大会(第61回)分科会
56	56. 12	"	(講演講演2題, 総会, 忘年会)
	57. 7		第25回体育大会(ボウリング)
57	57. 9	神 谷 瞭	北海道医学大会(第62回)分科会
58	57. 12	"	(講演1題, 総会, 忘年会)
	58. 6		講演会 (Wayland)
	58. 7		第26回体育大会(体力テスト)
	58. 8		講演会 (Sears)
59	58. 9	亀 田 和 夫	北海道医学大会(第63回)分科会
60	58. 12	"	(講演1題, 総会, 忘年会)
	59. 4		講演会 (Eccles)
	59. 7		第27回体育大会(バドミントン)
61	59. 9	猪 股 孝 四 郎	北海道医学大会(第64回)分科会
62	59. 12	"	(講演1題, 総会, 忘年会)

(注) この記事はもっぱら北海道地方会資料に基づき書いたが, 第1回の創立当時から現在まで, 地方会の発達を温かく見守って下さってきた中村治雄東日本学園大学教授(北大名誉教授)にご校閲, ご加筆いただいた。また常任幹事である加藤教授にもお目通しいただいた。

#### 4. 日本生理学会中国・四国地方会の歩み

##### 1. はじめに

岡山大・医・第二生理

中山 沃

昭和24年10月16日, 第1回中・四国地方会が岡山大学医学部の林 香苗教授の当番で開かれて以来今年まで35年の長きにわたって続いてきました。第36回中四国地方会は今年10月16日香川医科大学生理学教室, 畠瀬 修, 細見 弘両教授の当番で開催され, 明年は鳥取大学の及川俊彦, 日地康武両教授の当番で開かれる予定になっております。この地方会は瀬戸内海を狭み, 中国地方5県, 四国地方4県にわたる広い地域ではありますが, 地方特有のおおらかさと親密さは独特のものと常日頃感じています。最初の頃の地方会では, 観光や懇親会があり, 秋が待遠しいものでした。5年に1回同じ土地を訪れる関係で, 観光, 懇親会も次第に姿を消し, 淋しくはなりましたが, 懇親的役割は果していると思われまます。本年9月, 中・四国地方会についてアンケートを求めました所, 回答者数99名中, 地方会は存続すべきであるが, 83名, 発展的解消すべきであるが, 16名でした。そしてこの83名のうち「中・四国地区は地域が広く, 懇親会的役割も大きい」…44名, 「若手研究者の発表の機会として意味がある」…60名, 「多会場の生理学会総会と異なり, 専門外の分野の研究動向を知ることができる」…49名というように, 地方会の存続について前向きな意見が多く, 今秋の地方会の評議員会では, 存続すべきという積極論が会を支配していました。

この地方会の古いメンバーの徳島大学名誉教授岡 芳包, 岡山大学名誉教授福原 武の両先生にお願いし, この会の発足当時や当番をされた頃のことを書いていただいた。

##### 2. 中国四国地方会の回顧

徳島大・医・生理

岡 芳 包

中国四国地方会が生れたのは, 昭和24年の秋である。敗戦後の混迷期が漸く過ぎて, 食と住はいまだ不満足な状態ではあったが, 人心は生気をとり戻しつつあった。その秋口, 岡山医大の林 香苗教授から, 地方会をこしらえて研究発表会をやろうと呼びかけがあった。戦前, 中四国地区の医科大学は岡山だけであったが, 戦後, 鳥取(米子)と徳島に国立, 広島(呉)と山口(宇部)に県立医科大学が設立されたので, 林教授は先輩の西丸和義教授とも相談の上で, 生理学東京談話会に類する会合を提唱されたわけである。

発会の前夜, 岡山医大構内にあった舎監官舎という名の客用宿舎に, 広島(西丸和義), 岡山(林 香苗), 鳥取(福原 武), 徳島(岡 芳包), 山口(井上 章)の5大学から教授が集まった。勿論当時は旧帝大と一部の私立医大以外, 生理学は1講座であった。この席で, 今後毎年秋に開催するが, 面倒な規則は作らず, 毎回のやり方は当番教授に全面一任し, 当番は教授の年齢(卒業年次)の順にするという林教授の提案が諒承された。ただし翌25年春には西丸教授が呉で生理学の総会を開くことがきまっていたので, 地方会の順番は広島を最後にまわすことになった。こんな訳で中国四国地方会は岡山・米子・徳島・山口・広島に開かれることになり, 教授の転出・交替や第二講座増設などとは無関係に, 昭和51年までそのとおりに続いたが, 新設医大の整備が進むにつれて, 近年は大学数の比率(中国6, 四国4)を勘案しつつ, 瀬戸内海を渡っての交互開催になりつつある。

開催日は最初の頃はなんとなく日曜となっていたが, 医師が多数参加する訳でもなし, 互いに日帰りがむずかしいのに折角の日曜の安息を犠牲にするには当るまいとの思いつきから, 私は

会を金曜に開いたらどうかと提案し、徳島でこれを敢行したところ、その後これが不文律の慣例になってしまった。しかし会のやり方は毎回当番教授に全面一任が原則なので、この曜日が再検討され変更されても、ましてや現役を去った今の私に異存はない。

中国四国地方会は上に述べたように自然発生したが、これが日本生理学会の地区割りに符合して、常任幹事2名の定員が割当てられた。最初は西丸・林両教授がその任に当たったが、西丸教授は、常任幹事は他の学会の理事とは異なり、次々と若い人に交替するのがよいとの信条から数年で辞任して、そのあと福原教授が選ばれ、林教授もそれにならって間もなく辞め、私が後任となった。その私も両教授の考え方に賛同していたので、2期6年間で辞任した。その後暫くはそうでない時代もあったようだが、そのうちに中国西国地区では、常任幹事は2期6年務め、各期毎に1名が交替という選挙結果になって現在におよんでいる。こんな点からも私は中国四国地方会を好ましく感じ、時に応じて更改を加えつつも、良き伝統を磨き上げてほしいと念願している。

3. 中・四国地方会初期についての回想

岡山大・医・生理  
福原 武

米子医科大学(後の鳥取大学医学部)での中・四国談話会は昭和25年(1950)11月12日に福原主催の下に開かれました。集まるものは山口(井上 章)、広島(西丸和義)、米子(福原 武)、岡山(林 香苗)、徳島(岡 芳包) 諸大学所属の生理学者でした。岡山を除けば、いずれも敗

戦後に創設された大学で、研究設備も、きわめて貧弱、研究者も少なく、若く、未熟でした。

米子では前年度の会での申し合わせ通り、各自の研究について1題十数分間気軽に演説し、気軽に質疑応答するという形式をとりました。そして今も変りないことですが、結局は生理学会総会での研究発表の予行演習となりました。こういう事情で、地方会で話されたことは、もう一度総会で話されていますから、題目や要旨は、その頃の日本生理学雑誌の学会号にのっています。なお米子での談話の題目などは日本生理誌12巻、390-391頁にのっており、20題、参加者は22名でした。

一般に地方では、大学および研究者の数が少ないだけでなく、研究分野がまったく、かけ離れている場合が多く、したがって、これらの人々が集っても、同じ分野に属する問題について切磋琢磨するという意義は余りなく、結局は懇親会的会合に終わってしまいます。しかし、それでも近接の地方に住んでいる生理学者が年に1回くらい集って話し合うのは、よいことではないかと思えます。お互に研究だけではなく、いろいろなことについて有益なヒントを与えたり、与えられたりすることも地方会の利点の一つかと思えます。

4. 中・四国地方会開催の一覧

次に第1回から36回までの開催期日、場所、当番、演題数を表として掲げる。なお第9回では、第8回西日本地方会、第17回は第16回西日本生理学会、第24回は第23回西日本生理学会、第31回は第30回西日本生理学会と合同で開催された。そのため2日間にわたっている。

回	年 月 日	場 所	当 番 幹 事	演 題 数
1	昭和24, 10, 16	岡 山	林 香苗	14
2	25, 11, 12	米 子	福原 武	18, 実験1
3	26, ?	徳 島	岡 芳包	不 明
4	27, 11, 23	宇 部	井上 章	29
5	28, 11, 22	呉	西丸 和義	27, 実験11
6	29, 11, 14	岡 山	林 香苗	33
7	30, 11, 13	米 子	西田 勇, 山田 守	36
8	31, 11, 10	徳 島	岡 芳包	35
9	32, 11, 30	宇 部	井上 章	49
10	33, 11, 22	岡 山	林 香苗, 福原 武	25
11	34, 11, 23	広 島	西丸 和義	37
12	35, 10, 21	米 子	山田 守, 西田 勇	23
13	36, 8, 22	徳 島	岡 芳包, 山野 俊雄	17
14	37, 9, 28	山 口	川端 五郎	25
15	38, 10, 4	広 島	銭場 武彦	22
16	39, 10, 23	岡 山	西田 勇, 福原 武	18
17	41, 1, 26	米 子	山田 守, 及川 俊彦	52
18	41, 11, 18	徳 島	岡 芳包, 松本 淳治	22
19	42, 11, 24	宇 部	曾我美 勝	17
20	43, 10, 17	広 島	菅野 義信	21
21	44, 11, 1	岡 山	福原 武, 西田 勇	17
22	45, 10, 30	米 子	山田 守, 及川 俊彦	17
23	46, 11, 12	高 松	岡 芳包, 松本 淳治	19
24	47, 11, 9	宇 部	村上 憲	53
25	48, 10, 19	広 島	銭場 武彦, 入沢 宏	19, 実験5
26	49, 11, 29	倉 敷	福原 武, 岡田 博匡	27
27	50, 11, 7	米 子	山田 守, 及川 俊彦	28
28	51, 11, 5	徳 島	岡 芳包, 松本 淳治	35
29	52, 10, 18	岡 山	西田 勇, 中山 沃	36
30	53, 11, 11	松 山	志賀 健, 片岡 喜由	37
31	54, 10, 27	宇 部	村上 憲, 長 琢朗	74
32	55, 11, 16	出 雲	前野 崑, 榊村 純生	32
33	56, 10, 9	広 島	入内島十郎	34
34	57, 10, 1	南 国	瀬戸 勝男, 入交 昭彦	34
35	58, 10, 21	倉 敷	松村 幹郎, 岡田 博匡	35
36	59, 10, 12	香川医大	島瀬 修, 細見 弘	38

(文責：岡山大学医学部第二生理学教室 中山 沃, 昭和59年10月31日記)

5. 西日本生理学会小史

後藤昌義  
(九州大学医学部生理学教室)

はじめに

九州地区での生理学会地方会は、昭和24年11月、九州大学医学部の生理学教室で瀬尾愛三郎、問田直幹両教授の主催のもと、「第1回生理学九州談話会」という名称で発足した。第二次大戦の戦後の混乱、乏しい物資、不十分な研究設備の中にも、戦後の復興という気運がようやく高まってきた頃のことである。当時、九州・山口地区には九州、熊本、長崎の大学医学部と山口、久留米、鹿児島島の医学専門学校があるだけであった。九大の問田教授が熊本の小玉教授、長大の田中助教授と相計り、この地区にも談話会をと提唱されたのに始まると聞いている。東京、また札幌地区につづいての地方談話会の発足であった。

その第1回の談話会は演題数29、出席者40人程度であったが、「この会は今後、毎年1回または2回、九州の各大学および研究所で、当番をまわりもちに行なうことにする」という記録が残っている。以来、今日まで35年間、表1に示したように大水害の昭和28年を除いて毎年1回の地方会が例外なく開催されてきている。

興味あることに、その第1回の会合は「生理学九州談話会」の名称で発足したものが、第2回の熊本大学医学部での小玉作治、緒方維弘両教授主催の会合からは「九州地方生理学会」に改称され、さらに第5回の久留米大学、末永一男教授主催の会合からは「西日本生理学会」と名称が改められているという事実である。これは、第3回の長崎大学での会合から、地方会よりもより雄大な構想の独立学会とし、県や市からの補助金も得たいという含みもあって西日本生理学会の看板をかかげたが、これには日本生理学会本部からクレームがついたという。しかし何時とはなくこの名称が定着し、第5回以後は公式名称として採用されている。また東京、近

畿地区その他の地方会の会合が、「談話会」という名称で続けられ、年2回またはそれ以上の会合が開かれているのに対し、西日本生理学会は、年1回の学会の性格で開催されてきたという特徴がある。

当初の申し合せでは、会合は年1~2回の開催となっているが、ことに中国地区を含めるとかなり地域的に広範で、必然年1回に限定されてきたといえるであろう。また事実、中国・四国との合同地方会が昭和37年、山口大学の川端五郎教授の主催で始まり、また昭和41年鳥取大学の山田守、及川俊彦教授、昭和47年に再び山口大学の丹生治夫、村上恵教授、また昭和54年に村上恵、長塚朗教授のそれぞれの御世話で行なわれていることは注目すべきであろう。このような意味で、交通の便利な関東、近畿地区の会合とはかなり異なる色彩とニュアンスをもつ地方会として発展してきたといえる。

1. 西日本生理学会の初期の発展

第1回は前記のように昭和24年「生理学九州談話会」として九大医学部生理学教室で開催され、11月26日(土)午後1~4時講演会(第1部)、午後4~7時連絡会議および懇親会、翌27日(日)は午前9~12時講演会(第2部)が行なわれ午前中で終わっている。報告演題は29題、抄録の記録がなく詳細は不明であるが、その参加演題には基礎生理学者だけでなく、膀胱の自動運動(百瀬俊郎、九大泌尿)、腹窓法による胃内圧曲線(田北周平、九大一外科)、心室反応(福田得志、九大薬理)など臨床や他教室からの報告があり、また三井産業医学研究所から6題もの労働医学また血液に関連した基礎的研究の報告が目立つ。当時、三井鉱山は最盛期であって、関連の労働医学もまた盛んであったことが窺える。生理学教室からは熊本大学から7題、久留

表1. 西日本生理学会の開催  
会場欄の(合同)は中国・四国生理学会との合同開催を示す。

回	年月	当番校	開催地	当番教授	演題数	特講演別数	会場その他
1	S24. 11	九州大学	福岡市	瀬尾愛三郎, 問田直幹	29	0	九州大学医学部
2	25. 10	熊本大学	熊本市	小玉作治, 緒方維弘	24	0	熊本大学医学部
3	26. 11	長崎大学	長崎市	鈴木達二	32	0	長崎大学医学部
4	27. 9	三井産研	山野	石西進, 棚橋陽吉			三井産業医学研究所 (福岡県, 嘉穂郡)
5	29. 10	久留米大学	原鶴	末永一男	20	2	原鶴温泉(福岡県, 杷木町)
6	30. 10	鹿児島大学	鹿児島市	松本保久	36	0	鹿児島県医師会館(西鹿児島)
7	31. 11	山口医科大学	宇部市	井上章	32		山口医科大学
8	32. 11	九州大学	福岡市	問田直幹, 瀬尾愛三郎	24	0	九州大学医学部
9	33. 10	熊本大学	熊本市	佐藤昌康, 緒方維弘	26	0	熊本大学医学部 (熊本城内二の丸)
10	34. 11	長崎大学	長崎市	鈴木達二, 佐藤謙助	29	0	長崎大学医学部
11	35. 10	久留米大学	久留米市	末永一男	32	0	石橋文化センター
12	36. 10	九州歯科大学	小倉市	瀬尾愛三郎	23	1	九州歯科大学
13	37. 9	山口大学	山口市	川端五郎	29	0	山口県自治会館(合同)
14	38. 8	鹿児島大学	あびの	大村裕, 松本保久	24	0	国民宿舎「りんどう荘」
15	39. 9	九州大学	九重町	問田直幹, 後藤昌義	30	0	「九重西鉄ホテル」
16	41. 1	鳥取大学	米子市	山田守, 及川俊彦	54	0	米子市皆生「弓ヶ浜荘」(合同)
17	41. 10	熊本大学	熊本市	田中育郎, 佐藤昌康	42	0	熊本大学医学部(本荘)
18	42. 8	長崎大学	雲仙	鈴木達二, 佐藤謙助	38	3	雲仙国民宿舎「青雲荘」
19	43. 10	鹿児島大学	指宿市	橋村三郎, 松本保久	40	0	指宿国民休暇村「さつなん荘」
20	44. 10	久留米大学	久留米市	額額教三, 末永一男	38	0	久留米大学医学部(筑水会館)
21	45. 10	九州歯科大学	北九州市	野代平治	40	0	共済会館「ひびき荘」
22	46. 11	九州大学	九重市	栗山照	30	0	「九重高原ホテル」
23	47. 11	山口大学	宇部市	丹生治夫, 村上恵	53	0	歯科医師会館(合同)
24	48. 11	熊本大学	熊本市	佐々木隆, 佐藤昌康	33	0	熊本大学医学部(本荘)
25	49. 10	長崎大学	雲仙	鈴木達二, 佐藤謙助	20	0	雲仙国民宿舎「青雲荘」
26	50. 11	鹿児島大学	鹿児島市	松本保久, 橋村三郎	49	0	鹿児島大学医学部(宇宿町)
27	51. 11	久留米大学	久留米市	額額教三, 西彰五郎	24	0	久留米大学医学部
28	52. 10	福岡大学	福岡市	富田忠雄, 河田溥	45	0	福岡大学医学部
29	53. 10	宮崎医科大学	清武市	石河延貞, 美原恒	44	0	宮崎医科大学 (全発表ポスター展示)
30	54. 10	山口大学	宇部市	村上恵, 長塚朗	74	0	山口大学医学部 (ポスターと口演発表)(合同)
31	55. 10	九州歯科大学	北九州市	中原敏	67	0	共済会館「ひびき荘」
32	56. 10	九州大学	福岡市	後藤昌義, 大村裕	60	0	九州大学医学部(同窓会館)
33	57. 10	熊本大学	熊本市	小川尚, 田中育郎	65	0	熊本市産業文化会館
34	58. 10	長崎大学	長崎市	小坂光男, 相川忠臣	53	0	長崎商工会館
35	59. 10	佐賀医科大学	佐賀市	堀哲郎, 久場健司	56	0	佐賀医科大学

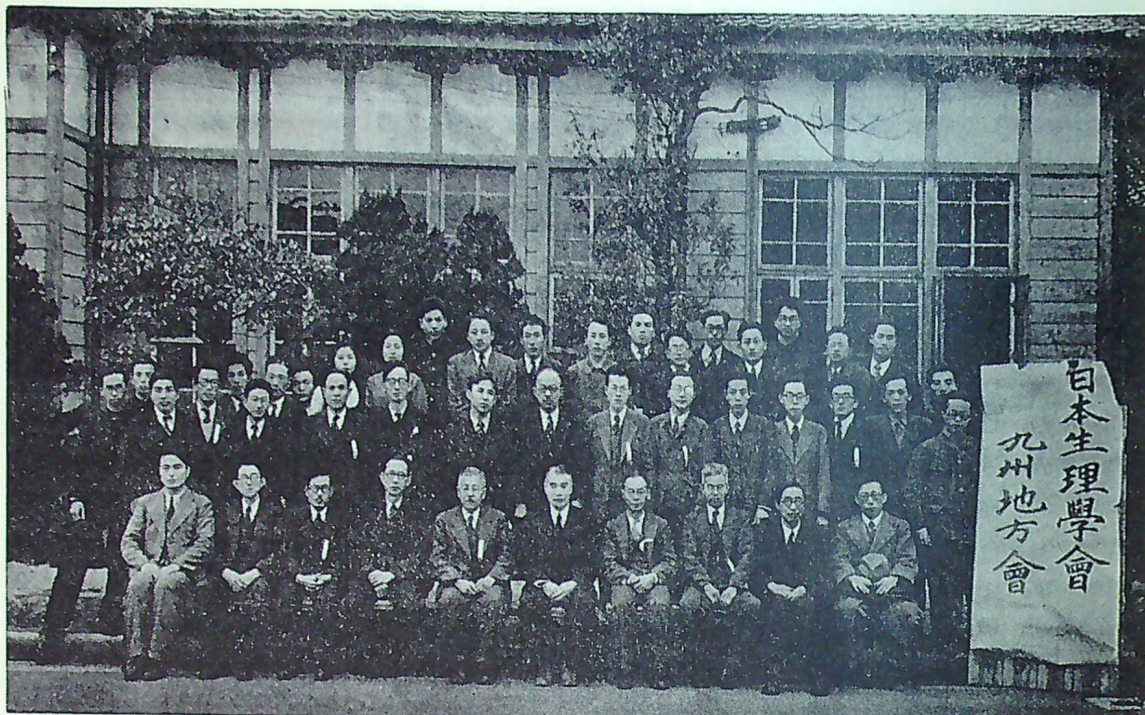


図1. 第1回生理学九州談話会. 生理学雑誌(第12巻, 370頁, 昭和25年)の学会記録では上記の名称になっているが, 写真では「日本生理学会九州地方会」の看板をかかばてある. 最前列の左から, 田中育郎, 問田直幹, 松本保久, 小玉作治, 緒方大象, 板垣政彦, 瀬尾愛三郎の各教授, 石西 進三井物産研所長, 棚橋陽吉先生, 末永一男教授.

米医大から4題, 鹿児島医大から1題, 地元の九州大学から8題であった.

翌年の第2回の会合は熊本大学医学部で開催され, 公式名称が「九州地方生理学会」に変わったが, 演題数24, 熊大8題, 九大7題, 長崎, 鹿児島各2題, 三井産研4題, また山口医大からの初参加があった. 各大学, 研究所の発表にはそれぞれ特色があり, 学問的な共通の広場は必ずしも広くなかったが, 各大学の交流の中から将来を模索しようとする時代であったように思われる. 第3回は昭和26年長崎で, 原爆の傷跡も生々しい大学医学部で開催された. 演題は32題, 熊大10, 九大9, 三井産研4, 山口大4, 久大3, 鹿大2で, 地元の長崎は演題数が多いため発表を遠慮されている. しかし, 当時の各教室の状況からして, この初期の頃は若手研究者が, それこそオールスターキャストで発表できた良い時代であった.

第4回は, 三井産業医学研究所(福岡県嘉穂郡山野)で石西 進所長, 棚橋陽吉先生の主催

のもとで開催された. 炭鉱の町で宿泊施設がなく, 参加者全員が三井鉱山のクラブに御世話になり, 2日間寝食を共にした楽しい会合であった. 同研究所は当時としては最新鋭の実験器機を整備し, 研究費も豊かで大学関係者の羨望の的であったが, 残念ながらその後の三井鉱山の閉山と運命を共にし, 学会抄録の記載もなくその詳細が明らかでない. 第5回は昭和28年に久留米大学, 末永一男教授の御世話で開催の予定であったが, 同年夏九州を襲った猛台風のため筑後川が氾濫, 大学の水没被害のため延期され, 翌29年に筑後川上流の原鶴温泉で開催されている. 総演題数20, 熊大, 鹿大, 山大各4, 長大3, 九大, 三井産研各2, 九歯大1で, はじめてシンポジウムとして問田直幹教授の「医学教育について」, 佐藤昌康教授の「英国土産話」という話題が取り上げられている.

昭和30年の第6回「西日本生理学会」は鹿児島大学, 松本保久教授の御世話で, 西鹿児島駅近くの鹿児島県医師会館で開催された. 県立か

ら国立大学への移管発足の年で, 医学部はまだ鴨池にあり木造であった. しかし学会演題は36題に達し, 九大, 熊大医学部から各6題, また熊本大学体質医学研究所, 長崎大から各5題, 鹿大, 久大各4題, また山口大からも3題の報告があった. ついで第7回の学会は山口大学の井上 章教授の主催で同附属病院中央講堂で開かれたが, その前年, 同病院が火災にあい困難を押しての開催であった. 演題数32, 参加者は53名であった. この第7回で当初の当番校を一巡したことになる. 第8回は九州大学医学部で再び開催されている.

## 2. 西日本生理学会の伝統と特徴

このように西日本生理学会の演題は発足当時から昭和39年の第15回まで最少20, 最多36題程度であり, 口演は第1日の午後に始まり, 第2日目は午前中に終り, 初日の夕食は多くは全会員参加の宴会であった. 参加者も40~60名前後, 楽しい一夜をとともに過ごすということが多く, 地域生理学者の communication の場, また懇親的な色彩が濃い会合であった. それは九州人の気質でもあり, 地方的な地方意識もあろうが, しかし和気藹々たるものがあり, この伝統はなお今日まで引きつがれている.

第4回の三井産業医学研究所で全員のクラブ宿泊の会合, 第5回筑後川原鶴温泉でのドテラ姿の学会についてはすでに述べたが, それ以後もこのような企画は相次ぎ, 第14回鹿児島大学, 大村 松本裕, 久保教授の御世話霧島えびの高原「りんどう荘」での会合, 第15回九州大学, 問田直幹, 後藤昌義教授主催の九重高原「九重西鉄ホテル」での集会, 第18回長崎大学, 鈴木達二, 佐藤謙助教授, また第25回同山下一邦教授がともに主催された雲仙の国民宿舎「青雲荘」での2回の学会, また第19回鹿児島大学, 橋村三郎, 松本保久教授御世話の指宿温泉国民休暇村「さつなん荘」, また第22回九州大学, 栗山 熙教授御世話の「九重高原ホテル」での集会等々である.

このような resort place での会合では演題

数の制限はやむを得なかったが, 通常の学会また総会では経験できない研究者相互の膚のふれあいがあり, 談論風発, 夜を徹しての楽しい談合があった. もちろん学会初日の夜は飲んでばかりいたわけではない. 昭和29年第5回原鶴温泉での会のように, 1) 医学教育について(問田直幹), 2) 英国土産話(佐藤昌康)など留学から帰国早々の教授から世界の教育, 研究動向についての紹介, 討論など Evening Session もあり, またその後は筑後川での鶉飼に興じ夜のふけるのも忘れる学会もあった. また昭和36年九州歯科大学での第12回の西日本生理学会ではNIHの田崎一二先生の「興奮過程の新しい考え方」という特別講演が行なわれており, 昭和42年第18回, 雲仙での学会では, 1) 西日本生理学会所感(小玉作治), 2) 現象の成立と同時制(瀬尾愛三郎), 3) 研究生活から得たいろいろなこと(棚橋陽吉)の特別講演があり, 生理学に一生を捧げられた先生方の貴重なお話しもあったのである.

また西日本生理学会の特徴として, 中国・四国生理学会との共同開催がある. 通常の年でも山口大学, 鳥取大学, 島根大学までは西日本地方会の御案内を申し上げ, 事実, 山口, 島根大学からは毎年, また鳥取大学からも参加者があり, 口演発表がなされている. また特筆すべきは, 山口また鳥取大学が中四国地方会の主催校になられるときは, 西日本生理学会も一緒に開催していただいたということである. その第1回の合同地方会(第13回西日本地方会)は昭和37年, 山口大学川端五郎教授の御世話で, 山口市県自治会館で行なわれ, 演題は29題に制限されたが, 79名が参加し, 大阪大学の久保教授外1名, また東京医科歯科大学伊藤教授その他1名の参加があった. その第2回の合同地方会(第16回西日本生理学会)は昭和41年1月鳥取大学山田 守, 及川俊彦教授の御世話で, 米子市で開かれたが, これは参加者に大山のスキーを楽しんでいただくため, わざわざ翌年正月に延期されての開催であった. 会場は皆生温泉「弓ヶ浜荘」, 演題54, 参加者は約180名であり,

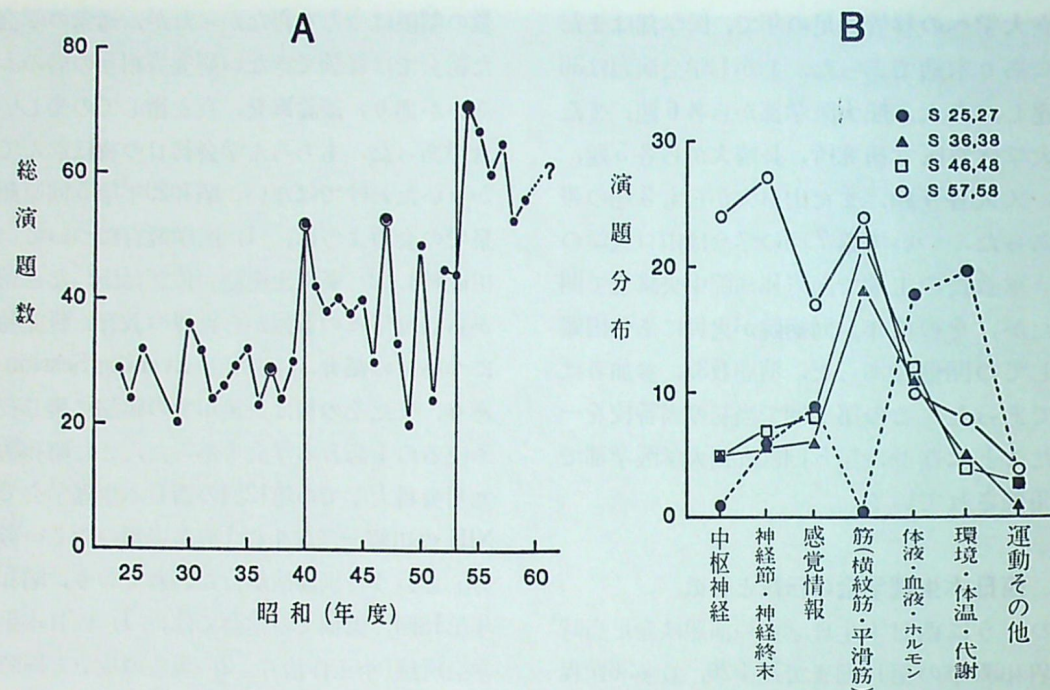


図2. 西日本生理学会の演題数とその内容の変遷. A) 演題数の増加. 二重丸は中国・四国地方会との合同生理学会. 縦線は第一次, 第二次の拡充期を示す. B) 演題内容の変化. ほぼ10年毎, 各2年間の演題内容の分布を示す (上記の合同生理学会のものは除いてある).

大山のスキーはもちろん皆生温泉を心ゆくまで堪能できた思い出深い学会であった. このため昭和41年度は, 第16, 17回と2度西日本地方会が開かれている. 第3回の合同地方会(第23回西日本生理学会)は, 昭和47年に再び山口大学丹生治夫, 村上 恵両教授の主催で宇部市の歯科医師会館で開催されたが演題53, 参加者は170名であった. そして第4回の合同会議(第30回西日本地方会), 昭和54年もまた山口大学村上 恵, 長 琢朗両教授の主催で開かれ, ポスター展示と口演を併用された新企画の学会であったが, 参加者は183名に達した. このように西日本生理学会は, 常時, 西中国地区の大学からの参加者があるだけでなく, また数年おきに, 西日本と中四国生理学会地方会の合同学会が開催され, 文字通り「西日本」生理学会を実質的にも実現しているといえよう. それにしても, 山口大学には再三合同会議を御世話いただき, その御苦労は大変であったと推察される.

### 3. 地方会演題内容の変遷

西日本地区の特徴ある演題とその内容の変遷

もみのがせない. 当初, 西日本地区の大学, 研究所は数ヶ所に限られており, 必然その演題は限られた教授また研究所の色彩を反映していた. 昭和30年以前では熊本大学を中心とする小玉教授門下の組織呼吸, 血液, 緒方教授門下の体温調節, 発汗, 九州大学瀬尾教授一派の感覚生理, 血液ガス, 問田教授指導の電気生理学, 視覚の電気現象, 久留米大学末永教授門下の神経放電シナプス, 長崎大学鈴木教授一派の内分泌, ホルモン, 三井産研の石西所長, 棚橋先生指導の労働, 血液生理学などであり, どちらかといえば植物機能生理学に関連した演題が優勢であった(図2参照).

昭和30年代またその前後に長崎, 久留米, 鹿児島大学の生理が複数講座制となり, まず昭和29年長崎大学に佐藤謙助教授が着任, 同31年, 久留米大学に瀧瀬教授, 鹿児島大学に後藤教授が任命され, 昭和33年には熊本大学小玉教授の後任に田中教授が着任されて, これら新任教授関連の演題が増加した. また昭和30年代は実験機器ことにエレクトロニクス機器の急成長の時代であり, これらを反映して演題も血液, ホル

モン, 体温, 心臓, 循環, 消化, 感覚, 脳波, 神経, 筋, 細胞生理学など多岐にわたるようになったが, 最も顕著な傾向は神経節, 神経, 筋(骨格筋, 心筋, 平滑筋)など細胞レベルの電気生理学の台頭であった. これは演題内容分布にもみられ, 昭和40年代まで続いていることがわかる(図2B).

昭和40年後半から50年代にかけてはさらに教授の新旧交代があり, これに加えて, 周知の新設大学の増設が行なわれ, 演題の内容も大きく様変わりした. 昭和46年熊本大学緒方教授の後任に佐々木教授, 同47年山口大学川端教授の後任に村上教授, 昭和49年には九州大学問田教授のあとに大村教授, 久留米大学では末永教授の後任に西教授が着任, 同52年には熊本大学佐藤昌康教授の後任に小川教授, 山口大学では丹生教授のあとに長教授が誕生, 電気生理学ことに中枢神経(中枢性体温調節)の演題が増加した. また後記のように, 福岡大学医学部, 宮崎医科大学をはじめとする新設の医科大学, 大学医学部が次々と誕生し, その演題数の50年代における急増とともに, その内容の専門分化が著しく顕著になった. それは産業医科大学の特殊環境の生理学から, 中枢神経, 視床下部, 神経節, 感覚, 各種筋肉の興奮収縮連関から生物物理, 神経分泌, ホルモンから血液, 分子生理学まで広範囲に分布した. ただその中でも中枢神経, 視床下部の演題の急増が目立ち, 本年度, 佐賀医科大学での第35回西日本生理学会ではそれが総演題のほぼ半ばをしめ, 神経, 筋の電気生理学を含めると2/3に達するという特徴を示すようになった. これは体温調節関係の学者が中枢調節を指向されたことにもよるが, 全国的な著しい動向であるといえる.

### 4. 新設大学, 講座増設にともなう変容

前記のように西日本生理学会の伝統は, この地域の特徴として今日まで引き継がれて来ているが, 生理学の進歩とその細分化, 新設大学, また医科大学, 生理学講座の増設など, 時代の変遷, 推移にともない, 生理学会地方会のあり

方も必然的にその変容を迫られることになった. それはことに九州地区でより顕著であったといえよう.

その第1期は昭和20年代後半から30年代にかけての医学専門学校の医科大学また大学医学部への昇格, これにともなう生理学講座の複数化増設であった. また大学院の併設などこれらにより生理学研究者は急増した. しかし, この第1期の増設期はむしろ地方生理学会の充実と発展をもたらし, それほどの質的变化をもたらすに至らなかった. しかしそれは図2Aの総演題の年次変化にみられるように, 昭和40年代の演題数の増加として反映されている.

しかし, その第2期, 昭和40年代後半から50年代にかけての新設大学, 医科大学, 歯科大学また歯学部の新増設は余りにも急激であり, 地方会のあり方にも物理的また質的な影響を与えざるを得なかった. ことに九州地区では大学医学部, 医科大学だけでも, 九大, 熊大, 長大, 久大, 鹿大の5校から, 一挙に福岡大学医学部, 産業医科大学, 宮崎, 佐賀, 大分の各医科大学, また琉球大学医学部の6校を加え, 2倍以上の規模となった. これに大学歯学部, 歯科大学, 医療短大などの生理学関連講座を加えると実質3倍近い増加であった. 事実, 九州地区の生理学会評議員は昭和45年に40名足らずであったが, 昭和59年の春には121名となり3倍以上に増加している. またその評議員数は全国評議員数約1,000名の12%をしめ, 全国生理学会会員の約3,000名の10%に満たない地方会員300名弱に比較して, 評議員数が相対的に多い事実は, 上記の新設の大学, 講座に新進気鋭の学者が多数招聘されたことにもよるであろう. またこれらの新設大学にはこの両3年大学院も設置され, なお今後の発展が期待されている.

このような地域の研究者, 学者の激増と, 学問の進歩, 細分化, 国際化の進展は, 必然的に西日本生理学会のあり方についても, 有形, 無形の基本的な影響をおよぼした.

その1)は地方会演題数の激増である(図2A). 従来も1泊2日の学会スケジュールのため

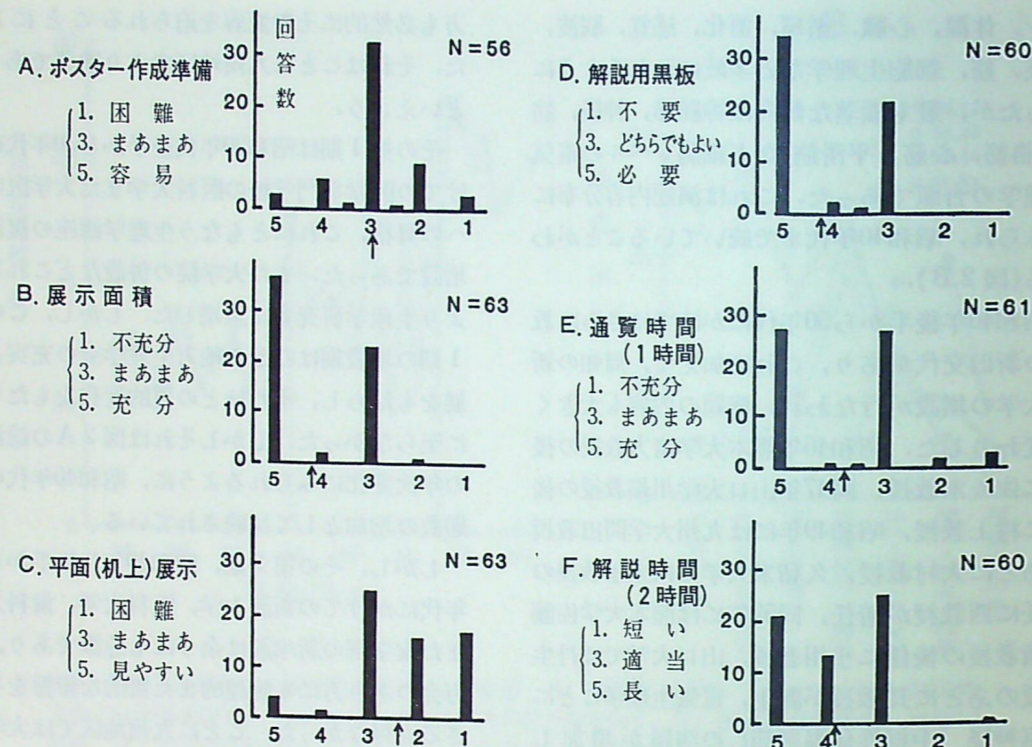


図3. ポスターセッションへのアンケート. 昭和53年の第29回西日本生理学会(石河延貞, 美原恒教授主催, 宮崎医科大学)は全演題ポスター展示というユニークの学会であり, 演題数44, 半日ごと22題を実習室台上に展示し, 解説口演が行なわれた. その結果についての両教授によるアンケート集計を示す. なお今後の学会発表のあり方についての質問に対し,

- 1) 全演題を展示口演とする……………8
  - 2) スライド発表形式を併用する……………42
  - 3) 従来のスライド発表形式のみ……………11
- の賛成があった.

多少の演題制限はあったが, それほどではなかった. しかし昭和40年代ことに50年代になると, 各講座2題の演題制限下にも集まる演題数は50題を超え, 時には70題にも達し, 丸2日, 朝から夕刻までの学会にならざるを得なかった. このため遠隔の研究者は場合によって2泊また3泊を迫られるという状況になった. このジレンマ克服のため昭和53年, 宮崎医科大学での石河延貞, 美原恒教授主催の地方会では全演題ポスター展示という斬新な企画で行なわれ, さらに美原教授はポスター展示の有り方についてのアンケートの集計を公表された(図3). 次の昭和54年, 第29回, 山口大学医学部の村上恵, 長 琢朗教授御世話の学会でも, 口演発表(40)とポスター展示(34)を併用され, 71題もの発表を1日半で処理され大きな成果を挙げ

たが, 主催者側の準備と手間はそれだけに大変であったと推測される.

その2)は上記の問題とも関連して学会開催場所の問題である. 100名以内の会であればとにかく200名近くとなれば観光地のホテルや旅館では収容できない. かりに収容できても, 学会場に講堂のような便利設備がなく, ましてポスター展示するような場所の余裕がない. その結果は都市また大学での学会開催に限定されてきたということである.

その3)は懇親会また研究者相互の communicationの問題である. 研究者の数が激増し, 専門分化が進めば, すべての方々との膚の触れ合いは望むべきもないであろう. しかし最近でも主催者の大変な御骨折りで, 懇親会は毎年盛大に行なわれ, ことに第33回(昭和57年)の熊

本文化会館での田中育郎, 小川 尚, 佐々木隆教授御世話の会, また第34回(昭和58年)長崎商工会館での小坂光男, 相川忠臣, 松田好弘教授主催の会では特別のショウやその他の企画もあり, 盛大豪華であったが, それだけにその御世話, 御負担は大変であったと思われる.

その4)は当番校持ち廻りの問題である. 大学や医科大学, 歯学部を増設により, 学会担当校の数も10数校に増加し, 従来は数年に1回は御世話できたのに, ある教授にとっては在職中一度御世話できればよい程度になったという事実である. さしあたり, 新設大学も立派に整備されたので, 宮崎医科大学を振り出しに, 昭和59年からは佐賀, 大分医科大学, 産業医科大学と大学の御紹介をかねて順次当番を受け持って戴くことになっており, いずれ琉球大学にも御世話いただくことになるであろう.

#### おわりに

このような新設の医科, 歯科関係大学の増加に伴う研究者の増大, 生理学の専門分化, 国際化は, 各地域での地方会のあり方, また将来への問題を提起することになった. 大阪大学の中山昭雄教授は, 昭和59年春の生理学会常任幹事会において, 「地方談話会についての提案」という議題を提出され, 一地方会の会合ではもはや学会としての国際的レベルの討議は期待できない. 地方での生理学会また談話会のあり方を全国的視野で再検討してはどうかという問題提起をされた.

その提案の常任幹事会での賛同にもとづいて, 九州地区でも「西日本生理学会の将来のあり方」について会員の意見のアンケート調査を実施した. このために本年の地方会の当番校, 佐賀医科大学の堀 哲郎, 久場健司教授には大変な御骨折りを戴いたが, そのアンケートの内容は,

- 1) 西日本生理学会の存続の賛否.
- 2) 存続するとすれば, その改善案.
- 3) 発展的に解消するとすれば, その新しいあり方.
- 4) その改善また解消の全国的な意見の調整と合意方法.

などであり, 全会員の意見を求めた. これらに対し, 133名の会員の方からの回答が得られたが, 本年度のこの調査では西日本生理学会の存続支持者が72.9%となり, 発展的解消の支持者25.6%を大幅に超える結果が得られた. また改善法としては, 1) ポスター展示導入による演題消化, 学会時間の短縮, 2) 特別口演, シンポジウム, ワークショップの導入, 3) 抄録の英文発表による国際化, などの要望があった.

他方, 地方会の発展的解消を支持する意見では, 1) 米国の fall meeting の特徴を取り入れた全国大会にしてはとの意見もあったが, 2) 学会や研究会が多く, 旅費の問題もあり, 総会と地方会の両方には参加できない, 3) 東京談話会のように内容に重きを置いた自由参加にしてはなどの提言にとどまり, あまり積極的な意見はみられなかった.

これらの結果についての詳細は, 他地区での地方会の意見を含めて, いずれ全国的に総合され生理学会として討議されるであろうが, 西日本生理学会としてはその伝統と歴史もあり, これらを踏まえて生理学会の将来の真の発展のために御配慮, 尽力されることを念願してやまない次第である.

この西日本生理学会の小史の執筆については, 各大学の名誉教授ことに問田直幹, 鈴木達二, 田中育郎先生, また現役教授の及川俊彦, 村上 恵, 嶺瀬教三, 橋村三郎, 相川忠臣, 美原 恒教授など多くの方々からの有難い御教示を戴いた. 心から感謝申し上げる次第である.

6. 生理学中部談話会30年史

大原孝吉

(名古屋市立大学医学部第二生理)

生理学中部談話会は、昭和30年8月28日、山国とはいえなお残暑のきびしい松本市旭町の、旧陸軍松本連隊の面影が随所に見られた信州大学医学部で呱呱の声を挙げた。生理学会そのものゝ発足と歴史については日生誌の記事“日本生理学雑誌20巻をかえり見て”(昭33, Vol 12, No. 12, 第20巻完結記念号)に詳しいが、当時、生理学会所属の研究機関の研究量の急速な増加に答え、年1回開催される生理学会総会を補う意味で各地区毎に談話会形式の地方会が相ついで発足し、それによって研究の発表、連絡の機会が供与される傾向が強かった。

中部談話会の発足当時には、すでに日本生理学会北海道地方会(第7回)、生理学東京談話会(第103回)、生理学近畿談話会(第6回)、生理学中国四国地方会(第6回)、西日本生理学会地方会(第5回)などが開催されており、各地区の生理学研究の活性化の足場となっていた。これに対し、中部地区にはそのような地方会がなく、各研究機関の研究者は、はるばる東京談話会あるいは近畿談話会に出席して発表の機会を持つことができたにすぎなかった。この実状を見られた当時の信州大学生理学教授の和合卯太郎先生は、中部地区にも先発の他地区の地方会に類する地方会を設立すべき段階に達したと考えられ、生理学中部地方会の設立を提言、実現にこぎつけられたものである。とは言い、中部地区に所属する生理学研究機関(生理学講座、研究所)の数はきわめて少ないなどの事情もあって、第1回談話会は東京談話会(第104回)と合同の生理学中部談話会(仮称)として開催された。この発会での演題数は28題あり、地方会としては決して少ない方ではなかったが、その大多数は東京談話会に属する研究機関からのもので、中部地区としては僅かに4生理学講座から7題の出題(出席者116名中、中部談話会関

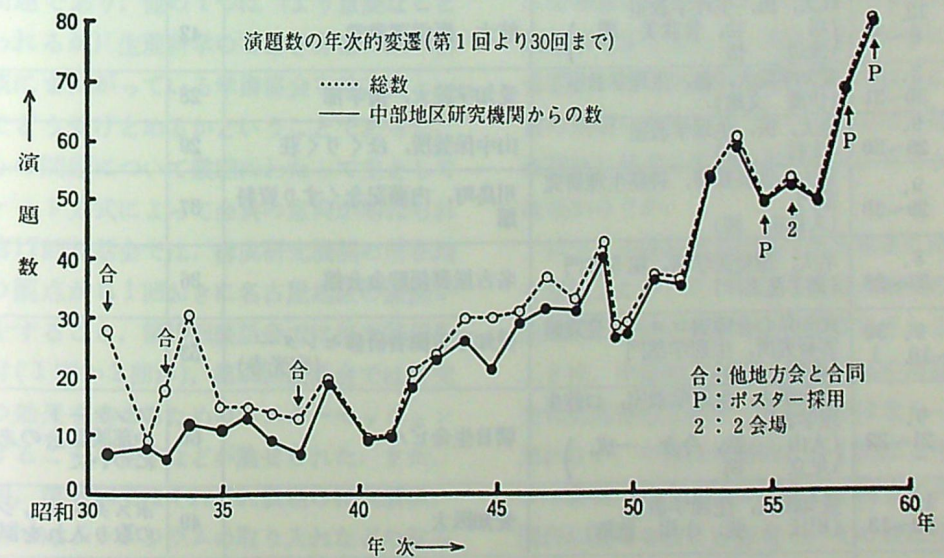
係者は世話校である信大生理学教室所属の10名を含めて38名)という菲弱なものであった。このことは、第30回中部談話会(昭和58年)において所属する研究機関が医・歯関係のみでも17大学、5研究所、発表演題数が80題(出席者159名)と比べて隔世の感がある。このように、中部談話会の基盤が他地区のものより弱く、したがってその設立が大幅に遅れたにもかかわらず、敢て独立した地方会として組織化され発足されたのは、会員の要望によるのは勿論であるが、一面では中部地区における生理学研究の将来の展望に立っての上であり、今にして思えば創設に努力された先生方の考えはまことに当を得たものであったと思われる。以上のような事情での発足であるので、第1回の当番幹事としての和合先生の気の遣いようには並々ならぬものがあつた。些細な一事かも知れないが、たとえば当日信州名物の「そば」の接待をされることになったが、松本市内の名の通ったそば屋を数店試食比較した上で慎重に決められたと聞いている。

以上の経緯で中部談話会がようやく誕生したが、この第1回の談話会には生理学会の最長老であられた永井潜先生、久野寧先生をはじめとして、中部地区、東京関東地区から非常に多数の大学生理学講座教授の先生方の来会があり、また一部近畿地区からの参加もあった(写真)。このように中部談話会に寄せられた期待の大きさとその後の発展を考えると、まことに意義深い発足であった。

爾来、昭和30年~58年間に30回におよぶ中部談話会が開催された。中部地区に属する大学、生理学関係講座、研究所などは逐次増加の一途をたどり、それにつれて談話会の演題発表数が増加し、報告される研究領域も多彩なものとなった。この間の足跡を年譜と図で



和合卯太郎  
若林 勲 坂本嶋嶺 戸塚武彦 久野 寧 永井 潜 林 隠 福田篤郎  
昭和30年8月28日 信州大学生理学実習室にて(敬称略)



## 生理学中部談話会開催年譜

回	開催年月日	当番研究機関 (当番幹事)	会場	演題数	備考
1	昭和30. 8. 28	信大, 医, 生理学教室 (和合卯太郎)	信大, 医学部, 生理学教室	28	第104回生理学東京 談話会と共催
2	32. 1. 27	名大, 医, 生理学教室 (伊藤 龍)	名大, 医学部講義室	9	
3	32. 11. 30	三重県大, 医, 生理学教室 (勝田 稔)	津市, 三重会館	18	第17回近畿生理学談 話会と共催
4	33. 8. 21~22	岐阜医大, 生理学教室 (竹中 繁雄)	岐阜医大, 生理学教室	31	自働能研究シンポジ ウムと合同
5	34. 12. 5	名大, 医, 生理学教室 (高木健太郎)	名大, 医学部講義室	15	
6	35. 11. 27	金大, 医, 生理学教室 (斎藤幸一郎, 岩間 吉也)	金大, 医学部生理学教室	15	
7	36. 10. 1	名市大, 医, 生理学教室 (新田 初雄, 大原 孝吉)	名市大, 医学部講義室	14	特別講演5題を含む
8	37. 10. 20	信大, 医, 生理学教室 (和合卯太郎, 宮川 清)	信大, 医学部病理学講義室	13	特別講演3題を含む 151回東京談話会と 共催
9	38. 10. 19	名大, 医, 生理学教室 (伊藤 龍)	名大, 医学部講義室	20	
10	40. 2. 13	三重県大, 医, 生理学教室 (勝田 稔, 村上 長雄)	三重県大, 医学部生理学教室	9	
11	41. 1. 22	岐阜大, 医, 生理学教室 (竹中 繁雄, 田村 喜弘)	岐阜県蚕糸会館	14	生物物理シンポジウ ム4題を含む
12	41. 10. 22	名大, 医, 生理学教室 (高木健太郎)	名大, 医学部講義室	21	
13	42. 9. 25~26	金大, 医, 生理学教室 (斎藤幸一郎, 大村 裕)	山代温泉, 山代荘	24	
14	43. 11. 9	名大, 環境医学研, 第5部門 (御洗玄洋)	名大, 古川図書館	30	
15	44. 9. 14	三重県大, 医, 生理学教室 (勝田 稔, 村上 長雄)	津市, 農協ビル	30	第40回近畿生理学談 話会と合同
16	45. 10. 24	名市大, 医, 生理学教室 (新田 初雄, 大原 孝吉)	名市大, 医, 基礎館講義室	31	
17	46. 10. 15~16	信大, 医, 生理学教室 (東 健彦, 宮川 清)	松本市, 県立看護教育研修セ ンター	37	アンケート, 中部談 話会の開催方法など について
18	47. 11. 18~19	名大, 医, 生理学教室 (高木健太郎)	名大, 医学部講義室	33	
19	48. 12. 8~9	岐大, 医, 生理学教室 (橋 功, 曾我美 勝, ) (渡辺 悟)	岐大, 医学部講堂	42	
20	49. 3. 30~31	愛知学院大, 歯, 生理学教室 (伊藤 文雄)	愛知学院大, 歯学部	28	
21	49. 9. 29~30	金大, 医, 生理学教室 (大村 裕)	山中保養所, ほくりく荘	29	
22	50. 9. 29~30	京大, 霊長類研, 神経生理研究 部門 (久保田 鏡)	川島町, 内藤記念くすり資料 館	37	
23	51. 8. 27~28	名大, 環境医学研, 第5部門 (御洗玄洋)	名古屋郵便貯金会館	36	
24	52. 9. 30 ~10. 1	愛知県心身障害コロニー発達障 害研究所, 生理学部門 (清野 茂博)	愛知県労働者研修センター (定光寺)	53	
25	53. 9. 21~22	金沢医大, 生理学教室, 口腔生 理学教室 (大山 浩, 今永 一成, ) (足立 明)	朝日生命ビル	60	アンケート 中部談話会のあり方 について
26	54. 10. 12~13	愛知医大, 生理学教室 (楯江 勇, 小川 徳雄)	愛知医大	49	ポスターセッション の取り入れを試みる
27	55. 10. 17~18	富山医科薬科大, 生理学教室 (川崎 匡, 小野 武年)	立山国際ホテル	53	会場を2会場とする

回	開催年月日	当番研究機関 (当番幹事)	会場	演題数	備考
28	56. 10. 16~17	名古屋保健衛生大, 生理学教室 及び総合医科学研究所発達生理 部門, 心臓血管部門 (永田 豊, 佐々木 勲) (松谷天星丸, 渡部 良夫)	名古屋保健衛生大, 医学部	49	
29	57. 10. 22~23	浜松医大, 生理学教室 (森田 之夫, 高田 明和)	浜松医大, 教育棟	65	口演: 1研究単位当 り1題 ポスター制限なし
30	58. 10. 24~25	名市大, 医, 生理学教室 (畑田 健, 大原 孝吉)	愛知県中小企業センター	80	ポスター取入れ
31	59. 10. 18~19	山梨医大, 生理学教室 (入来 正躬, 竹内 亨)	湯村昇仙閣ホテル	58 F:33 P:25	ポスター取入れ, 中 部談話会のあり方 についてアンケート

示す(個々の研究機関あるいは生理学講座すべてについて何年度から中部談話会に参加したかは, 談話会への演題申込み年次と異なるところがあって, これを正確にたどることは困難に思えた. この点, 記載に不行届のあることを関係機関の方にお詫びします).

生理学中部談話会が地方会型式の学会として発展するのと歩調を合わせて, この地区の会員数が増し, 発表される演題数の増加, 研究対象とその内容がますます多彩化するに至った. それにつれて, 談話会の学会としてのまとまり, その意義, 在り方などおそらく他の地方会にも共通すると思われる種々の問題が生起し, しばしばそれが談話会の場で検討されるようになった. 1つは演題数の増加に伴う開催日数と会場数の問題であり, 他の1つは(より重要なことと思われるが)生理科学のごとき非常に広い研究領域にまたがっている学術集会を地方会という形でどう受けとめるかということであった. これらの問題について数回にわたって主としてアンケート方式によって会員の意向が尋ねられた. 第17回談話会では, 構成研究機関の所在地分布の観点から1回おきに名古屋地区の機関が当番をすること, 第19回談話会では年次開催数の検討(1回か2回か), 第25回談話会では研究発表の効果を高めるためのポスターセッションを設けることの是非などが論ぜられた. また, 第7回, 第8回ではそれぞれ数題の特別講演, 第11回ではシンポジウムの取り入れなどの試みがなされている. なお, 30回の節目を迎えた次回第31回談話会でもひき続いてこれらの問題が

検討される予定と聞いている。(注)

地区談話会の意義は, 年1回の生理学会総会だけでは量的に処理し得ない研究の発表, およびその速報的な意義に加え, 研究者個人の比較的狭い研究対象に関してだけでなく, いわば耳学問的であるにしても他の研究分野についての知識を得, さらに専攻領域外の研究者と接触する機会(山代温泉を会場とした第13回談話会では, 夜浴衣がけでのディスカッションのセッションが設けられたが, このような学会としては印象に残ることであった)を持つことによって, 自己の専攻分野の遠心的考察に資することに意義があると考える人は少なくないであろう. 中部談話会もこの立場から原則的に一会場開催の立場を貫いて来た(例外的に第27回では二会場制を取り入れた)が, その功罪は今後の論議の対象となる. 地区談話会が単に生理学会総会の補完的役割を果たすという以上にそれ独自の別趣の意味を持つという点では中部談話会は評価に値する業績を挙げるといってよいのではなかろうか.

以上, 中部談話会の発足から現在に至る過程を概観したが, その中でも談話会結成の時期が他地区より特に遅れたことが注目される. このことは, 中部地方と呼ばれる地域の地誌学的, 文化史的特色と必ずしも無縁ではなかったかも知れない. 中部は地勢的, 文化的に太平洋側と日本海側, 中央山脈を境として関東に向う面と関西に連なる面とを包含し, その故に全体としての一体性, 集中性がなく, 「中部」ではあるが「中央」にはなり難いこと, 東西の谷間であ

ることが今だに指摘されている。しかし、生理学中部談話会はその足跡、現況から見るかぎりそのような余事の条件の影響を受けることなく、独自性を持つ学術集団として着実にそれ自身を形成し、成熟の時期に至ったものと考えられる。しかし、すべての生き物、社会の場合と同じく、成熟期には成長期にはかえり見られない問題を抱えるものであり、その点生理学中部談話会も他地区の地方会と共通する一般的問題の検討が必要な時期に達したのではないかと考える。

#### 追記：

生理学中部談話会の30年史を書くようにとの日本生理誌編集委員よりの申付けを頂いたが、その内容は単なる過去の回想ではなく将来への展望も含めてというご注文であった。このことは稿を進める上で大きな負担であり、果してその意向に少しでも副い得るかどうか全く自信のないことであった。中部談話会の経過、現況の概要は極めて大まかに本論中で述べたが、総じて現況は過去の足跡を正しく眺めることによって理解され、その現況の裡にこそ将来の展望の萌芽が含まれていることは学術研究団体の歴史発展の上でも当てはまることであろう。中部談話会が今後どのように具体的に変貌して行くかは正直のところ私の筆のおよびがたいところで

ある。ただ、学会がその本来の趣意を見失うことなく運行されて行く限り「天行は健なり」の言の如く、形のいかんにかかわらず生生発展するであろうことを願って責の一半を果したいと思う。

稿を終えるに当たって数々の資料を提供して頂き、また貴重なご助言を賜った諸先生方、また格別のご配慮を頂いた若林 勲先生および信大 大橋助教授に厚くお礼申し上げますとともに、資料の見落とし、脱落などの誤りによる失礼にはお許し、ご叱正をお願いする次第です。

#### 注)

第31回生理学中部談話会の開催を機に、日本生理学会の将来に関連する一つとして会員各位に「中部談話会のあり方」を再検討していただくことになりました。討議の資料としてすでにアンケートによる意見のとりまとめを行いました。回答52の内44 (85%) が中部談話会の存続に賛成でありました。賛成理由は、大原教授の述べられているような、専門外分野の研究の動向を知りうること、若手研究者の発表の機会として有意義なことと、さらに懇親会的役割も大きいことなどでありました。ただ、存続を賛成される方でも多くは何らかの改善が必要とのお考えでありました。

(地区編集委員 永坂鉄夫)

## 7. 東北生理学談話会の歩み

鈴木 泰三

(東北大学名誉教授)

東北地方での生理学会地方会のスタートは他の地区に比べて遅く、昭和43年である。スタートするまでに有志の間で色々と話し合いが行われたが、仲々意見の一致しなかった理由としてつぎのことがあげられる。第1に東北地区の各大学の生理学教室の教授はその出身学校の出身教室との結びつきが強く、その出身教室の研究会で研究の交流が行われてきた歴史があり、それで十分であるから改めて地方会は必要でないという意見。第2に、もともと地方会が研究交流の場としてどれだけ意味があるのか、研究発表には日本生理学会総会もあるし、また、雑誌に発表すればよいのではないか、という地方会無視の意見。第3に、東京もそう遠くないので、もし談話会で発表したければ東京談話会でも十分ではないか、とする意見、などがあった。日本生理学会はもともと保守的な傾向の強い学会でもあり、それに東北地方という風土の影響もあって、仲々新しい試みにはふみ切れなかったといえる。

しかし、東北地区にも新設の医学部、歯学部、歯科大学が増加してきたために、同じ生理学を志向する人達が集って自由に話し合う場をもとうということになり、昭和43年に初めて仙台で第1回の東北地方会がもたれた。残念なことに、そのときの記録は見当たらない。

第2回は松島で行われた。この頃は大学紛争の最も激しかった頃であり、地方会でも夜遅くまであり方論議だけが続き、研究の交流という雰囲気からは程遠く、白けきった地方会に終わってしまった。そのためか、もう地方会は止めた方がよいのではないか、という声もきかれた。しかし、このような空気もいつかは消え去るだろうということで、とにかく地方会を続けてみよう、という意見によって第3回が予定され

た、という状況であった。

昭和45年になると、大学紛争も下火になり、落ちついて地方会をやる気風が出てきて、第3回の地方会が盛岡で行われた。第3回以降は地方会の記録も残っている。それによると、東北地方会という名称は用いられておらず、第3回までは東北地区生理学集談会であり、第4回以降は現在に至るまで東北生理学談話会とよばれるようになっていく。開催地は1年毎に仙台、仙台以外という方針がとられてきた。仙台で開催するときは、交通の便もあって比較的に演題数が多い傾向にあるが、仙台以外で行った場合には会場幹事の努力によって何かとサービスがよく、談話会のムードも、また、そのあとの懇親会も盛大であった。これまでの経過をまとめると、表のようになる。

一般演題の講演は時間を十分にとってあることや、割合に時間に捉われずに発表する傾向があり、どの場合も予定の時間をオーバーする傾向があって、あとの懇親会を気にしている当番幹事をやきもきさせたが、これは嬉しい現象でもあり、今後も続くのではないだろうか。また、時折、特別講演も行われて、出席者に強い印象を与えている。特別講演数は必ずしも多くはないが、第6回には東北大学工学部の松尾正之教授が、第9回には岩手医大の佐藤 誠教授と山形大学の西山明德教授が、また、第14回には東京大学の星 猛教授が行っている。

このように、東北地区における生理学の地方会(東北生理談話会)はそのスタートからの歩みは遅々としたものがあったが、次第にその速度を上げつつあり、各大学の生理学教室の充実と相まって、現在では完全に定着し、恰も年中行事のように、盛大に行われるようになった。特に、この東北生理学談話会のもち方にも当番

幹事がそれぞれ特色をつけるという努力もあって、特色ある楽しい生理学談話会に成長したように思われる。今後はマンネリズムにならないようにというくふうが求められるのではなからうか。

東北生理学談話会の開催の経過

回	開催日	当番校	当番幹事	開催地	演題数
1	昭和43	東北大学	鈴木泰三	仙台	
2	44. 6	東北大学	田崎京二	松島	
3	45. 7	岩手医大	三田俊定, 八木舎四, 高下弘夫	盛岡(すずらん会館)	11
4	46. 9	東北大学	田崎京二	仙台(東北大学医学部)	12
5	47. 7	福島医大	横山正松, 塚原進	福島(あづま荘)	10
6	48. 7	東北大学	中浜博	蔵王温泉(やまびこ荘)	15
7	49. 10	弘前大学	尾崎俊行, 鈴木寿夫	弘前(弘前大学医学部)	14
8	50. 8	東北大学	星 猛	仙台(良陵会館)	18
9	51. 10	秋田大学	小川哲朗, 古谷野速雄	秋田(八郎瀉ハイッ)	20
10	52. 10	東北大学	青木 健	作並温泉	29
11	53. 10	東北歯科	葛西四朗	二本松(岳温泉)	19
12	54. 10	東北大学 応用情報研究センター	塚原保夫	釜房(憩の家)	25
13	55. 10	山形大学	望月政司, 西山明德	天童(出羽路会館)	19
14	56. 11	東北大学	鈴木泰三	仙台(良陵会館)	30
15	57. 7	岩手医大	八木舎四	盛岡(岩手医大)	16
16	58. 11	東北大学	西山明德	仙台(良陵会館)	30
17	59. 11	福島医大	塚原進	福島(飯坂温泉)	28

【教育】

日本生理学会教育委員会の歩み

昭和43~44年(藤森委員長)

昭和42年12月9日の常任幹事会において、藤森聞一常任幹事から、同年10月福岡で開催された第27回国立大学医学部長会議の席上、文部省大学学術局より配布された「学生実験実習設備基準」をみたところ、設備基準額が2,000万円を越える二、三の学科があるのに対し、生理学の設備基準額は最低に近い僅か700万円程度となっていることが報告された。そして、この基準は速やかに改訂されるよう文部省に要請すべきであると提案された。この提案は昭和43年4月3日熊本大学で開催された常任幹事会においても審議され、生理学実験実習設備基準の合理的改訂と設備拡充の実現を進めるため、生理学教育委員会を設置することとなり、藤森聞一教授(北大)を委員長に委嘱し、委員の人選は委員長に一任となった(日生誌, 30, 689, (昭和43))。

藤森委員長は早速17名の委員を決定し(その後2名が追加されて、委員の総数は19名となった)、翌4月4日第1回の教育委員会が開催された。当面の活動目標は上述のとおりであるが、当時は戦後20年を経て生理学の研究・教育もようやく立ち直り、これからの医学研究・教育のあり方が各方面で論じられるようになった時期でもあった。医科大学新設の要望も高まり、生理学会では生理学将来計画委員会の活動が活発で、人体基礎生理学研究設立準備委員会も設置された。したがって、教育委員会が設置されたことは、まさに時宜にかなったものであった。さて、実験実習設備基準の改訂については、生理学会のみで対処できるものではないので、藤森委員長は松田庶務幹事を通じ、関連基礎医学会に対し、合同教育委員会を設置するよう呼びかけた。緊急を要する問題ではあったが藤森委員長の熱意により、早くも5月2日には合同委員会を開催する運びとなった。この会の名称は基礎医学会教育懇談会とされ、解剖、

生理、生化、薬理、細菌、寄生虫、法医、衛生、および公衆衛生等の学会が参加した。この間の経過は、日生誌, 30, 513-516 (昭和43)に記載されている。

基礎医学会教育懇談会では、実験実習設備基準の改訂を含め、貧弱な学生実習設備の現状を打破すべく、文部省に実習設備費の特別配分を申請することとした。また、基礎医学教育のあり方の基本問題を検討することの重要、緊急性を認識し、全国医学部長、病院長会議の懸田会長、牛場副会長との懇談を企画するなど、医学教育の改善、強化について幅広い活動を行った。基礎医学各科の実習教育、教官定員、医学部卒業者の基礎医学志望の減少対策等が論議の中心であった(日生誌, 30, 692-695 (昭和43); 31, 122-124 (昭和44))。同懇談会には生理学会から藤森聞一、内園耕二、高橋 恵の3名が出席していたが、のちに真島英信、本間三郎の2名が加えられた。

懇談会では、学科別に教育の実態調査を行うことになったが、生理学会のメンバーが中心となってアンケートが作成された。生理学教育の実態については、とくに高橋委員の尽力によりまとめられ、日生誌, 31, 183-1974 (昭和4)に詳細報告されている。基礎医学会教育懇談会は第4回以後基礎医学会教育委員会と改称された。同会に対し文部省大学学術局大学課から、基礎医学振興の具体案を提出して欲しいとの要望があったので、ただちに基礎医学振興についての要望書、基礎医学教育の実態調査結果、基礎医学学生実験・実習設備関係の調書を取りまとめ基礎医学教育の実態調査成績として提出した。一方、委員会としては、上記調査以外の基礎医学教育のあり方、その振興策についての審議が遅れがちであることを反省し、これらの基本問題に取り組むこととなった。そして、委員長に飯島宗一(病理)、副委員長に森 亘(病

理)と高橋 恵(生理)が選出された。生理学教育委員会では、藤森委員長が学術会議会員に選出されたので、昭和44年度から高橋 恵教授(日本医科大学)が委員長となった。

(本間三郎)

#### 昭和44~47年(高橋委員長)

学生実験・実習設備関係の作業が一段落したので、新しい観点から生理学教育委員会のあり方を考えて、委員会内規の作成に着手した。その経過および内規案は、日生誌, 31, 709-712(昭和44)に掲載されている。しかしながら、この内規案は、昭和44年5月7日の常任幹事会でその趣旨が了承されたが、当時懸案となっていた生理学会会則改正と関連するので、決定には至らず、委員の任期を3年とすることが慣行として僅かに残っている。

昭和44年10月、佐藤昌康日本学術会議会員から、基礎医学大学院制度のあり方について検討依頼があり、教育委員会はそれを受けて、この制度の検討を行った。その結果は日生誌, 32, 308-315(昭和45)に「医学大学院制度の改革意見」として掲載されている。この検討結果は、約10年をへて昭和54年に筑波大学と大阪大学に医科学修士課程が誕生するのに役立つことになる。

昭和45年になると、教育工学的手法を生理学教育に導入することの検討がなされ、これに関連して教育機器調査アンケートが実施され、5月7日生理学会大会後ワークショップが開催された。また、生理学教育に関するアンケートおよび生理学第三講座(教室スタッフの充実)に関するアンケート調査がなされ、結果はそれぞれ日生誌, 33, 611-623, 751-763および33, 679-683(昭和46)に報告された。第三講座の設置については、強く希望する意見が多かったが、疑問ないし反対の意見も無視できないものがあって、実現にはいたらなかった。さらに、free quarter(基礎配属)教育の現状が東京大学および大阪大学から報告され、その教育的意義の大きいことが理解された。この free quarter

制度を採用したいいくつかの大学から、その成果と反省が昭和61年の生理学教育シンポジウム「特別研修制度」で発表されることになる。

一方、基礎医学教育委員会も活発に活動し、基礎医学各学科の医学教育における minimum requirement が関連各学会から報告された。生理学教育委員会では、「生理学教育の立場からは minimum requirement の考えは妥当でない。けれども、医学(部)教育における生理学教育としては時間的制約もあり、minimum requirement を考えざるをえない。」との立場から、生理学講座のみならず臨床各講座にもアンケートを発送し、意見を求めた。(本間三郎)

#### 昭和47~50年(本間委員長)

高橋 恵は昭和47年4月教育委員会委員長に再任されたが、翌昭和48年1月9日死去したので、本間三郎教授(千葉大)がその後任となった。前述の minimum requirement に関するアンケートの結果は、日生誌, 35, 45-54(昭和48)に報告された。

昭和48年4月7日、第50回生理学会大会(九大)において「生理学教育シンポジウム」が初めて開催され、学生を被験者となる場合の安全対策、推奨する実習項目、生理学教育への時間配分についてがテーマとして取り上げられた(日生誌, 35, 551-562(昭和48))。以後おおむね毎年、生理学会大会時に教育シンポジウムが持たれるようになった。

昭和48年度は、生理学実習設備改善の要望書作成をめぐる審議が重ねられ、実習改善に必要なと思われる実習機器と実習のために使われている費用についての現況調査が行われた。その結果は、日生誌, 36, 43-46(昭和49)に報告されているが、年間の実習費の平均は1,651千円で二講座分の校費の約1/3に相当し、学生一人当たりになると16.2千円であった。これらの作業と審議の結果をまとめて、「生理学学生実習設備改善に関する要望書」とし、昭和49年3月1日付で文部省大学学術局長宛提出した。その要旨はつぎのようであった。

1. 120名の学生を、1グループ各6名の20グループに分ける。
2. 10グループに対して10台のポリグラフを準備する。
3. 残り10グループには、10種類各1台の実習機器を準備する。
4. 以上の予算として35,770千円が必要である。

この要望書は、全国公・私立大学にも送付された。要望書の効果ばかりとはいえないが、後日学生実習改善費が大幅に増額された。しかし、それが生理学実習に実際に配分された大学はほんの少数に留まった。

昭和49年6月27日、第51回生理学会大会(北大)の教育シンポジウムでは、生理学実習改善、生理学実習の目的と意義、客観試験について討議が行われた(日生誌, 36, 415-430(昭和49))。(本間三郎)

#### 昭和50~53年(酒井委員長)

次期委員長には酒井敏夫教授(慈恵医大)が選ばれた。そして、このときから委員長には、国・公立および私立大学の教授が交互に選ばれるのが慣例となった。昭和50年4月3日、第52回生理学会大会(三重大)の教育シンポジウムでは、Teachers Training, 医進教育と生理学、基礎医学と医師国家試験がテーマに取り上げられた。

この時期の教育委員会の最大課題は、文部省へ提出した要望書の実現であった。そして、そのためには要望書の内容に見合い、かつ要望書に迫力を与える「生理学実習書」の刊行が必要であると考えられた。一方、第50回大会の教育シンポジウムに関連して、現在各大学で行われている実習の項目、種類、時間数などの調査が行われたが、教育委員会が生理学実習書を編集することの要望がかなり多いことが注目された。各大学がそれぞれ単独で毎年、生理学実習用の教本を作成することは、かなりの負担でもあった。そこで、日本生理学会編として刊行できる「生理学実習書」の計画が進められること

となった。

まず全国の生理学教室手製の実習書が集められ、その内容が検討されると同時に、再度生理学実習についてのアンケート調査が行われた(日生誌, 39, 27-28(昭和52))。これらを基礎にして実習項目を選択した第一次案を「生理学実習書編集計画の経過」として常任幹事会に報告し、その結果、あらためて実習書編集の作業を委嘱されることとなった。この一次案は、さらに検討を加えられ、「生理学実習書目次案」として、昭和51年6月2日、第53回生理学会大会(東北大)の教育シンポジウムにおいて発表された(日生誌, 38, 215-218(昭和51))。

本計画および目次案は、大方の賛同をいただくと共に、出版社の厚意を得て順調に進捗し、「生理学実習書・日本生理学会編」として、早くも昭和52年4月に南江堂から出版された。幸い売行きが良く、医学部以外の学部でも使用され、印税収入は生理学会会計に寄与することとなった。翌昭和53年には、本書刊行一年の反省として、「生理学実習書に対する反省と将来の問題点」というアンケート調査をお願いし、将来の改訂に際しての参考資料を残した(日生誌, 40, 79-81(昭和53))。本書の序文には、医学の進歩、教育体制の変化に対応して、数年ごとに、その時点での日本生理学会教育委員会が音頭をとって改訂を行うように特にお願いしてある。昭和53年には、本書の中国語訳が早くも現れている。昭和53年4月、酒井委員長は、本間、大村両委員と伊藤庶務幹事と共に文部省に医学教育課長を訪れ、「生理学実習書」を添えて生理学実習改善の要望書を手交した。その効果は極めて著しく、昭和54、55年度に医学設備費が教室毎にそれぞれ200万円増額されることとなった。

一方、医学・歯学修士課程の設置が大学設置審議会から答申されたのを機会に、この問題が論議され、昭和52年4月4日、第54回生理学会大会(鹿児島大)の教育シンポジウムのテーマとなった。(酒井敏夫)

## 昭和53～56年（大村委員長）

次期委員長には、慣例にしたがって国立大から大村 裕教授（九州大）が選出された。生理学実習を教育効果があるように適切に行うためには、同一種類の器械設備を多く備えて、同一課題の実習を同時に行うことが一番望ましい。教育委員会が編集した生理学実習書が昭和52年4月に発売されたことと、昭和54年から文部省の医学設備費が200万円増額されて、その2年分計400万円を生理学実習設備の整備拡充に使用可能になったことが、ある程度上記の希望をかなえてくれることになった。各実習項目の具体例についての講習会を年1回生理学研究所で開催してはどうかという案が出たが、実現にはいたらなかった。

一方、生理学実習書を活用するために、視聴覚教育機材およびシミュレータを積極的に利用することが提案され、昭和53年4月1日、第55回生理学会大会（新潟大）の教育シンポジウムでは、「生理学教育におけるVTRの利用」と「生理学教育における実習と実験供覧」がテーマにとりあげられた（日生誌, 40, 121-125（昭和53））。さらに、各教育委員がそれぞれ一つの実習項目についてビデオテープを作成し、実習教育の効率化を計るとともに、希望会員にはビデオテープを有料頒布することを計画した。この企画は幸い文部省科学研究費（代表：本間三郎）と医学教育振興財団（代表：酒井敏夫）の援助を受け、29の実習項目についてビデオテープを作成することができた。これらのビデオテープは、第57および58回（昭和55および56年）生理学会大会の会場および教育シンポジウムで公開し、また項目のリストを各大学に配布し、生理学会から販売することとなった。第55回生理学会大会以降の教育シンポジウムのテーマはつぎのとおりである。

第56回（昭和54年4月4日、慈恵医大）：生理学教育と独創性、生理学教育（日生誌, 41, 459-463（昭和54））

第57回（昭和55年3月27日、神戸大）：VTR利用による生理学教育（日生誌, 42, 397-401

（昭和55）

第58回（昭和56年4月1日、徳島大）：教育委員会年次報告、医科学修士課程について、中学・高校における生理学教育（日生誌, 43, 466, 589-590（昭和56年））

生理学実習書については、中国で上海生理学研究所、斜科教授ほか9名の生理学者によって翻訳され、16,200部印刷されたことが明らかとなった（定価2.25元）。この翻訳は生理学会には無断で行われたが、本書が中国生理学の教育と研究に貢献していることは喜ばしいことである。また、本書発行後すでに4年間経過し、その間に1万部販売されたので、昭和56年度に改訂することとなった。改訂の要点は、1) 歯学部生理学実習にも使用できるようにする、2) 生物学関係の実習でも使用できるようにする、3) 設問をより適切なものにする、であった。改訂作業は、大村 裕、酒井敏夫両編集者が中心となり、各教育委員会委員がそれぞれに割り当てられた実習項目をレビューして、執筆者にコメントを送り、加筆訂正を依頼するという形ですすめられた。

昭和55年8月、第28回国際生理科学会（IUPS）がブダペストで開催されるにあたり、生理学教育シンポジウムに参加の要請があった。これに対し生理学実習書の説明と作成したビデオテープの解説および供覧をすることとした。まず、各教育委員会委員がそれぞれに割り当てられた実習項目の要旨を英訳するとともに、体液調節（星 猛）、筋肉（杉 晴夫）、および心筋活動（後藤昌義）については全文を英訳し、昭和大学 A. Simpson 教授の校閲をへて、小冊子とした。この小冊子は、各国 IUPS 教育委員に送付し、国際会議場でも無料で配布した。シンポジウムでは、シンポジウムでは、本間三郎委員が実習書について、大村 裕委員がネコ誘発電位のビデオについてそれぞれ解説を行った。実習書の全英訳も考慮されたが、内容が主たる販売先と考えられるアジア諸国の実習実状にそぐわないので、売行きが懸念されたため見送られた。（大村 裕）

## 昭和56～59年（菊地委員長）

次期委員長には、菊地録二教授（東京女子医大）が選ばれた。前委員会からの引継事項であった実習書の改訂作業は順調に進められ、昭和58年4月10日、第二版が出版された。この第二版は昭和62年3月までに5,000部発行されている。

第59回生理学会大会（昭和57年4月、慶応大）では教育的な解説講演が数多くおこなわれるので、教育シンポジウムは行わず、全解説講演の要旨を日誌に掲載し、またいくつかの講演についてはビデオテープに収録し、会員に有料頒布することを計画した。そして、山下 博委員が中心となり産業医大視聴覚センターの協力を得て、下記の4講演のビデオテープを作成した（日生誌, 44, 236-237, 572-573（昭和57））。

1. P. O. Bishop 教授：Central Visual Pathway
2. 伊藤真次教授：神経内分泌学
3. 富田恒男教授：ERGの細胞起源
4. 浅沼 宏教授：大脳運動野の構造と機能

このビデオテープも会員の協力によって、予定数を頒布することができ、若干の黒字となったので、学会会計に寄与することになった（日生誌, 45, 175-176, 317-318（昭和58））。

教育委員会では、いままで数回にわたって教育に関するアンケート調査を行ってきたが、最終調査から5年以上経過し、教育内容も相当変化したであろうと考えられたので、再び広範な調査を行うことが計画された。まず、調査項目選定のための作業グループが作られたが、電算機処理のため東京女子医大第一衛生学教室の清水 悟氏に特別参加をお願いした。アンケートの回収率は60%を越える好成績で、集計結果の分析は各教育委員が分担して行い、第一報（日生誌, 45, 318-330（昭和58））、続報（日生誌, 46, 270-278（昭和59））、および歯学部編（日生誌, 47, 33-46（昭和60））として報告された。

昭和58年8月24～26日、New South Wales, Australia で IUPS の教育ワークショップが初めて開催された。これに菊地委員長が出席し、会

議の様子は日生誌, 46, 165-196,（昭和59）に詳細述べられている。次期の委員長には、副委員長であった中馬一郎教授（大阪大）が選出された。（菊地録二）

## 昭和59～60年（中馬委員長）

委員長の交代にともなって、委員も約半数が交代した。そして、全常任幹事にアンケートが発送され、新委員会が取り上げるべき事項について意見が求められた。寄せられた意見および委員会での討議の結果、大会時の教育シンポジウムを再開することになり、昭和60年3月28日、第62回生理学会大会（久留米大）では「生理学の新しい分野への教育的展望」と題するシンポジウムが行われた（日生誌, 47, 690-692（昭和60））。その一つのテーマであった臨床生理学・病態生理学の教育に関連して、アンケート調査が行われた。このアンケートは生理学担当教授のみならず、内科系教授280名および外科系教授177名にも発送された。調査結果は日生誌, 47, 243-252（昭和60）に報告されている。

昭和60年7月28、29両日、生理学研究所において、研究会「医学教育と生理学」が開催された。この研究会は、医学教育のなかで生理学をどのように位置づけ、また生理学各領域の教育内容はどうかを論議するため、教育委員会が企画し、「生理学研究所研究会」に応募、採択されたものである。16名の教育委員に加えて、各分野から7名の参加者を得、盛会であった（日生誌, 47, 787-798（昭和60））。同年12月14日には、Göttingen 大学生理学教授 H. D. Henatsch 博士の「西独の生理学教育」と題する講演会を、学士会館赤門分館において開催した（日生誌, 48, 533-535（昭和61））。

第63回生理学会大会（山形大）の教育シンポジウムのテーマには、free quarter, 基礎配属などの名称で呼ばれている「特別研修制度」が取り上げられ、そのためにアンケート調査がなされた。アンケートの回収率は、大学別で97.5%という高率で、この制度に対する関心の

高さが伺われた。調査結果は、昭和61年4月2日の教育シンポジウムの冒頭に報告されたが、現在29大学(69.1%)で特別研修制度が実施されている実体が明かとなった(日生誌, 48, 650-657(昭和61)).

昭和62年4月1日, 第64回生理学会大会(千

葉大)の教育シンポジウムには、「生理学教育の中で『死』をどのように捉えるか」がテーマとなった。また、教育委員会の発足から現在までの活動状況をまとめた「日本生理学会教育委員会の歩み」が企画され、日生誌に掲載されることとなった。(中馬一郎)



[特別企画]

名著復刻への道

編集幹事 酒井敏夫

昨年昭和60年12月23日の日本生理学会常任幹事会の際、日本人生理学者の書かれた名著と称せられるものを復刻したらとの意見が出されました。これを受けて、編集幹事が常任幹事の皆様から御希望の著者を聴取し、漸定的な一覧表を作りました。

翻って、復刻という作業になると、取り上げられた一連の多くの著書が対象となりますから容易なことではありません。問題は、選書とそのランクづけならびに購売数の確保という経済性要因の解決が残されます。

このような議論の中から、対象となる著者を一堂に集め、容易に閲覧、貸出しができる場所を定めて置くことの意味も提出され、岡崎の生理学研究所がその労をとって下さることになりました。

さらに、これらの著書の価値を広く日本生理学会々員に紹介する必要がありますので、適当

な方に、短い comment を書いて頂き、日生誌に掲載する計画を立ててみました。今回一覧表のすべての著書についての解説を充足できませんでしたが、追って寄稿して下さいを期待しています。

このようにして、広い会員層の輿論を見きわめたいうで復刻という段階を踏んだらと考えます。

いずれにしても、すでに容易に入手困難なこれら名著を岡崎の生理学研究所に御寄贈頂ければ幸甚です。

追記：酒井が若林 勲、渡辺 昭、西村明徳の諸先生に名著解説をお願いした中で、藤本守、古河太郎ならびに中山昭雄の諸先生から特別な寄稿がありました。そのまま読物としての価値があると判断されましたので、短縮するよりも元の姿を残すべく独立したものとしました。

永井 潜	生命論	洛陽堂	1913
大沢 謙二	生理学講義要目	精美堂	1914
永井 潜	生物学と哲学との境	カオリ社	1916
永井 潜	医学と哲学	洛陽社	1922
永井 潜	科学の今昔	春秋社	1929
永井 潜	科学的生命観	春秋社	1929
永井 潜	道と自然	人文書院	1936
永井 潜	人性論	人文書院	1943
永井 潜	日本生理学文献 (明治6年~昭和5年)	在職廿五年記念出版	
J. F. フルトン	生理学史粹	岩波書店	昭和8年
原島 進訳	近世生理学史論	人文書院	昭和6年
藤岡 巖	The theory of decrementless conduction in narcotised region of nerve	Nankōdō	1924
Genichi Kato	The microphysiology of nerve	Maruzen	1934

Yas Kuno	The physiology of human perspiration	Churchill	1934
HIDEZURUMARU ISHIKAWA	The Fundamental phenomena of Life.	同明会出版部	大正13年
佐武安太郎	Secretion of adrenaline and sympathins	南山堂	1955
大谷卓三	興奮伝導学説小論	養賢堂	1938
暉峻義等訳	ハーベイの血液循環の原理	岩波書店	1940
田崎一二	神経繊維の生理学	河合商店	1944
田崎一二	神経生理学序説	三共出版	1948
藤田敏彦	感覚生理学 <sup>実験示説</sup>	創元社	昭和24年
福原武	生理学実験法(改訂版)	南山堂	昭和25年
名取禮二	筋生理学	丸善	1951
正路倫之助	医学概論	南江堂	昭和33年
吉村寿人	PHの理論と測定法	丸善	昭和40年
久保秀雄	酸化還元電位	南条書店	1967
井上章	労働生理学説	日本科学社版	1967

永井 潜著 生命論  
洛陽堂, 384頁, 大正2年

若林 勲

著者永井先生東大助教の時代に公にされたもので、冒頭に「物」に就いて少しも知る所なく「心」に就いても亦然り、両者共に有りと見ゆるのみ、而かもそれは決して幻影に非ず」というゲーテの詩を掲げた。世俗滔々として物に奔ろうとするが、物も心もともに生命の世界にはかならない。われらが生きている生命現象について諸学者が研究した梗概を生命論の名のもとで紹介したのが本書で、今日の生物物理学ないし生物工学の発展よりすれば増補の要があるのは止むを得ないが、著者の意図するところは渝らないと思う。内容：1. 物は見様、2. 生物と無生物、3. 器械説と生氣説、4. 生体の組立、5. 物質代謝、6. 勢力転換、7. 人工アメーバ、8. 形態変化、9. 系統発生、10. 遺伝、11. 変化性調和、12. 個体発生、13. 生物と刺戟、14. 生物に於ける調和、15. 結論、末尾に付したエジンバラの Schäfer 教授の講演“Life: its nature, origin and maintenance”の訳は学者必読の生命論といってよい。

永井 潜著 生物学と哲学との境  
カオリ社, 536頁, 大正15年

若林 勲

著者が青春の3年を過ぎた月沈原(Göttingen)大学生理学教室の Prof. Verworn に本は捧げられた。恩師に伴われた散策の道々、東海の青年は哲学を教えられた。健全な人生観・円満な世界観を樹立せんとして舌端火を吐き筆鋒剣の如き Verworn の心を以て心となし、「医学と哲学」「生命論」に次ぐにこの本を公にされた。

医界の新趨勢(文化の向上と螺旋階段・液体病理説・ホルモン・免疫・癌・その他)より精神の身体に及ぼす影響・生物学と哲学との関係・生活現象研究の真諦(合目的性・追目的性……)に及ぶ。以上のこの3部作は当時の青年にひろく愛読せられ、老生理学者たちの思い出の書となった。自然科学畑のみでなく経済学者元東大矢内原総長も青年時代に読んだといわれたのを記憶する。本書は以て当時の思潮をうかがわせるものであるが、今日においても無用の書とは思われない。

永井 潜著 医学と哲学  
洛陽堂, 559頁, 大正11年, 再版

若林 勲

本書は、明治40年著者の恩師大沢謙二先生の在職25年記念に際し、恩師に捧げたものである。東京帝国大学卒業後ドイツに留学、Verworn 教授に師事し、Göttingen の研究室で生理学を学び、また社の散歩で哲学を教えられて帰朝した壮年の著者が、意気軒高筆を執って古代の医学と哲学より中世紀の思潮、ついで近世紀における医学と哲学の諸学派、さらに過渡期の医学、そしてカントおよびその後の哲学諸学派を述べた後、晩近の実験生理学の発展から精神と身体の問題を論じている。この身心問題は、この本の圧巻というべきもので、生氣論か唯物論か、二元論か一元論か、結論として医学哲学の相関・精神的二元論へと導かれる。今日の中枢神経生理学興隆時代、コンピューターで身心問題を解決しようとする人でなくとも、その一読を庶幾したい。

永井 潜著 科学の今昔  
春秋社, 225頁, 昭和9年

若林 勲

科学とは何か より筆を起し、哲学との関係を述べ、古代・中世・近世の科学の発展かつ生物学・生理学の進歩の跡を多くの挿図を以て追跡し読者は厭きることがない。

惜しむらくはこの貴重な図版が往々鮮明を欠くことと、記述が今世紀のはじめでストップしていることで、古典書としては止むを得ない。付録に年表がある。井上清恒著生物学史展望(内田老鶴圃新社)はこれを補うであろう。

永井 潜著 科学的生命観  
春秋社, 186頁, 昭和4年

若林 勲

実験生理学の立場よりすれば、宇宙の最複雑な生命現象も物としての理法に従うことは疑うべくもない。本書は生活体の物質的側面・化学的側面・酵素の作用、そして生活現象の内部的

条件を興味ある筆致を以て解説したものである。

永井 潜著 道と自然  
人文書院, 423頁, 昭和11年

若林 勲

「人は地に法り地は天に法り天は道に法り道は自然に法る」という古い哲人の言葉から書名を得た。自然があらゆる事象の根源であり、物心の対立・自然と人生の交渉についても生命こそ一面物であり一面心であるとする著者の余瀝がいつしか読者の心にアピールするのである：——。生物学と社会学、。人口問題、。遺伝と結婚、。民族衛生、。偉人論、。死と寿命、。断種法、遺伝問題、。暗黒時代の科学、。偉大なる医家の足跡。

永井 潜著 人生論  
人文書院, 386頁, 昭和18年

若林 勲

生理学者の学窓雑筆とでもいうべきか。著者の名文は多方面にわたり題目を見るだけでも興味を喚ぶ。古人の言葉「江畔何人か初めて月を見しや」の文学的表現から人類の発生・石器時代の人類・ホモサピエンスの研究と原始文化と生活を紹介し太古の日本人とその起原を論じ、転じて人体美を考察、ついで手と生活、人体の左右非対称と右利左利問題——これは著者の恩師大沢謙二の利き手の研究を端緒とするものであろう——53頁に渉る。次に、原始芸術の話、古代の色覚、最後に述べる人種衛生の理論と人種衛生・民族の興亡とはこの本の圧巻ともいうべく142頁を費してある。ユーゼニックスを論じ、民族の未来に思いを致し、国亡びて山河あり人逝いて草樹深しの詩を引いている。その熱意は本文を読む人の心に自ら伝わるであろう。

## 東大生理学教室篇

日本生理学文献 (明治6年~昭和5年)

—永井 潜教授在職25年記念出版—

東大生理学教室発行, 昭和12年

若林 勲

永井先生在職祝賀のため橋田邦彦教授の指導の下に生理学教室員を総動員して調査し, 山極一三助教授が纏めて完成した。邦文発表論文に限局したが題目総数的3,800題に及んだ。臨床面の研究も含まれている。昭和6年以後も継続方の企図はあったが実現しなかった。

佐武安太郎著

## Secretion of Adrenaline and Sympathins

南山堂, 158頁, 昭和30年

西山 明德

東北大学医学部生理学第一講座の初代教授であった著者 (1884~1959) が, 研究のライフワークを英文でまとめた書である。1925年後に“無麻醉無縛法”と名づけられた自然の状態での副腎髄質ホルモン分泌を測定する画期的な研究法を確立し, 以来30年にわたって研究した種々のストレスや薬物による髄質ホルモン分泌の実体, それらの生理的意義およびホルモン分泌の調節機構について詳細に記述している。出版後30年経た現在, 本書はなお副腎髄質ホルモン分泌生理の解説書として色あせることなく, 光輝いている。

田崎一二著 神経生理学序説

三共出版, 昭和23年

渡辺 昭

田崎一二博士の著書は, 日本語で2冊, 英語で3冊ほど書かれているが, いずれも自分自身で行った実験事実に基づいて, 通説にとらわれない独自の意見が表明されているという特徴を持つ。本書は, 著者の若き日の著作の一つで, その学風を知るのにことに適している小冊子である。ここで, 著者は自ら確立した神経線維の単離技術により, 巧みな実験を重ねて跳躍伝導

の現象を発見していった様子を示す。最初の数章には, 研究方針についての著者の見解が述べられており, 前人未踏の領域に立ち入った一人の科学者が手さぐりで新しい道を求めてゆく様子が感動を誘う。中編に述べられた実験は, 電気生理学での基礎的な実験事実として現在でも少しも価値が失われない。しかし後編の記述は, その後の英語の著書においてはほとんど削除されている。この著書が, 戦後の困難な時期での出版であること, 当時, 刺激装置としてはヘルムホルツ振子しかなく, 陰極線オックスコープも入手のきわめて困難な時代であったことなども, この書の理解のため忘れてはならぬことと思う。

藤田敏彦著 感覚生理学実験示説

創立社, 229頁, 昭和24年

若林 勲

藤田先生は多年東北大学後岩手医大で生理学を教えられた感覚生理学の権威, 昭和21年秋に機会を利用し藤田先生が学生に実験させまたやってみせられてきた多数の設備を公表説明されたのが本書で, それをわずか230頁, 82図に纏められた世界的にも類の乏しい本である。今日の感覚生理学の主流は, 電気生理学的側面の開拓であって, 本書のような古典的な「感」, 「覚」ないし「知覚」の側面は顧みられない傾向がある。古典的境域を彷徨することもまた楽しいのではあるまいか。視官について23題, 158頁, 聴官については8題30頁, 触官・平衡官について5題24頁で, 後記の21頁も教育者のために逸す可からざる文字である。

名取禮二著 筋生理学

丸善株式会社, 198頁, 昭和26年

酒井 敏夫

戦後, 大学図書館は荒廃していた。また, 教室図書館もやっと疎開から帰り, 荷ほどきが完了するかしないかという状態であった。もちろん, 外国の図書は進駐軍の日比谷図書館で読むしか術のない時に, 筋生理学は書かれた。身近

に執筆される名取先生の姿を拝見した。

原稿のとき, 校正刷のとき, さらには丸善から発刊されてから, 座右の書といってよい位読んだ。筋生理学ではつかめない, もっとすすんで詳細の箇所を知りたいときに original を求めた。古い筋生理学の流れを, 日本語で読めたことは, 私にとって大変省エネルギー的であった。後日, 知ったのであるが, この書に引用されている文献は, すべて教室図書室にあり, これらを教室抄読会で輪講されたという。

久保秀雄著 酸化還元電位

昭和22年11月15日

南条書店, 東京, 164頁

中馬 一郎

本書は, 本学会特別会員であった故久保秀雄が, 大阪大学医学部第一生理学教室において, 昭和12年ごろから開始した酸化還元電位に関する約10年間の研究結果を164頁にまとめたものである。著者久保は, 昭和初期から物理化学を生理学へ導入することの必要性を説き, かつ実践してきたが, その最初の成果の集大成が本書であるといえる。

第1章は, 酸化と還元の定義, 酸化還元電位の熱力学的導出と測定法などの緒論にあてられ, 第2章は代表的な生体酸化還元系の特性, 第3章は水素 (電子) 伝達の順序性について述べ, 第4章では細胞の酸化還元緩衝系についての研究結果から細胞内酸化還元電位の生理的意義に言及している。そして, 第5章は, 酸化還元電位のその他の応用例にあてられている。

当時, 酸化還元電位についての単行本といえば, R. Wurmser の Oxydations et Reductions (田宮 博ほか訳: 生体酸化還元, 装華房, 昭和10年) と L. Michaelis の Oxydations-Reductions-Potentiale (1929) ぐらいしかなく, 特に実験法について詳細に記述した書は見あたらなかった。したがって, 本書がこの方面に関心のある研究者に非常に歓迎されたことは当然であろう。日本人の手になる酸化還元電位についての最初の単行本として, 歴史的な出版物で

ある。

内山孝一著 明治前 日本生理学史

日本学士院, 327頁, 昭和30年

酒井 敏夫

一つの学問には必ず歴史がある。学問の創造の背景には, その学問の伝統があり, 伝統の上に創造がなされることは明らかである。生理学の正統を継いで, これが創造をなすことは, 私どもの生命であり, 歴史の中に生命をつかむことが歴史を研究するものの任務であろうと考える。

これは, 著者内山孝一博士のはしがき冒頭の一節であるが, 著者は日本生理学会の創設に当って初めから参劃され, 今日あらしめた功績者の一人である。日本生理学教室史上巻の実現にも文字通り, 情熱を以って推進されたわけであるが, その背景に連なる古き時代の生理学の歴史を統一ある姿にあらしめたのが本書であるといえる。日本における近代実験生理学の建設者は, 大沢謙二博士であるが, 大沢をその位置につかしめたのは, ドイツ医学者チーゲルであった。内山は, これ以前における生理学の歴史を求め, 多くの文献を渉猟し, 西洋の自然科学としての実証的生理学の紹介は杉田玄白訳の「解体新書」にあったとしているが, 当時の出典はすべて解剖学から生理作用を推察するもので, 多くは観念的なものであった。

ところが, 外来文化の訳書の中にあって, 生理学の独創的研究がわが国にもあったことを発見されている。それは, 大矢尚斎の「寛政の婦人解剖図」と伏屋素狄の「和蘭医話」の中に見られる記録である。尿生成における濾過のメカニズムを墨汁または藍汁を用い, 実験観察を行ったもので, 内山はこの時代にこのような詳細な観察を行いつづけたことは驚きであり, 日本人の中に独創を発見したと述べている。

書名は, 明治前, 日本生理学史とし江戸時代の医学を知るうえで多くの文献が紹介されており, 大変貴重な資料として残すべき対象と思われる。

## 興奮伝導学説

古河 太郎

1) Genichi Kato: The theory of decrementless conduction in narcotised region of nerve. Nankodo, 1924.

(神経の麻醉部における不減衰伝導の学説).

南江堂 166頁, 1924 (53図, 62表, 3キモグラフ曲線図)

2) Genichi Kato: The microphysiology of nerve. Maruzen, 1934.

(神経の微小生理学)

丸善 136頁, 1934 (91図, 9表)

3) 大谷卓造: 興奮伝導学説小論

養賢堂 213頁, 東京, 1938 (106図, 11表)

若い会員諸氏もあるいは耳にしておられるかと思われるが、大正の終りから昭和の初めにかけて、わが国の生理学界では、麻醉下の神経の興奮伝導が減衰性であるのか、あるいは加藤先生がいわれるように、不減衰性であるのかに関して大きな論争が繰り広げられた時期があった。加藤先生の「不減衰伝導学説」の書物は、当時一般に信じられていた減衰伝導の考えが実は不完全な実験結果と誤った解釈に基づくものであり、本当は麻醉部においても全か無の法則が成立し、伝導は不減衰であるという学説を提唱されたものである。今回これを読んでわかったのは、書物の内容が実は一つの大きな学術論文であって、しかもその内容が大変厳しく、例えばそのまま *Journal of Physiology* に掲載されていてもおかしくないようなものであることであった。日本生理学教室史上（慶応大学の部）などによると、不減衰伝導に関する最初の学会発表は第2回日本生理学会（大正12年、福岡で開催）の席上で行われたが、予期に反して新学説に対する反対がきわめて強いことが判明したため、先生は方針を変えられ教室を総動員して実験に取り組まれる一方で、早くも翌大正13年（1924年）に結果を英文の単行本として南江堂から上梓し、国内外の学者の批判を仰ごう

とされたのである。それが上記の書物であるが、減衰伝導の学説は非常な権威として尊敬されていた Max Verworn（ドイツボン大学教授）によって提唱され、英国ケンブリッジ大学の Keith Lucas や E. D. Adrian といった錚々たる学者の実験によっても支持されており、それが間違っているなどということは非常に考えにくい状態であったといわれる。

当時この種の実験は蛙や蟻の神経筋標本（坐骨神経腓腹筋標本その他）を用いて行われており、減衰伝導説の根拠とされていた実験には、(1)長短比較麻醉実験における消滅時間の測定（麻醉部が長いほど、早く伝導遮断に陥る、すなわち消滅時間が短い——あるいは麻醉部が長いと薄い濃度で伝導遮断が起こる。）や(2)麻醉部位に与えた強弱刺激の効果の差異（麻醉部より上流に与えた刺激の効果が遮断されてからでも、直接麻醉部に電気刺激を与えるとき強刺激であると興奮が伝えられ筋が収縮する）などを主とし4～5種類にも及ぶが、それら減衰説の根拠とされていた実験でもそれを注意深く行くと不減衰伝導を示す結果が出ることを加藤先生は主張されたわけである。書物では、それらに追加して9種類に及ぶ追試実験の結果が詳しく述べられているだけでなく、違った結果に至る理由も明示されており、例えば(1)では麻醉薬の拡散浸透が全部の長さについて必ずしも一様でなく、えてして分枝部から早く侵入して遮断を起こしやすいことが挙げられており、(2)については電流滑走が原因であるとされている。この電流滑走は確かに実験の盲点であったようで、滑走が起こらないような状況にする場合、あるいは電流刺激でなく、神経をはさみで切断したり焼いたりしても筋収縮が生ずることはないということも述べられている。先生の御本の巻頭に大きな蟻の背にトノサマガエルがとまっている写真が出ているが、日本産の特大的蟻から取った長い坐骨神経について実験されたのが成功の大きなモーメントであったとされている。ちなみに、Lucas らはあまり大きくない蛙で実験していたため、例えば Adrian が行った同一神

経幹の2ヶ所を麻醉する実験においても、おのおのの麻醉部の長さを十分長く設定しなかったのである。ちなみに、加藤先生が最低必要とされた麻醉部の長さは6mmである。

2番目の書物、すなわち「神経の微小生理学」は昭和7年（1932年）の刊行であって、生きた状態で単一神経線維あるいは筋線維を分離する方法を応用して行われた各種の実験について述べられている。最初本書を手にとりて頁を繰ったときの印象は、多数の図や写真が入っていて眺めても楽しいと同時に大変わかりやすいということである。わかりやすいのは、本書の内容が今日の神経生理学と同一の線上にあるためであり、それはすなわち本書で述べられている内容が正しい方向に向かった先進的なものであるということでないかと思われる。いうまでもなく、単一神経線維を分離する技術は加藤先生の教室で独自に開発されたものであり、それによって神経系の活動をそれを構成する単一ユニットのレベルで研究するための大きな道が開かれたのであった。本書の前半は、分離の方法や用具の説明に始まり、単一線維標本を使った麻醉箱実験などがそれに続く。それらの多くのものでは、刺激や薬物が非分離部、すなわち神経幹に与えられているが、第7章では分離した単一神経線維を対象とした実験について述べられていて、ランビェ絞輪間部に比し格段に刺激閾値が低く、電気刺激を与えるときインパルスは必ず絞輪部から発生するにちがいないと結論されている。この方向の研究が、田崎一二先生の髄鞘乾燥法となって大きな発展をとげたわけで、もうそこに至る一步手前の状態であることが示されている。本書の後半は、単一神経線維分離の技術を蟻の脊髄反射の研究に応用した結果について述べられている。加藤先生は、脊髄反射の興奮と抑制の機序を解明することを目標として研究を進められたといわれるが、具体的な研究対象として選ばれたのは、対側腓骨神経の電気刺激によって腓腹筋に誘発される収縮（交叉伸展反射）であって、それが同側の腓骨神経を刺激する場合に刺激強度の違いによって抑制さ

れたり促進されたりすることがわかり、その現象について分析された。その結果、抑制を起こすのは、同側腓骨神経の筋枝であり、それを分離した単一線維の刺激によっても抑制が起こること、またその終末器官が筋紡錘であることが確認されている。一方、促進を起こすのは皮膚神経であり、この場合も単一線維の刺激で効果の生ずること、またその線維が自由終末から由来することが確かめられている。中枢抑制の機序は、第二次大戦後になって Eccles ら（1952）が脊髄運動ニューロンから IPSP を記録して、一挙に解明に向かったわけであり、それには微小電極による細胞内記録法が使われた。しかし、それ以前の時期には、不応期など先行する活動の結果としての活動性の低下が機序として挙げられており、中枢抑制というものは非常にわかり難いものであった。しかしずっと以前から Sherrington はその著書 *The Integrative Action of the Nervous System* (1906) の中で、シナプスにおける中枢興奮状態と並んで中枢抑制状態というものを想定して、反射の促進と抑制を説明しているのである（交叉伸展反射の抑制が非常に顕著な現象であることは、同書中にすでに述べられており、また Liddle と Sherrington による伸張反射やその抑制はもう少し遅れて1924年には報告されている）。加藤先生は Wedensky の抑止現象に取り組み、従来減衰説の立場から説明されていたものを、不減衰説から説明しようとしておられたが、その一方で中枢抑制の説明には、不応期や Wedensky といった事よりも Sherrington の考えが正しいと考えて、上記の研究を進められていた。大変立派な、かつ時代に先んじたお仕事であると思われる。

上にも述べたが、本書には今日から見て非常に興味の深い図や写真が多数に掲載されており、そのおもなものを挙げると、単一神経線維分離のための微小解剖の用具、神経幹、特に麻醉部を刺激するための fluid electrode、今となつては珍しいインドクトリウム (Du Bois Reymond の橈状感応コイル刺激装置)、神経幹の

機械的刺激装置（神経幹を切断するときの刺激の強さを定量的に調節できるもの）、絃線電流計で記録された単一筋線維の活動電流の写真、神経あるいは筋に叩打刺激を与え、その刺激部から活動電位が記録できるように工夫された装置、およびそれによって得られた記録写真などを教えるにいとまがないくらいである。

このように、本書は先の「不減衰伝導説」とは見た感じが大変違うが、研究が大変なスピードで行われ、その結果をまとめた書物がいち早く出版されるといった点では両者間で共通した点が多い。「不減衰伝導説(1924年刊)」が非常に早く出版されたことは、すでに述べたが、2年後にその続編（英文）を出版されると同時に、加藤先生はストックホルムで開催された第12回国際生理学学会（当時万国生理学学会と呼ばれていた）に出かけられて不減衰実験のデモンストラーションを行われ、それに大成功を収められた。そのような点が単一神経線維の研究ではどうであるかというに、本書の序文によると、教室員のうち特に有望と思われる方に指示されたのが1929年の秋であり、その年末から翌1930年にかけて分離が可能であることが判明するや、それを使って行う実験を種々計画して指示されたというわけで、1932年にはローマでの国際生理学学会で単一神経線維および筋線維についての実験示説が行われ、その2年後に脊髄反射を加えた本書を刊行されているのである。

最後の太谷卓造先生の「興奮伝導学説小論」はその序にも述べられているように、減衰説および不減衰説の批判的をしぼって書かれた書物であって、昭和13年に発刊されている。つまり、その時点でも論争が必ずしも終わっていなかったことがわかるのである。本書は学究肌であられた太谷先生の性格を反映した学術的な書物であるが、今これを見ると、やはり反対側（京大側）の陣営からの立場で書かれているという色彩が感じられる。しかし論争があったということは、一つの歴史的事実であり、そこで何が問題となっていたか、あるいは何故それが長く続いたかということを探るうえで大変参考

となる書物である。本書は、その前半では、刺激生理学の基礎概念について、減衰と不減衰の両学説が現れた由来や、それらの学説の内容が手際よく述べられており、加藤先生の「不減衰伝導説」の御本の内容も、石川先生が打ち出しておられた新しい刺激理論とともに詳しく紹介されている。しかし重点は本書の後半すなわち95頁から205頁までを占める「第4編 実験的批判」と題されている部分にあり、そこでは相互の対立する論点が詳しく説明されている。それを要するに、加藤先生が指摘される点を十分留意して実験しても必ずしも同じ結果が得られないということであるが、消滅時間、切断実験、麻酔神経の伝導速度、最小間隔など当時争点となっていた事項について逐一くわしく述べられている。

例えば切断実験というのは、今日では歴史的興味に止まると思われるが、蠶のイキの良否で結果が異なるとし、蠶の脂肪器官の重量の大小で区別したA蠶、B蠶について念入りに写真入りで紹介されている。特に興味を引かれたのは、麻酔部における神経の伝導速度の側定法（計算方法）が違う点で、加藤先生の「不減衰伝導学説(163頁)」で採用されている計算がわかりやすいのに反し、本書(116~117頁)で述べられている方法は大変わかりにくいものである。筆者はあるいは誤植ではないかと疑ったくらいであるが、大変に慎重であられた太谷先生の書物にそのような重大な誤植があるはずはないと思ひ直して長考してやっと理解できたのであった。これは実際的には、減衰伝導学説が今日すっかり風化して、筆者などもどっぷりと不減衰伝導説に浸っている事を物語るにはほかならない。

それでは当時、京大石川日出鶴丸先生の教室で行われた実験がまったく無意義であるとか、あるいは全部誤っているかというに、そのようなことはまず考えにくいことで、要するに常識的には不減衰伝導が正しいが、麻酔の程度が非常に強い場合にはそうでない場合も起こりうるのではないかと思われる。神経の電気活動に対

するわれわれの理解は、Hodgkin と Huxley の Na 説によって大きな変革を受け、さらに微小電極による細胞内記録やさらに最近のパッチクランプ法の発展によって深められてきている。

例えば活動電位の発生に関して  $\text{Na}^+$  が主役を演ずる通常の場合のほか、 $\text{Ca}^{2+}$  が主役となる場合のあることが知られ、また前者の場合でも、細胞膜上における Na チャンネルの分布密度が必ずしも一様でなく、神経細胞の軸索起始部、有髄線維の絞輪部、さらに骨格筋線維の神経筋接合部近傍では密度が著しく高いことが知られている。それに反し、ニューロンの細胞体や、特に樹状突起では、それが不明確である。従来から樹状突起の機能、特に興奮がそこをどのように伝えられるかといった点は、それほど明らかになっていない。また、心筋細胞のイオンチャンネルが多種多様で複雑なことはよく知られているが、そこへ種々の麻酔薬を作用させる場合には、多様な効果が発現することが考えられる。本書第4編中には、40余頁を費やして、全か無の法則（悉無法則）に関してその歴史に始まり、心筋、神経線維、筋線維など各組織についての各論が展開されている。それらはある程度わかり難いものであるが、石川先生の刺激理論とともに、研究者が通常的全か無の法則に従わないような様式の応答に遭遇し、それがどのような仕方で伝導されるのか解釈に迷うような場合に参照して大いに役立つものであると考えられる。

以上は日生誌編集部からの依頼に応じてまとめたものであるが、文中に種々の誤りや必要な事項の脱落のあることを大変恐れている。ただ筆者にとってはこの機縁によってこれらの書物がある程度詳しく読む機会が与えられたことは大変幸いであったと感謝している。

Yas Kuno

### The Physiology of Human Perspiration

pp. 268, Churchill, London, 1934

中山 昭雄

第一次世界大戦が終わったころ、久野先生は南満医学堂の生理学教授であった。それまで循環系の研究をしておられた先生が、発汗の研究に着手されるに至った事情は、本書の序文の冒頭に簡潔に述べられている。ある漢方薬(麻黄)の発汗作用を研究しようとしたのであるが、汗の測定が予想外に難しく、また結果も不定であった。そこで、次第に発汗に深入りしていったが、当時は発汗に関する知見はきわめて乏しく、特に動物とは異なる人体の発汗の生理学研究は皆無に等しかったので、とうとうそれ以来この問題が先生の研究の主題となったという次第である。ずっと後になって「昔は何をやっても Neues だったが、これからは畑を耕し、種を蒔き、そして肥料も必要だから大変だね」と述懐しておられたのを思い出す。

先生は明治15年(1882年)のお生まれで、結婚されたのは39歳のときと聞いているから、ドイツから帰国当時の先生は、人生の中でもっとも充実した時期にあったと思われる。まず汗の測定法の開発から始められた。定性的には当時すでに Minor 法が行われ、総汗量の測定には Sauter 社の人体天秤を用いることができた。体表面各部位の発汗の測定には、セルロイド皿で  $21 \text{ cm}^2$  の皮膚面を覆い、そこに乾燥空気を送り込んで汗をすべて気化させ、その水蒸気を塩化カルシウムで吸収して重量変化を計る方法を用いた。本書の図6にその写真があり、左側で郭光武講師が操作しているのがそれである。右側の上着を脱いだチョッキ姿が久野先生で、温度測定用熱電対の起電力を電位差計とランプ & スケールの電流計で測定中である。

この方法を駆使して15年間にわたって精力的な研究が進められた。研究者は総数19名、その中には故緒方維弘先生(満大、熊大教授)のお名前がある。研究成果は46篇の論文として発表

された。その多くは、日本語で満州医誌に掲載され、それらをまとめたのが本書である。内容は1. 汗腺の形態学と発汗神経系の予備知識, 2. 発汗測定法, 3. 不感蒸散, 4. 温熱性発汗, 5. 精神性発汗, 6. 発汗の奇異現象, 7. 筋運動による発汗, 8. 発汗による水分と塩分の損失, 9. 発汗性, 10. 汗分泌の機構, 11. 発汗の意義から成っている。本書によって初めて発汗生理学の基礎が確立されたのである。

美しい文体で書かれた本書の出版は、先生の親友であったロンドン大学の Lovatt Evans 教授のお世話によるところが大きく、またその出版費の一部は日本学術振興会の補助に負っている。この研究によって、昭和16年学士院恩賜賞を受賞された。もちろん先生の研究は本書で終わったわけではない。その後名古屋大学においてさらに発展され、諸外国の研究者からの求めに応じて、本書の改訂版ともいべき“Human Perspiration”が1956年に米国で出版された。先生は昭和38年に文化勲章を受章された。

戦後まもなく新潟大学で高木健太郎先生が圧反射の一連の研究を展開されたのも、その最初のきっかけは本書に記載されている半側発汗現象であった。本書は今もなおその詳細な記述によって、文献としての価値を有しているが、筆者が何よりも感じるのは、1920年代という時代にこの研究がなされたことの意義である。当時のわが国の学界の状況はまだ啓もう時代の名残が強く、横書きの本を縦書きにして紹介するのが学者の仕事であったところに、独り満州の地にあって、自ら実験を重ね、未知の分野を開拓されたことは、まことに偉大であり感嘆に値する。

第二次大戦中、国内では本書の需要が増したが、入手が不可能であったので、故川畑愛浩博士（当時京大講師、後に三重大衛生学教授）が本書を翻訳し、「人體発汗の生理学」として日本医書出版から昭和19年に3,000部が発行されている。

久野先生が蒔かれた種は、国内のみならず外

国でも発芽し、成長し、今や温熱生理学として確固たる分野を形成するに至った。本書はそのモニュメントである。

吉村寿人著

「pHの理論と測定法」の復刻を望む

初版：昭和15年8月 丸善株式会社 東京

6版：昭和29年10月

藤本 守

本書は、本学会特別会員吉村寿人先生（京都府立医大名誉教授、元学長）が、第二次世界大戦以前（昭和10～13年ごろ）、その学者としての情熱をすべて傾注して、約900頁にも及ぶ大作として世に出された不朽の名著である。刊行当時は、単に生理学者や医学者というよりは、物理化学や動物学、その他ほとんどすべての領域の自然科学の研究者に愛用され、幾度か版を重ねるに至った。その後、昭和43年（1968）に、新版として同名の書物が、吉村寿人、松下寛、森本武利の三氏によって改訂された。それは、旧版に記載されていた初歩的な箇所や陳旧な部分を廃し、新しい工学や医学領域への応用を意図され、500頁程度に圧縮されて出版されたのであった。しかし、それも今や絶版である。今日、本学会で古い名著の復刻計画があるという報に接して、筆者は躊躇なく本書（特にその旧版）を推薦する次第である。

吉村先生は、昭和5年から、故正路倫之助京大教授に師事された。そのころ、わが国の医学部の研究室にも、ようやく欧米から物理化学の知識や技術が紹介され、生物物理学的手法の導入が図られた。この時代の趨勢下において、吉村先生も、正路先生の同門、勝 義孝先生や齊藤幸一郎先生（いずれも本学会特別会員）らとともに、熱力学や、溶液理論の勉強に打ち込んでおられた。研究者達の当面の課題は、どのようにして溶液論を克服し、手元の機材で簡単に実験を行うかであった。情報や機材の乏しい当時では、今から見るとなんでもないような技術でも、それを実験的に自分のものにするには、ことのほか苦勞を要した時代である。吉村先生

は、生物溶液の pH の測定に、確定的な方法が確立されていなかったもので、不眠不休の努力で、京大の医学部と工学部を往来しながら、世に先駆けて、ガラス電極による血液 pH 測定を確立させたのである。その際の経験と豊富な知識をふんだんに盛りこんだ記録が本書である。

昭和の初期のわが国の生理学界では、pH や生体液の物理化学の関連図書といえば、故加藤元一先生（慶応大学）著の「水素イオンに関する知識」（実験医報社、1925）、故正路倫之助先生と吉村寿人先生の共著による「生物の物理化学」（日本評論社、1931）、故橋田邦彦先生（東京大学）著「物理化学大綱」（東京富倉書店、1931）、故藤田秋治先生（北里研究所兼京都府立医大生化学）著の「pH 測定の理論と実際」（市河 思誠堂、1938；南江堂、1953年と1958年に改版）、戦後には、故久保秀雄先生（大阪大学）著「酸化還元電位」（南条書店、1947）と「生物物理化学」（永井書店、1950）、齊藤幸一郎先生（金沢大学）著の「血液の pH」（医学書院、1953）などの良書が出版された。

その中でも、pH に関する限り、吉村先生の著書が、その規模や内容の豊さについては群を抜いており、ベストセラーでもあった。基礎理論、測定技術、緩衝液のメニュー、物理化学的な数値、それに、類書で得られないような貴重な情報が豊富に記載されていた。もっとも、藤田先生の書物は、その1/3程度の規模で、pH の諸問題と簡単に取り組むのに適した入門書として優れていたし、主として生化学的な手法、特に試験紙や指示薬による pH 決定など手軽な書物であった。また、齊藤先生の書物は、ずっと後年に出版されたもので、さらにその半分以下の規模の小冊子であったが、血液 pH を中心にしぼって、論じられており、体液緩衝系、特に炭酸平衡、血液ガスとその分析などに関して、きわめて流麗な文書で鮮やかにまとめられており、コンパクトな本として定評があった。齊藤先生は、以後、これを全面的に改訂され、「酸塩基平衡の基礎」（朝倉書店、1972）という270頁の書物として出版された。これらは、いずれ

も名著である。

吉村寿人先生の pH 書物の新版は、pH 計測の自動制御、生体の pH 計測（テレメタリングを含む）など、古い時代にはなかった技術が多く盛り込まれているが、逆に、金属電極や、ガス電極、pH の指示薬などによる特殊分光分析などは、旧版から割愛された。筆者は、現在、イオン電極について研究を重ねているが、今でもイオンや pH、溶液論の基礎知識を論じるときに、旧版を参照することがある。それは、物理化学の原理自体、前世紀後半から今世紀の初頭にすでに確立されていたので、複雑な原理でない限り、今でも生理学研究に応用できる面がある。今は、一世代も昔の概念の把握や文献の入手は、かえって困難な時代である。この書物は、かなり正確に過去の理論を再現してくれる。温故知新に最適といえる。筆者は、この意味では、改版前のもののほうが、興味深く、歴史的価値が高いと考えている。現在、細胞内の pH の蛍光測光とか、微小電極など技術の開発には、むしろ旧版のほうが参考になることも多い。筆者の愛用書の中にも、外国の名著、J. P. Peters & D. D. Van Slyke の“Quantitative Clinical Chemistry”（Williams and Wilkins, 1931）、R. Bates の“Determination of pH”（Wiley, 初版1954年；3版1972年）、R. A. Robinson & R. H. Stokes の“Electrolyte Solutions”（Butterworths, 初版1955年；2版1959年）、そのほか特色のある細胞研究書、R. Chambers & E. L. Chambers の“Explorations into the Nature of the Living Cell”（Harvard Press, 1961）など、古い時代の本が含まれている。

筆者が、「pH の理論とその測定法」（旧版）を推す理由は、本書が日本生理学会の誇りとするに足る歴史的書物だと判断するからであり、単に自分が吉村寿人先生の弟子の一人だからというのではない。また、その新版が不適當というのではない。新版のほうは、まだ入手可能な段階にあるという意味もある。さらに、旧版の復刻の意義（利点）は、次の諸点にもある。

1) 今世紀前半の pH の知識の集大成で、今

日、研究者の脳裏から消滅しかけた貴重な情報や、多くの先人の踏んだ実験室の知識、特に、電極の基礎技術や、指示薬緩衝液などの知識などについても、あます所のない記述があり、役に立つ本であること、2) 熱力学や、溶液論については、その内容が、現在なお不変で、その修得は実験に大いに寄与すること、および3) 記述が親切で、初学者の入門書としての適切であること、などである。

吉村寿人先生が本書の執筆された直接の動機

は、当時の学者を中国へ派遣するという国策に基づいて、自分の海外派遣が決まったが、その間際になって、遺書を残す心境で、この著作を完成されたと聞かされた。同様の例が、他の先輩方にもあろうが、もし戦争がそれらの学者を、研究室から外地への義勇に駆り立てることがなければ、今よりずっとわが国の基礎生理学の進歩が早かったかも知れない。良書の復活を望みながら、これを推薦文としたい。



生理学書及生理学者の出版物 (1903~1955)

1 教科書類	2 実習書 2 実験法	3 単行本	4 論文集 (1904) (講座)	5 雑誌	6 文献史論 7 歴史 8 方法	9 啓蒙書	10 その他
石川・大生理学上 (09) (11~12) 舟岡・生理学上中下 (11~12) 大沢・生理学 (12) (03) 山田外 (03) 生理学科 (訳)	石原・生理学実験 (13) 生沼・生理学実習 (18)	正路・膠質 (18) 加藤・水素イオンに関する知識 (23) 石川・Fundamental Phenomenon of life (24) 加藤・Theory of dekrementless cond. Narcot. Nerve (24) 正路・物理化学通論 (26) 加藤・不減衰伝導学説の梗概 (26) 浦本・生物物理化学 (26) 加藤・前記英文書の続刊 (30) 杉浦・新減衰伝導学説 (30) 橋田・生物物理化学大綱 (30) 北村・生命化学の研究 (30) 奥山・細胞分裂誘起線 (31) 正路・吉村・生物の物理化学 (31) 橋田・生物の電気発生 (31)	京大・石川教室生理字論文集 第1巻 (16) 同第2巻 (19) (1922) 京大・正路教室 I~V (25, 26, 27.....) 阪大・中川教室 (26, 27.....) 北大・宮崎 (No. 1~6) 京府大勝研究室 (31) 京大・石川教室 (No. 3~9) (22~31) (1932)	黒田・日本心理学雑誌 (19~20) 石川・生理学研究 (24~ ) 橋田・J. Biophysic (26~27) 生機学談話会・生機学談話会会報 I~VI (26~41) 学術研究会議 Jap. J. Med Science III. Physiology (Biophysics) (30~45) 学術研究会議 医学総報 (生理関係)	内山・生物哲学研究 (28) 藤岡・近世生理史論 (31) 黒田・中国医学書目 (31) 内山・日本科学史の反省 (31) 日本生理学会 日本生理学会論文調査会 日本生理学文献(32) 永井潜先生在職25年記念	藤田・中樞神経系外250項・医学大辞典 (06~10) 永井・生命論 (14) 永井・生物学と哲学との境 (15)	川村・淡水生物 (17) 川村・生命と性欲 (20) 黒田・心理学の諸問題 (24) 黒田・藤岡君遺文 (26) 永井・「民族衛生」(学会)
正路・医用生理学上 (33) 北村・簡明生理学 (33) 橋田・岩波生理学 (上・下) (33) 正路・医用生理学下 (35) 大塚・生理学 (37) 戸塚・同 (38) 本川・内山・生理学 (38)	東北大生理(非売品) (34) 越智・生理学実験と実習 (35) 生沼・森 (生理学実習要綱) (36) 吉村・P Hの理論と測定法 (40) 九大生理(非売品) 生理学実習 (32) 東北大生理学実習 (40)	慈大生理 I (32) II (33) 阪大・第2 (正井) I (32) 勝研究室 II (33) 千大・酒井 (36) 笹川研究室 (38) 日大・戸塚 (40) 慈大・西丸研究室 (32, 37, 40) 航空医学 (J II) (39) 京大・生理教育石川教授遺著研究論集 (39) 下宮・興奮伝導 (40)	生理学雑誌 機関誌 生理学会外集 I~V (34~38) 生理学東京談話会機関誌 生理学会外集 I~IV (37~40) 日本生理学会機関誌 日本生理学会誌 (38~41) 林主事条件反射 (39~42) 生理学東京談話会機関誌 日本生理学評論 (40~43)	巴陵・医学思想史 (32) 勝・現代医学題目集 (40~50) 林・条件反射学方法論 (40) 森・生理学を中心とした医学史 (41) 藤田教授業績目録 (39) 九大医報・故石原教授追悼号 (39) 林・科学論叢 (41)	加藤・日常生活の生理 (32) 永井・自然観より人生観 (33) 浦本・生命の第四原理 (33) 林・趣味の生理学 (34) 加藤・常識としての生理学 (35) 林・川井・精神生活の機能的説明 (35) 越智・最近ホルモン学説 (35) 永井・優生学概論 (36) 永井・長寿と遺伝 (36)	加藤・三浦(訳)クロロイド・ペルナールの実験医学入門 (31) 内山・心臓生理学概論 (33) 久野・Physiology of Human Perspiration (34) 加藤・Microphysiology of Nerve (34) 中西・背筋の緊張と神経支配 (34) 生理教育 (39) 下宮・興奮伝導 (40)	巴陵・人類性生活史 (32) 越智・父母よ願めよ (32) 林(訳)パロプロフの条件反射 (39) 唯酸(訳)ハーペーの血液循環の原理 (36) 橋田・遺傳學 (34) 浦本・科学と文化 (34) 永井・人及び人の力の生理 (34) 林・条件 (35) 林・思想と生理 (36) 内山・遺傳學 (36) 橋田・自然と人 (36) 橋田・空月集 (36)

<p>東山・細胞分裂誘起線 (31)          正路・吉村・生物の物理化学 (31)          橋田・生物の電気発生 (31)</p>	<p>奥山・細胞分裂誘起線 (31)          正路・吉村・生物の物理化学 (31)          橋田・生物の電気発生 (31)</p>	<p>加藤・三浦(訳)クロード・ベルナールの実験医学入門 (31)          内山・心臓生理学概論 (33)          久野・Physiology of Human Perspiration (34)          加藤・Microphysiology of Nerve (34)          中西・骨格筋の緊張と神経支配 (34)          生沼・日本解剖学生理学計数 (39)          大谷・興奮伝導 (40)</p>	<p>慈大生理工学同 (32)          阪大・第2(正井) I (32)          勝研究室 II (33)          千大・酒井 (36)          笹川研究室 (38)          日大・戸塚 (40)          慈大・西丸研究室 (32, 37, 40)          航空医学 (J II)          京大・生理教室石川教授還暦祝賀論文集(英文) (38)          石原教授遺稿 (39)</p>	<p>生理学雑誌          生理学会外集 I ~ V (34~38)          生理学東京談話会機関誌          生理学会 I ~ IV (37~40)          日本生理学会機関誌          日本生理学誌 (38~41)          林主幸          条件反射 (39~42)          生理学東京談話会機関誌          日本生理学評論 (40~43)          学研・Jap. J. of med Science Physiology (3~38)</p>	<p>巴陵・医学思想史 (32)          勝・現代医学題目集 (40~50)          林・条件反射学方法論 (40)          森・生理学を中心とした医学史 (41)          藤田教授業績目録 (39)          九大医報・故石原教授追悼号 (39)          林・科学論叢 (41)</p>	<p>加藤・日常生活の生理 (32)          永井・自然観より人生観 (33)          浦本・生命の第四原理 (33)          林・趣味の生理学 (34)          加藤・常識としての生理学 (35)          林・刺激 (35)          林・川井・精神生活の機械的説明 (35)          越智・最近ホルモン学説 (35)          永井・優生学概論 (36)          永井・長寿と遺伝 (36)          林・生理学なぜ・なぜならば (40)          林・百万人の生理学 (40)          浦本・生理学的世界像 (41)          鈴木・今日の生理学 (41)          三浦・医学の倫理 (40)</p>	<p>巴陵・人類性生活史 (32)          越智・父母よ醒めよ (32)          林(訳)パブロフの条件反射 (39)          輝峻(訳)ハーバーの血液循環の原理 (36)          橋田・碧潭集 (34)          浦本・科学と文化 (34)          永井・人及び人の力 (34)          林・条件 (35)          林・思想と生理 (36)          内山・泪滴集 (36)          橋田・自然と人 (36)          橋田・空月集 (36)          浦本・科学と民族 (37)          林・科学主義・その他 (37)          内山・生命力というもの (37)          内山・精神力というもの (38)          浦本・人間復興期 (39)</p>	<p>衛生 (31)</p>
<p>正路・医用生理学上 (33)          北村・簡明生理学 (33)          橋田・岩波生理学 (上・下) (33)          正路・医用生理学下 (35)          大塚・生理学 (37)          戸塚・同 (38)          本川・内山・生理学総論(学用) (35)          竹中・理論生理学 (40)          林録・生理学概論 (40)          林・生理学上・下 (41)</p>	<p>東北大生理(非売品) (34)          越智・生理学実験と実習 (35)          生沼・森(生理学実習要綱) (36)          吉村・P Hの理論と測定法 (40)          九大生理(非売品)生理学実習 (32)          東北大生理学実習 (40)</p>	<p>久保・酸化還元電位 (42)          名取・運動の生理学 (44)          中西・骨格筋のトーンと疲労 (45)          田崎・神経生理学序説 (47)          久野・汗 (47)          学術研究会議疲労研究班篇疲労判定法 (47)          学術研究会議体力研究班篇体力医学 (48)          本川・脳波 (48)</p>	<p>久保・本川編集・生理学の進歩第1巻 (49)          昭大(井上)生理学論文集 I (51)          日本生理学会編集生理学講座12巻 (43, 50, 51, 52)</p>	<p>杉・生体の科学 (49)          吉井・黒津他・脳 (47)          日本体力医学会機関誌体力科学 (原著誌) I (51)          久野編輯・Jpn. J. of Physiology I (50~51)</p>	<p>内山・江戸時代の生機学並補遺 (49)          石原教授遺稿・一般生理学より (42)          内山・蘭学事始(校訂) (46)          新大生理・植田教授の思い出の為に(教室の仕事の目録) (46)          越智教授業績目録 (47)          千大・業績題目集 (31~50)</p>	<p>林・科学人史話 (42)          林・血液記 (42)          井上・労働生理学説 (42)          古沢・疲労と休養 (42)          鈴木・生物電気 (43)          鈴木・生体と電気 (40)          高木・生理学読本 (40)          井上・生体の科学 (44)          森・血液 (44)          西丸・研究と生活 (45)</p>	<p>橋田・行としての科学 (39)          内山・生命体験 (41)          橋田・正法眼蔵釈意 1巻(39) 2巻(40) 3巻(44) 4巻(48)          林・科学への憧憬 (42)          浦本・生命の文化 (43)          石川(知)他・日本の労働科学 (45)          久野・熱帯生活問題 (45)</p>	<p>衛生 (31)</p>
<p>福外・一般生理学講義 (47)          大谷・生理学提要 (49)          鈴木・福田(篇)要述生理学 (49)          本川・一般生理学 (49)          藤田・佐武共著生理学(上・43下・51)          福田・人体生理学 (41)</p>	<p>佐藤・平均値と百分率の正しい取扱方法 (47)          戸塚・測定より実験式まで (51)          本川・電気的実験法 (50)          (単行本)</p>	<p>久保・酸化還元電位 (42)          名取・運動の生理学 (44)          中西・骨格筋のトーンと疲労 (45)          田崎・神経生理学序説 (47)          久野・汗 (47)          学術研究会議疲労研究班篇疲労判定法 (47)          学術研究会議体力研究班篇体力医学 (48)          本川・脳波 (48)</p>	<p>久保・本川編集・生理学の進歩第1巻 (49)          昭大(井上)生理学論文集 I (51)          日本生理学会編集生理学講座12巻 (43, 50, 51, 52)</p>	<p>杉・生体の科学 (49)          吉井・黒津他・脳 (47)          日本体力医学会機関誌体力科学 (原著誌) I (51)          久野編輯・Jpn. J. of Physiology I (50~51)</p>	<p>内山・江戸時代の生機学並補遺 (49)          石原教授遺稿・一般生理学より (42)          内山・蘭学事始(校訂) (46)          新大生理・植田教授の思い出の為に(教室の仕事の目録) (46)          越智教授業績目録 (47)          千大・業績題目集 (31~50)</p>	<p>林・科学人史話 (42)          林・血液記 (42)          井上・労働生理学説 (42)          古沢・疲労と休養 (42)          鈴木・生物電気 (43)          鈴木・生体と電気 (40)          高木・生理学読本 (40)          井上・生体の科学 (44)          森・血液 (44)          西丸・研究と生活 (45)</p>	<p>橋田・行としての科学 (39)          内山・生命体験 (41)          橋田・正法眼蔵釈意 1巻(39) 2巻(40) 3巻(44) 4巻(48)          林・科学への憧憬 (42)          浦本・生命の文化 (43)          石川(知)他・日本の労働科学 (45)          久野・熱帯生活問題 (45)</p>	<p>衛生 (31)</p>
<p>I・II (49)          吉井・臨床生理学 (50)</p>	<p>勝木・石井・体育 (48)          福田・人体遺伝学 (50)          同・精神生理学 (50)          久保・生物化学 (50)          学術研究会議疲労研究班篇疲労研究の共同実験 (50)          名取・筋生理学 (51)          古沢・労働生理 (51)          本川・電気生理学 (52)</p>	<p>勝木・石井・体育 (48)          福田・人体遺伝学 (50)          同・精神生理学 (50)          久保・生物化学 (50)          学術研究会議疲労研究班篇疲労研究の共同実験 (50)          名取・筋生理学 (51)          古沢・労働生理 (51)          本川・電気生理学 (52)</p>	<p>久保・本川編集・生理学の進歩第1巻 (49)          昭大(井上)生理学論文集 I (51)          日本生理学会編集生理学講座12巻 (43, 50, 51, 52)</p>	<p>杉・生体の科学 (49)          吉井・黒津他・脳 (47)          日本体力医学会機関誌体力科学 (原著誌) I (51)          久野編輯・Jpn. J. of Physiology I (50~51)</p>	<p>内山・江戸時代の生機学並補遺 (49)          石原教授遺稿・一般生理学より (42)          内山・蘭学事始(校訂) (46)          新大生理・植田教授の思い出の為に(教室の仕事の目録) (46)          越智教授業績目録 (47)          千大・業績題目集 (31~50)</p>	<p>林・科学人史話 (42)          林・血液記 (42)          井上・労働生理学説 (42)          古沢・疲労と休養 (42)          鈴木・生物電気 (43)          鈴木・生体と電気 (40)          高木・生理学読本 (40)          井上・生体の科学 (44)          森・血液 (44)          西丸・研究と生活 (45)</p>	<p>橋田・行としての科学 (39)          内山・生命体験 (41)          橋田・正法眼蔵釈意 1巻(39) 2巻(40) 3巻(44) 4巻(48)          林・科学への憧憬 (42)          浦本・生命の文化 (43)          石川(知)他・日本の労働科学 (45)          久野・熱帯生活問題 (45)</p>	<p>衛生 (31)</p>
<p>正路・吉村・医科生理学 (52)          鈴木・岩波・人体の生理学 (52)</p>	<p>若林・実験室の計算知識 (51)          竹中・統計の方法 (51)          佐武・Secretion of Adrenaline and Sympathetins (54)</p>	<p>林・条件反射 (52)          西丸・体液循環の研究 (52)          大島・睡眠 (53)          松本・伊藤・臨床心電図 (53)          時美・津田・心電図の臨床 (53)          猪飼・体育に必要な運動の生理 (50)          吉井・時美・筋電図その臨床的応用 (50)          福原・消化管運動の生理 (53)          森・原子力と医学 (53)          緒方・鈴江・結核と結核の生理及び病理 (55)</p>	<p>慈大(杉本研究室) I (52)          II (52)          札幌大(永井) (54)          昭医大(井上)生理学論文集 2 5・6 (54)          河出書房・現代生理学 (百万人の生理学) (55)</p>	<p>日本生理学雑誌 XIII (52) XIV (53) XV (54) XVI (55)          体力科学 II (52) III (53) IV (54) V (55)          久野編集・Jpn. J. of Physiology II (52~53) III (53) IV (54) V (55)</p>	<p>名大環境医学研究所 所報 I (47~48) II (49) III (51) IV (52) V (53)          熊大実質研・所報 I (50~51) II (51~52)          内山・日本生理学史 (55)          高木・新大生理論文目録(昭17~30) (55)          熊大体研年報要覧(非売) 論文目録 (53)</p>	<p>林・人間の生理 (54)          医・国家試験・生理学解答 (52)          坂本・沖中・時実 神経系の生理学 (フルトンの邦訳) (55)</p>	<p>杉編集・橋田先生碧潭語録 (49)</p>	<p>衛生 (31)</p>

(浦本政三郎著「過去半世紀の日本生理学界の回顧と展望」)

## 生理学書及生理学者の出版物 (1956~1986)

## I. 一般生理学教科書類

## 〔A〕

著編訳者名	書名	出版社	発行
1. 正路倫之助, 吉村寿人(著)	医科生理学(上)	南江堂	1952
2. 正路倫之助, 吉村寿人(著)	医科生理学(中)	南江堂	1957
3. 正路倫之助, 吉村寿人(著)	医科生理学(下)	南江堂	1960
4. 真島英信(著)	生理学	文光堂	1956
5. 高木健太郎, 中山昭雄(著)	生理学入門	朝倉書店	1960
6. 問田直幹, 内藺耕二(編)	新生理学(上)	医学書院	1960
7. 問田直幹, 内藺耕二(編)	新生理学(下)	医学書院	1961
8. 藤森聞一, 伊藤真次, 永井寅男, 宮崎英策, 望月政司(著)	生理学	南山堂	1963
9. 本川弘一, 和田正男(編)	生理学講義	南山堂	1965
10. 吉村寿人, 岩瀬善彦, 川上正澄(編)	新医科生理学(上)	南江堂	1968
11. 吉村寿人, 岩瀬善彦, 川上正澄(編)	新医科生理学(中)	南江堂	1968
12. 吉村寿人, 岩瀬善彦, 川上正澄(編)	新医科生理学(下)	南江堂	1969
13. 吉村寿人, 岡本彰祐(編)	新医科生理学(上)	南江堂	1968
14. 入内島十郎(著)	人体の生理学	医学出版社	1970
15. 松田幸次郎, 市岡正道, 八木欽治(訳)	医科生理学展望	丸善	1969
16. 市河三太(著)	基礎生理学	朝倉書店	1972
17. 蓑島高(著)	新撰人体生理学要綱(上・下)	績文堂出版	1972
18. 鈴木泰三, 中浜博, 田崎京二(著)	生理学通論 (I)	共立全書	1973
19. 鈴木泰三, 中浜博, 田崎京二(著)	生理学通論 (II)	共立全書	1973
20. 鈴木泰三, 中浜博, 田崎京三(著)	生理学通論 (III)	共立全書	1973
21. 入沢宏, 菅野義信(著)	新生理学入門	朝倉書店	1974
22. 吉井直三郎, 岩間吉也, 中馬一郎(編)	現代生理学	永井書店	1974
23. 竹中繁雄, 塙功, 渡辺悟, 竹中敏文(著)	生理学(I)	朝倉書店	1975
24. 竹中繁雄, 大原孝吉, 竹中敏文(著)	生理学(II)	朝倉書店	1975
25. 内藺耕二, 入来正躬(訳)	ガイトン・人体生理学(上)(下)	広川書店	1976
26. 中馬一部(編)	生理学	日本医事新報	1977

27. 吉村寿人, 岩瀬善彦, 川上正澄(編) 医科生理学要綱 南江堂 1978
28. 山本長三郎, 岩間吉也(著) 標準生理学(I) 金原出版 1978
29. 後藤昌義(編著) 概説生理学(上) 南江堂 1979
30. 後藤昌義, 橋村三郎, 榊村純生, 安部良治, 前野 巍, 有田真共(著) 生理学 理工学社 1980
31. 鈴木泰三, 星 猛(編) 新生理学講義 南山堂 1980
32. 簗島 高(著) 数理生理学 学術図書印刷(株) 1980
33. 大村 裕(編) 概説生理学(下) 南江堂 1981
34. 相川貞男, 伊藤寛志(訳) ガイトン(著)人体の生理学 広川書店 1982
35. 広重 力, 加藤正道(著) 小生理学 南山堂 1982
36. 古河太郎, 本田良行(編) 現代の生理学 金原出版 1982
37. 福原武彦, 入来正躬(訳) 生理学アトラス 文光堂 1982
38. 尾崎俊行(編) 基礎人体生理学 広川書店 1984
39. 永坂鉄夫, 渡辺 悟(編) 人体生理学 広川書店 1985
40. 本川利憲, 広重 力, 豊田順一, 熊田 衛(編) 標準生理学 医学書院 1985
41. 伊藤真次, 黒島辰汎(著) 新版人体生理学入門 朝倉書店 1985
42. 杉晴 夫, 松村幹郎, 上山章光, 渡辺士郎, 中野昭一, 斎藤 望, 林 秀生, 新井康允(共著) 人体機能生理学 南江堂 1985
43. 入来正躬, 外山敬介(編) 生理学(I) 文光堂 1986
44. 入来正躬, 外山敬介(編) 生理学(II) 文光堂 1986

## [B]

1. 栖原六郎(著) 口腔生理学 医歯薬出版 1953
2. 河村洋二郎(著) 新編口腔生理学(上)(下) 永末書店 1956
3. 青木 健(著) 生理学(2) 金原出版 1957
4. 高下弘夫(著) 生理 医歯薬出版 1965
5. 河村洋二郎(著) 歯学学生のための口腔生理学 永末書店 1966
6. 市岡正道, 河村洋二郎, 柄原六郎(編) 歯科生理学 医歯薬出版 1967
7. 市岡正道(著) 生理学提要 南江堂 1968
8. 坂田三彌, 葛西四郎(著) 生理学及び口腔生理学 永井書店 1969
9. 市岡正道, 井上昌次郎(著) 生理学教程(上) 朝倉書店 1971
10. 市岡正道, 井上昌次郎(著) 生理学教程(下) 朝倉書店 1971
11. 栖原六郎, 市岡正道(著) 新編歯科生理学 医歯薬出版 1971
12. 林 藤, 関 園子(著) 口腔生理学 日本科学協会 1972
13. 上羽隆夫, 市岡正道, 斎藤忠義, 河村洋二郎, 覚道幸男, 坂田三彌(編) 最新歯学生理学 医歯薬出版 1977

14. 覚道幸男, 吉田 洋, 大野 栄(著) 歯学生理学概論 学建書院 1978
15. 上羽隆夫, 河村洋二郎(監訳) ジェンキンス 口腔の生理, 生化学 医歯薬出版 1981
16. 覚道幸男, 野田憲一, 鈴木 隆, 中村治雄, 猪股孝四郎(著) 小口腔生理学 学建書院 1982
17. 野村浩道(著) Oral Physiology. 日本医事新報社 1982
18. 船越正也(著) 歯科生理に強くなる本 クインテッセンス 1983
19. 覚道幸男, 吉田 洋, 大野 栄, 杉村忠敬(著) 要説歯学生理学 学建書院 1984
20. 太田雅博, 笠原泰夫, 佐藤俊英, 中原 敏, 野田憲一(共訳) R. M. Bradley; Basic Oral Physiology(基本口腔生理学) 医歯薬出版 1985
21. 上羽隆夫(著) 要説口腔生理学 書 林 1986
22. 坂田三彌, 中村嘉男(編) 基礎歯科生理学 医歯薬出版 1987

## [C]

1. 嶋井和也, 永田 豊(共訳) Illustrated Physiology 広川書店 1975
2. 円谷 豊, 中山博夫(著) 目でみる人体生理学 同文書院 1978
3. 覚道幸男, 船越正也, 上羽隆夫, 吉田 洋(編) 図解・栄養生理学入門 学建書院 1980
4. 中野昭一(編) 図説 歯学生理学 医学書院 1981
5. 福原武彦, 入来正躬(訳) 生理学アトラス 文光堂 1982
6. 中野昭一(編) 図説・運動の仕組みと応用 医歯薬出版 1982
7. 伊藤文雄, 富田忠雄, 御手洗玄洋(編) 図説 生理学 東西医学社 1983
8. 中山 沃(編) 図解 生理学テキスト 中外医学社 1984

## [D]

1. 浅野誠一, 岡本彰祐, 工藤達之, 斎藤章二(監修・訳) 病態生理学 みすず書房 1957
2. 覚道幸男, 吉田 洋, 上羽隆夫(編) 臨床口腔生理学 臨床歯科社 1969
3. 阿部正和, 朝比奈一男, 祖父江逸郎(編) 臨床生理学 協同医学出版 1961
4. 大谷杉士, 入来正躬(訳) 病態生理学—グリーン著 広川書店 1983
5. 高田明和, 本田西男, 森田之大(編) 臨床生理学 医歯薬出版 1983

## [E]

1. 東京医科歯科大学歯学部生理学教室(編) 歯科学学生用生理学実習書 医歯薬出版 1961
2. 市岡正道, 斎藤忠義(編) 歯科学学生用生理学実習書 医歯薬出版 1966

- |   |                 |       |      |
|---|-----------------|-------|------|
| 3. 覚道幸男, 伊藤文雄,<br>吉田洋, 上羽隆夫,<br>佐藤豊彦(編) | 歯学生理学実習書        | 医歯薬出版 | 1968 |
| 4. 松田幸次郎, 内藺耕二(編)                       | 生理学実習           | 医歯薬出版 | 1973 |
| 5. 覚道幸男, 吉田洋,<br>大野栄(著)                 | 歯科衛生士のための生理学実習書 | 医歯薬出版 | 1977 |
| 6. 覚道幸男, 吉田洋(著)                         | 歯学生理学実習書        | 医歯薬出版 | 1977 |
| 7. 覚道幸男, 吉田洋(著)                         | 歯学生理学実習書        | 医歯薬出版 | 1982 |
| 8. 日本生理学会(編)                            | 生理学実習書          | 南江堂   | 1983 |
| 9. 東北歯科大学生理学教室(編)                       | 生理学 口腔生理学実習提要   | 教文社   | 1984 |
| 10. 中村嘉男(編)                             | 歯科生理学実習書        | 医歯薬出版 | 1986 |

## 〔F〕

- |   |                         |          |      |
|---|-------------------------|----------|------|
| 1. 鈴木正夫, 渡部士郎(著)                                | 解剖および生理学<br>(薬学双書 第14巻) | 医学書院     | 1960 |
| 2. 相沢義雄, 井川幸雄,<br>坪井実, 渡辺俊男(著)                  | 生理解剖学                   | 広川書店     | 1960 |
| 3. 上田五雨(著)                                      | 生理学新書                   | 中央医学出版   | 1962 |
| 4. 坪井実(著)                                       | 一般生理学                   | 文京書院     | 1968 |
| 5. 田多井吉之介, 長田泰公(著)                              | 教養の生理解剖学                | 光生館      | 1968 |
| 6. 山本敏行, 鈴木泰三,<br>田崎京二(著)                       | 新しい解剖生理                 | 南江堂      | 1969 |
| 7. 長田泰公(著)                                      | 生理学要説                   | 光生館      | 1969 |
| 8. 岩瀬善彦(編)                                      | やさしい生理学                 | 南江堂      | 1969 |
| 9. 岡本歌子, 大柴進(著)                                 | 生理学精粹                   | 恒星社厚生閣   | 1972 |
| 10. 真島英信, 松村幹郎(著)                               | 小生理学書                   | 金芳堂      | 1972 |
| 11. 坪井実(編)                                      | 人体の解剖生理学                | 広川書店     | 1973 |
| 12. 嶋井和也, 永田豊(著)                                | 入門解剖生理                  | 杏林書店     | 1974 |
| 13. 江部充, 池田謙一,<br>斎藤正男, 藤咲喜一,<br>藤田一石, 本間伊佐子(編) | 解剖と生理                   | ME技術振興協会 | 1974 |
| 14. 鈴木泰三, 田崎京二,<br>山本敏行(著)                      | 大学課程の生理学                | 南江堂      | 1974 |
| 15. 市河三太, 井川幸雄,<br>坪井実(著)                       | 生理学                     | 講談社      | 1977 |
| 16. 小林庄一, 根来英雄(著)                               | 新しい教養の生理学               | 関東出版     | 1978 |
| 17. 真島英信, 松尾理(監修)                               | Q & A 方式による生理学の要点       | 医学書院     | 1978 |
| 18. 真島英信, 石田絢子(著)                               | 人体生理の基礎                 | 杏林書店     | 1979 |
| 19. 沢山俊民(編)                                     | 生理学基礎・臨床                | 金芳堂      | 1979 |
| 20. 若林勲(監修)                                     | 教養課程 生理学                | 学術図書     | 1980 |
| 21. 塚田祐三(監修)                                    | 解剖 生理学                  | 薬業時報社    | 1980 |
| 22. 岡本彰祐, 坪井実,<br>岡本歌子(著)                       | 新生理学                    | 講談社      | 1982 |

- |                                 |           |      |      |
|---------------------------------|-----------|------|------|
| 23. 大策立志, 大石正,<br>緑川知子, 登倉尋実(著) | 生活の生理学    | 朝倉書店 | 1983 |
| 24. 一木正則, 田中任(著)                | 人体と運動の生理学 | 金芳堂  | 1984 |
| 25. 坪井実(編)                      | 生理学       | 広川書店 | 1985 |

## II. 脳神経系著編訳書類

- | 著編訳者名   | 書名  | 出版社               | 発行   |
|---|---|-------------------|------|
| 1. 時実利彦, 津山直一(著)                                    | 筋電図の臨床  | 協同医書出版            | 1956 |
| 2. 吉井直三郎, 堀浩(編)                                     | 臨床の進歩 最近の筋電図学   | 永井書店              | 1956 |
| 3. 岡本彰祐, 岡本歌子(訳)                                    | 脳の化学  | 白水社               | 1957 |
| 4. 竹中繁雄(著)  | 脳の生理学   | 医学書院              | 1957 |
| 5. 若林勲, 藤森聞一(編)                                     | 脳波の分析とその応用 脳神経新書3   | 医学書院              | 1957 |
| 6. Eccles, J. C., Ito, M and<br>Szentagothai, J.(著) | The Cerebellum as a Neural<br>Machine.  | Springer-Verlag   | 1957 |
| 7. 時実利彦(編)  | 脳のはたらき  | 朝倉書店              | 1960 |
| 8. Y. Katsuki(編)                                    | Electrical Activity of Single<br>Cells.   | Igaku Shoin       | 1960 |
| 9. 時実利彦, 島津浩,<br>川村浩(著)                             | 脳の機能  | みすず書房             | 1961 |
| 10. 清水健太郎, 秋元波留夫,<br>藤森聞一, 時実利彦(著)                  | 脳波入門  | 南山堂               | 1962 |
| 11. 時実利彦(著)   | 脳の話   | 岩波書店              | 1962 |
| 12. 塚田裕三(編)   | 脳の生化学   | 医学書院              | 1964 |
| 13. 三木威勇治, 時実利彦(編)                                  | 筋電図入門   | 南山堂               | 1964 |
| 14. T. Tokizane and<br>H. Shimazu(著)                | Functional Differentiation of<br>Human Skeletal Muscle—<br>Corticalization and<br>Spinalization of Movement—. | Univ. Tokyo Press | 1964 |
| 15. 朝比奈一男(著)  | 眠りの生理学  | 中外医学社             | 1965 |
| 16. 時実利彦(編)   | 脳の生理学 生理学大系(5)  | 医学書院              | 1965 |
| 17. 中西孝雄(編)   | 脳脊髄誘発電位   | 朝倉書店              | 1965 |
| 18. 沖中重雄, 小林隆,<br>時実利彦(編)                           | 視床下部  | 文光堂               | 1966 |
| 19. 笠松章, 時実利彦(訳)                                    | 臨床神経学の基礎<br>(チャトフィールド著)   | 協同医書出版社           | 1966 |
| 20. 塚田裕三, 黒川正則(編)                                   | 中枢神経実験法 生化学編  | 医学書院              | 1966 |
| 21. 時実利彦(編)   | 脳の生理学   | 朝倉書店              | 1966 |
| 22. 時実利彦(編)   | 脳と神経系 現代の生物学(6)   | 岩波書店              | 1966 |
| 23. T. Tokizane and<br>J. P. Schade(編)              | Progress in Brain Research, vol 21:<br>A, B   | Elsevier          | 1966 |
| 24. 勝木保次(著)   | 聴覚生理への道   | 紀伊国屋書店            | 1960 |
| 25. 勝木保次(編)   | 感覚の生理学 生理学大系(6)   | 医学書院              | 1967 |
| 26. 時実利彦(訳)   | 脳の働き (マクーン著) 改訂新版   | 朝倉書店              | 1967 |

27. 時実利彦(編) 脳の生理学 生理学大系(5) 医学書院 1967
28. 時実利彦, 大熊輝雄(編) 中枢神経実験法 生理学編 医学書院 1967
29. W. R. Adey and T. Tokizane(編) Structure and Function of the Limbic System. Progress in Brain Research, vol. 27 Elsevier 1967
30. 岩淵悦太郎, 波多野完治, 31. 時実利彦(著) ことばの誕生—うぶ声から5歳まで 人間を操る脳の機能 岩波講座哲学(3) 日本放送出版協会 1968
32. 時実利彦(著) 脳と人間 雷鳥社 1968
33. 市岡正道(訳) 皮膚感覚 医歯薬出版 1969
34. 塚田裕三(編) 脳の生化学 朝倉書店 1969
35. 時実利彦(著) 目でみる脳—その構造と機能— 東京大学出版会 1969
36. 時実利彦, 藤森聞一, 島藺安雄, 佐野圭司(著) 新脳波入門 南山堂 1969
37. 時実利彦(編) 情操, 意志創造性の教育 教育学叢書(20) 第一法規出版 1969
38. 中村嘉男(訳) 脳と記憶 みすず書房 1970
39. 千葉康則(著) 脳と現代 法政大学出版局 1971
40. 伊藤正男(著) ニューロンの生理学 岩波書店 1972
41. 佐藤昌康(編) 味覚, 嗅覚の科学 朝倉書店 1972
42. 品川嘉也(著) 脳とコンピューター 中央公論社 1972
43. 東京大学理学部情報科学研究施設(編) 思考過程と情報科学 産業図書 1972
44. 時実利彦(監訳)(S. Ochs) 神経生理学入門 協同医書出版 1972
45. 本間三郎, 渡部士郎(訳) 運動制御の原理 (R. Granit: The Brain of Motor Control) 医歯薬出版 1972
46. 時実利彦(著) 生命の尊厳 人間の世紀(1) 潮出版社 1973
47. 中村嘉男(訳) 感情を持つ機械 心の科学(I) みすず書房 1973
48. 中村嘉男(訳) 心の迷路 心の科学(II) みすず書房 1973
49. 中村嘉男(訳) 危機に立つ心 心の科学(III) みすず書房 1973
50. 伊藤正男(編) 感覚と神経系 現代の生物科学(8) 岩波書店 1974
51. 高木貞敬(著) 嗅覚の話 岩波書店 1974
52. 時実利彦(著) 脳と保育 雷鳥社 1974
53. 福田精(著) 運動と平衡の反射生理 木村書店 1974
54. 島村宗夫, 中村隆一(編) 運動の神経機構とその障害 医歯薬出版 1975
55. 藤森聞一(編) 固縮と痙縮 医学書院 1975
56. 松本政雄(著) 神経模型—人工“生命現象”の研究— 篠原出版 1975
57. T. Tokita, M. Hinoki and S. Watanabe(編) Studies on Nystagmus and Body Equilibrium. Allmquist & Wisksell 1975
58. 伊藤正男, 島津浩(編) 高次脳機能と中枢プログラミング, 現代の神経科学(3) 産業図書 1976
59. 入来正躬, 亀山正邦, 柄沢昭秀(編) 神経と精神の老化 医学書院 1976

60. 大塚正徳, 竹内昭(編) 伝達物質と受容物質 産業図書 1976
- 現代の神経科学(1)
61. 久保田競, 佐藤昌康(編) 感覚と行動の神経機構 産業図書 1976
- 現代の神経科学(4)
62. 島村宗夫(著) 運動の反射生理学 真興交易医書出版部 1976
- その基礎と臨床の応用—
63. 高木貞敬(著) 記憶のメカニズム 岩波書店 1976
64. 塚原仲晃, 佐藤俊輔(訳) 数理神経生理学(J. S. グリフィス著) 産業図書 1976
65. 時実利彦(編) 脳と神経系 岩波書店 1976
66. 南雲仁一, 万年甫(編) 神経系の発生・分化と可塑性, 現代の神経科学(2) 産業図書 1976
67. 松本淳治(著) 眠りとは何か 講談社 1976
68. H. Shiraki, T. Yonezawa and Y. Kuroiwa(編) The Aetiology and Pathogenesis of the Demyelinating Disease. Jap. Soc. Neuropath. 1976
69. 石川友衛(著) 運動生理学・神経生理学 医歯薬出版 1977
70. 稲永和豊, 大熊輝男(編) 神経生理学I, 現代精神医学体系(20)A 中山書店 1977
71. 大村裕, 小野武年(訳) 脳—その構造と働き(J. C. Eccles) 共立出版 1977
72. 栗山欣弥(著) シナプスの構造と機能 医歯薬出版 1977
73. 額額教三, 栗山欣弥(編) シナプスの構造と機能 一版 医歯薬出版 1977
74. 塚田裕三, 山河宏(訳) 脳と心の正体 (ワイルダー・ベンフィールド著) 文化放送出版部 1977
75. 塚田裕三(編) 脳—Science Illustrated 4 日本経済新聞社 1977
76. 渡辺格, 森田弘道, 伊藤正男, 天野武彦(編) 構造と発生 神経科学講座(1) 理工学社 1977
77. 渡辺格, 森田弘道, 78. Y. Katsuki, M. Sato, S. F. Takagi and Y. Oomura(編) 感覚と認識 神経科学講座(3) Food Intake and Chemical Senses. Univ. Tokyo Press, Tokyo 1977
79. 伊藤正男, 入沢宏, 小幡邦彦, 鳥居鎮夫, 松尾裕(編) 生体リズム 脳の統御機能(1) 医歯薬出版 1978
80. 伊藤正男, 小幡邦彦, 田崎京二, 塚原仲晃, 松尾裕(編) 感覚と知覚 脳の統御機能(3) 医歯薬出版 1978
81. 今村護郎(著) 行動と脳—心理学と生理学— 東京大学出版会 1978
82. 須田勇(監修), 岩原信九郎, 酒井誠(訳) 脳の言語(K. H. プリブラム著) 誠信書房 1978
83. 高木貞敬, 豊田文一, 北村武(編著) 嗅覚障害—その測定と治療 医学書院 1978
84. 中村嘉男(訳) 目的を持つ脳 海鳴社 1978
85. 渡辺格, 森田弘道, 伊藤正男, 天野武彦(編) 神経機能の基礎 神経科学講座(2) 理工学社 1978

86. 渡辺 格, 森田弘道, 伊藤正男, 天野武彦(編) 運動と制御 神経科学講座(5) 理工学社 1978
87. M. Ito, N. Tsukahara, K. Kubota and K. Yagi(編) Integrative Control Functions of the Brain. Vol. 1 Kodansha/Elsevier 1978
88. 伊藤正男, 小幡邦彦, 松尾 裕, 八木欽治(編) 内分泌と脳 脳の統御機能(2) 医歯薬出版 1979
89. 伊藤正男, 小幡邦彦, 島津 浩, 松尾 裕, 吉田充男(編) 運動の中核メカニズム 脳の統御機能(4) 医歯薬出版 1979
90. 大木幸介(著) 脳をあやつる分子言語 —知能・感情・意欲の根源物質— 講談社 1979
91. 黒川正則, 田代朋子, 山本長三郎(訳) 脳の細胞生理学(W. E. ワトソン) 講談社 1979
92. 田崎京二, 大山 正, 樋口涓二(編) 視覚情報処理—生理学・心理学 生体工学 朝倉書店 1979
93. 渡辺 格, 森田弘道(編) 行動と思考 神経科学講座(6) 理工学社 1979
94. H. Asanuma and V. J. Wilson(編) Integration in the Nervous system. 医学書院 1979
95. M. Ito, N. Tsukahara, K. Kubota and K. Yagi(編) Integrative Control Functions of the Brain. Vol. II Kodansya/Elsevier 1979
96. N. Ushio, H. Kitamura and T. Matsumiya(編) Postural Reflex and Body Equilibrium. I. Soc. Nara Otoneurol. Res. 1979
97. 荒井 良(著) 脳とからだ—情緒・ことば・運動— 社会思想社 1980
98. 伊藤正男(著) 脳の設計図 中央公論社 1980
99. 伊藤正男, 大塚正徳, 小幡邦彦, 松尾 裕(編) 活性物質と神経回路網 脳の統御機能(5) 医歯薬出版 1980
100. 伊藤正男, 大村 裕, 小幡邦彦, 久保田 競, 松尾 裕(編) 行動発現と脳 脳の統御機能(6) 医歯薬出版 1980
101. 岩村吉晃, 酒田英夫, 佐藤昭夫, 豊田順一, 松浦修四, 小野武年(訳) 感覚生理学 (R. F. シュミット著) 金芳堂 1980
102. 高木貞敬(著) 子育ての脳生理学 朝日新聞社 1980
103. 中島 章, 秋吉正豊(編) 薬物と感覚障害 ソフトサイエンス社 1980
104. 中西孝雄, 島村宗夫(編) 臨床神経生理学入門 真興交易医書出版 1980
105. 中村嘉男(訳) 神経・脳・行動 朝倉書店 1980
106. 渡辺 格, 森田弘道, 伊藤正男, 天野武彦(編) 記憶と学習 神経科学講座(4) 理工学社 1980
107. M. Ito, N. Tsukahara, K. Kubota and K. Yagi(編) Integrative Control Functions of the Brain. Vol. III Kodansya/Elsevier 1980
108. K. Ohta, T. Maknodan, M. Iriki and L. S. Baker(編) Aging Phenomena—Relationships among Different Levels of Organization. Plenum Press 1980
109. 入来正躬(編) 自律神経 藤田企画出版 1981

110. 入来正躬(編) 自律神経最新の知識 藤田企画出版 1981
111. 大村 裕, 小野武年(編) 脳と行動—報酬系の生理学 (J. Olds 著) 共立出版 1981
112. 沖野 遙, 島村宗夫(編) 生体計測入門 コロナ社 1981
113. 角田忠信(著) 右脳と左脳 小学館 1981
- その機能と文化の異質性—
114. 高垣玄吉郎, 永津俊治(編) 神経伝達物質 アミノ酸とアミン 講談社サイエンティフィック 1981
115. Y. Katsuki, R. Norgren and M. Sato(編) Brain Mechanism of Sensation. John Wiley & New York. 1981
116. Y. Kawamura and R. Dubner(編) Oral-Facial Sensory and Motor Functions. Quintessence Pub. Co. 1981
117. K. Ushio, H. Kitamura and T. Matsumiya(編) Postural Reflex and Body Equilibrium. II Soc. Nara Otoneurol. Res. 1981
118. N. Yamaguchi and K. Fujita(編) Recent Advances in EEG and EMG Data Processing. Elsevier 1981
119. 市川 宏(編) 色覚異常 眼科 Mook16 金原出版 1982
120. 伊藤正男(編) 脳と認識 平凡社 1982
121. 川上正澄(著) 男の脳と女の脳 紀伊国屋書店 1982
122. 久保田 競, 森田弘道(編) 摂食行動のメカニズム 産業図書 1982
123. 鈴木良次, 曾我部正博, 川上光男(訳) 神経系の情報伝達 (A. M. フトニー著) サイエンス社 1982
124. M. Ichioka(著) Neurophysiology of electroacupuncture analysis in rats. Univ. Tokyo Press 1982
125. Y. Katsuki(著) Receptive mechanisms of sound in the ear. Cambridge Univ. Press 1982
126. 伊藤正男(編) 脳と運動 平凡社 1983
127. 伊藤正男(編) 脳と行動 旺文社 1983
128. 河村洋二郎(編) 脳における感覚情報機構 医歯薬出版 1983
129. 小林 惇, 宗岡洋二郎(著) 行動生理学の基礎 朝倉書店 1983
130. 鈴木寿夫(著) 解説神経生理学 弘前大学医学部学友会出版局 1983
131. 塚田裕三(著) 脳の神秘を探る —科学は脳をどこまで解明できたか— 河出書房新社 1983
132. 塚田裕三, 白井尚之(編) ザ・ブレイン—脳の最前線— 鎌倉書房 1983
133. 塚田裕三(編) 図説 脳 日経サイエンス 1983
134. 中村嘉男(訳) 図説神経学 丸善 1983
135. 浜口勝彦, 松山春郎, 植村慶一(編) 脱髄疾患の基礎と臨床 金剛出版 1983
137. 中村嘉男, 酒田英夫(編) 脳の科学(I, II) 朝倉書店 1983
138. 岩井栄一(著) 脳—学習・記憶のメカニズム— 朝倉書店 1984
139. 大村 裕, 島津 浩, 伊藤正男(編) 脳の構造と機能 下巻 医学書院 1984
140. 塚原仲晃(編) 脳の情報処理 朝倉書店 1984

141. 鳥居 鎮夫(編) 睡眠の科学 朝倉書店 1984
142. 二木 宏明(著) 脳と心理学 朝倉書店 1984  
—適応行動の生理心理学—
143. 山下 格, 山内 俊雄(編) 中枢神経実験法 北海道大学図書刊行会 1984
144. E. V. Evarts, Y. Shinoda and S. P. Wise(著) Neurophysiological Approaches to Higher Brain Function. John Wiley & Sons 1984
145. T. Fukuda(著) Statokinetic Reflexes in Equilibrium and Movement. Univ. Tokyo Press 1984
146. M. Ito(著) The Cerebellum and Neural Control. Raven Press 1984
147. M. Kuno(編) Neuronal Growth and Plasticity. Jap. Sci. Soc. Press 1984
148. N. Ushio, H. Kitamura and T. Matsumiya(編) Postural Reflex and Body Equilibrium. III. Soc. Nara Otoneurol. Res. 1984
149. 伊藤 文雄(著) 筋感覚の科学 名古屋大学出版会 1985  
—運動のたくみさをさぐる—
150. 伊藤 正男(編) 脳と意識 平凡社 1965
151. 伊藤 正男, 塚原 仲晃(編) 脳科学の展開 上巻・下巻 平凡社 1985
152. 大村 裕, 島津 浩, 伊藤 正男(編) 脳の構造と機能 上巻 医学書院 1985
153. 久保田 競 他(著) 脳の手帳—ここまで解けた脳の世界— 講談社 1985
154. 小松崎 篤, 篠田 義一, 丸尾 敏夫(著) 眼球運動の神経学 医学書院 1985
155. 須田 勇, 足立千鶴子(訳) 融合する心と脳: 科学と価値観の優先順位 (ロジャ・スベリー著) 誠信書房 1985
156. S. Inoue and A. A. Borbely(編) Endogenous Sleep Substances and Sleep Regulation. Jap. Sci. Soc. Press 1985
157. G. Mitarai and M. Igarashi(編) Sensory-motor Functions under Weighlessness and Space Motion Sickness. Univ. Nagoya Press 1985
158. 伊藤 正男(著) 脳のメカニズム 岩波書店 1986
159. 伊藤 正男, 酒田 英夫(編) 脳科学の新しい展開 岩波書店 1986
160. 伊藤 正男, 祖父江 逸郎, 小松崎 篤, 広瀬源二郎(編) 小脳の神経学 医学書院 1986
161. 小原 昭作, 丸井 隆之, 永井 隆之(訳) 実験神経生物学 (B. Okley & R. Schafer: Experimental Neurology) 東海大学出版会 1986
162. 小松崎 篤(編) めまい, その基礎と臨床 医薬ジャーナル社 1986
163. 後藤 秀機(著) 神経軸索輸送の医学 海鳴社 1986
164. 杉下 守弘(著) <脳>と<こころ>の対話 青土社 1986
165. 高木 博司, 大村 裕, 伊藤 正男(編) 脳の生体警告系 東京大学出版会 1986
166. 竹中 敏文, 平本 幸男(編) 神経生物学 実験生物学講座(9) 丸善 1986
167. 津本 忠治(著) 脳と発達 環境と脳の可塑性— 朝倉書店 1986
168. 西 彰五郎, 竹内 昭(編) シナプス生理学 新生理学大系(2) 医学書院 1986

169. Y. Ohmura(編) Emotion-Neural and Chemical Control. Jap. Sci. Soc. Press 1986
170. Karczmar, A. G., K. Koketsu & S. Nishi. Autonomic and Enteric ganglia Plenum Press 1986
171. 酒田 英夫, 安西 祐一, 甘利 俊一(著) 脳科学の現在—神経生理学・認知科学・数理工学から— 中央公論社 1987

## III. 生理学 (神経生理学を除く) 著編訳書

- | 著編訳者名                                      | 書名   | 出版社                       | 発行   |
|--|--|---------------------------|------|
| 1. 田多井吉之介, 長田泰公(著)                         | 好酸球の動力学  | 医学書院                      | 1956 |
| 2. 操, 若林, 阪本(編)                            | 微小電極, 医学エレクトロニクス                                       | 南山堂                       | 1956 |
| 3. 藁島 高(著)                                 | 医学エレクトロニクス   | 南山堂                       | 1956 |
| 4. 永井寅男(著)                                 | 筋収縮の物理化学   | 医学書院                      | 1956 |
| 5. 山本 清(著)                                 | 内分泌機能の相関   | 協同医学社                     | 1956 |
| 6. 長島長節, 長島親男, 上田五雨(著)                     | 人体血管の神経性調節   | 東大出版会                     | 1957 |
| 7. 微小電極法研究班(編)                             | 微小電極の手引き   | 金芳堂                       | 1957 |
| 8. 後藤昌義(著)                                 | 人体の電気現象とその応用   | 永井書店                      | 1957 |
| 9. 丹生治夫(著)                                 | 運動医学提要   | 峯書房                       | 1957 |
| 10. 山本 清(著)                                | ホルモン作用と酵素  | 金原出版                      | 1957 |
| 11. Kumagai, H(編)                          | Conference on the chemistry of Muscular Contraction    | Igaku Shoin               | 1957 |
| 13. 熊谷 洋(編)                                | 筋化学  | 医学書院                      | 1959 |
| 14. 若林 勲, 内山孝一(編)                          | 興奮伝導の諸問題   | 医歯薬出版                     | 1959 |
| 15. 後藤昌義, 玉井 忠(著)                          | 平滑筋, 心筋の諸問題  | 金芳堂                       | 1960 |
| 17. Yoshimura, H., Ogata, K., Itoh, S.(編)  | Essential Problems in Climatic Physiology              | Nankodo                   | 1960 |
| 18. 岡本歌子(著)                                | 血液   | 光文社                       | 1961 |
| 19. 真島英信, 土肥 一郎, 伊藤 宏, 伊藤隆太, 酒井文徳, 佐藤温安(著) | 実験医学研究の手引  | 文光堂                       | 1961 |
| 20. 赤堀四郎(編)                                | 酵素研究法(第4巻)   | 朝倉書店                      | 1961 |
| 21. 中西政周(著)                                | 表情の心理生理学   | 永井書店                      | 1962 |
| 22. 田多井吉之介, 浅野牧茂                           | 微細循環の構造と機能   | 医学薬出版                     | 1963 |
| 23. 三宅 儀, 山本 清(編)                          | 内分泌(I)   | 朝倉書店                      | 1963 |
| 24. 竹宮 隆(訳)                                | H. セリエ(著)現代生活とストレス                                     | 法政大学出版会                   | 1963 |
| 25. 久保秀雄(著)                                | 生物化学序説   | 共立出版                      | 1964 |
| 26. 猪飼道夫, 久松栄一郎(編)                         | スポーツ医学   | 杏林書院                      | 1964 |
| 27. 三宅 儀, 山本 清(編)                          | 内分泌(II)  | 朝倉書店                      | 1964 |
| 28. K, Kato(編)                             | Proceeding of International Congress of Sports Science | University of Tokyo Press | 1964 |
| 29. 藤本 守(訳)                                | R. F. Pitts. 腎と体液の生理                                   | 医学書院                      | 1964 |

30. Ebashi, S.(編) Molecular Biology of Muscular Contraction Igaku shoin and Elsevier Publishing Co. 1965
31. 岡本歌子, 大柴 進(編) 線溶現象の基礎と臨床, 測定法 医学書院 1966
32. 榎 哲夫, 鈴木泰三(著) 平滑筋電図の基礎と臨床 金原出版 1966
33. 入内島十郎(著) 循環生理学入門 医学出版社 1966
34. 藤森聞一(編) 運動系の生理学(生理学大系7巻) 医学書院 1966
35. 中山昭雄(著) 臨床エレクトロニクス入門 南山堂 1966
36. 日本生物物理学会(編) 膜の生物物理(生物物理学講座) 吉岡書店 1966
37. 井上 章, 品川嘉也(著) 運動生理学序説 南江堂 1966
38. Yoshimura, H. & J. S. Weiner Human Adaptability and its Methodology Maruzen 1966
39. Pincus, G., T. Nakao and J. F. Tait. Steroid Dynamics Academic Press 1966
40. Kubo, H. Stude Biophysico-Chemiguede l'oxydoreduction Nagai shoten 1966
41. 山岡誠一(著) スポーツ労働栄養学 医歯薬出版 1970
42. 竹中繁雄(著) 物理学基礎—生理学, 生化学研究のための 医学書院 1967
43. 北里 宏(著) 興奮性膜の一般生理 南江堂 1967
44. 塚田裕三(編) 抗ブラシン療法—15年のあゆみ 第一製薬K. K 1968
45. 吉村寿人, 松下 寛, 森本武利(著) pH の理論と測定法 丸 善 1968
46. 井上 章, 品川嘉也(編) 能動輸送 南江堂 1969
47. 須田 勇(編) 生体制御理論テキスト 医学書院 1969
48. 吉川春寿, 中尾嘉久(編) 血液の生化学, 基礎と臨床 朝倉書店 1969
49. 岡 小天, 東 健彦(訳) G. W. Scott Blair : Elementary Rheology, 入門レオロジー 朝倉書店 1970
50. 中山昭雄(著) 体温とその調節 中外医学社 1970
51. Bübling, E., A. F. Brading, A. W. Jones & Tomita, T.(編) Smooth Muscle Edward Arnold 1970
52. 西丸和義(著) 脈管学の基礎 アカデミーサービス 1970
53. 吉村寿人(著) 日本人の適応能 講談社 1970
54. 岩瀬善彦, 玉重三男, 古河太郎(編) 生物電気 南江堂 1970
55. 上田五雨, 別府芳雄(著) 入門生物物理学 現代医療社 1970
56. 吉村寿人, 高木健太郎, 猪飼道夫(編) 適応協関の生理学 (生理学大系IX) 医学書院 1970
57. 吉村寿人, 緒方維弘(編) 代謝の生理学 (生理学大系IV-1) 医学書院 1970
58. 日本分光学会(編) 臨床検査と分光分析法 医学書院 1970
59. 後藤昌義(著) 循環生理学—心臓と幹循環 朝倉書店 1971
60. 本田良行(訳) pH 測定の理論と実際 真興交易医学書版 1971
61. 岡本彰祐(編) Fibrinolysis in health and disease 医学書院 1971
62. Itoh, S. Ogata, K & Yoshimura, H(編) Advances in Climate Physiology 医学書院 1972

63. Iriuchijima, J.(著) Cardiovascular Physiology. Nerve, flow and Pressure Igaku Shoin 1972
64. 伊藤真次, 広重 力, 黒島辰汎(編) 脳のホルモン 朝倉書店 1973
65. 入内島十郎(訳) 循環 真興医学出版 1973
66. 福原 武(著) 消化運動のメカニズム 文光堂 1973
67. 緒方維弘(著) 適応—気候風土に対する適応 医歯薬出版 1973
68. 松田幸次郎, 後藤昌義(編) 洞房結節の生理—心臓の歩調取り 医学書院 1973
69. Yagi, K. and Yoshida, H(編) Neuroendocrine Control. Tokyo Univ. Press. 1973
70. 浅野牧茂, 沖野 遙(編) 血流測定 医学書院 1974
71. 永井寅男(著) 筋の生理学 朝倉書店 1974
72. Kawakami, M(編) Biological Phythm in Neuroendocrine Activity Igaku shoin 1974
73. 河村洋二郎, 笠原康夫, 森本俊文(訳) 歯の痛み—その症状と診断 医歯薬出版 1974
74. 長田泰公(著) 環境と健康 第日本図書 1974
75. 本田良行(著) 酸塩基平衡の基礎と臨床 真興交易医書 1974
76. Yoshimura, H and Kobayashi, S.(編) JIBP Synthesis Univ. Tokyo Press. 1975
77. Kobayashi, S. and Ogawa, T.(編) JIBP Synthesis. Human Adaptation Univ. Tokyo Press 1975
78. 畠山一平, 須田 勇(編) 生理学研究法 医学書院 1975
79. 小林庄一(編) 人と潜水—水環境への適応 共立出版 1975
80. 御手洗玄洋, 中島 実(訳) 高所医学 山と溪谷社 1975
81. Mochizuki, M.(著) Graphical Analysis of Oxygenation and Co-combinatidn Rates of the Red cells in the Lung. 広川書店 1975
82. Horoath, S. M., S. Kondo, Matsui, H and Yoshimura, H.(編) JIBP Synthesis Univ. Tokyo Press 1975
83. Copley, A. L. and Okamoto, S.(編) Hemorheology and Thrombosis Pergamon Press 1976
84. 中尾 真(編) 細胞膜の生化学 朝倉書店 1976
85. 猪飼道夫(編) 身体運動の生理学 杏林書院 1976
86. 浅野牧茂, 入内島十郎(編) 臨床医のための循環生理 真興交易出版 1976
87. 高木末夫(編) 医用電子, 生体工学実験法(I), (II) コロナ社 1976
88. 入内島十郎(訳) Cardiovascular Physiology. 心臓と血管の生理学 真興交易出版 1976
89. 須田正己(編) 消化器系の構造と機能 中山書店 1976
90. 芝山秀太郎, 江橋 博(著) 科学的な身体づくり 現代人社 1976
91. 山本 清(著) 比較内分泌学序説 東京大学出版会 1976
92. 入内島十郎(著) 循環生理学 中外医学社 1977
93. 有田 真(訳) D. ノーブル(著)心臓拍動の生理 東大出版会 1977
94. 伊藤真次(著) ヒトと日周リズム—生理適応におよぼす環境の影響 共立出版 1977

95. 岡本彰祐(著) 血液のはたらきを探る 岩波書店 1977  
 96. 杉晴夫(著) 筋運動の進化 東大出版会 1977  
 97. 本田良行(編) 臨床呼吸生理学(I), (II) 真興交易医書出版 1977  
 98. 吉村寿人(著) ヒトの適応能 共立出版 1977  
 99. 萩原文二(編) 電極法による酸素測定 講談社 1977  
 100. 中山沃(著) 消化管の運動 中外医学社 1977  
 101. 酒井敏夫, 遠藤実, 杉田秀夫(編) 筋の構造と機能 医学書院 1977  
 102. 浅野牧茂(編) 毛細血管の解剖と生理 他人書館 1978  
 103. 生越久晴, 飯塚哲太郎(編) ヘムタンパク質の化学 化学同人 1978  
 104. 堀田健, 田中堯(編) 膜と神経, 筋, シナプス 喜多見書房 1978  
 105. 石河利意, 松井秀治(編) スポーツ医学 杏林書店 1978  
 106. 山田和生(編) 心臓の興奮と伝導 メディカル出版 1978  
 107. 佐々木隆, 千葉喜彦(編) 時間生物学 朝倉書店 1978  
 108. 川上正澄, 貴邑富久子(著) 内分泌生理学 南山堂 1978  
 109. 吉村寿人, 川上正澄, 井村裕夫, 東条伸平(編) 内分泌学 南山堂 1978  
 110. Yokoyama, A., Mizuno, H. and Nagasawa, H.(編) Physiology of mammary Glands Japan Scientific Societies Press 1978  
 111. Dorner, G. and M. Kawakami(編) Hormones and Brain Development Elsevier 1978  
 112. 浅野牧茂, 東健彦(編) 微小循環 中山書店 1979  
 113. 東健彦, 土屋雅春, 三島好雄(編) 微小循環 生涯教育シリーズ6 中山書店 1979  
 114. 入内島十郎(著) 血液循環のはなし 真興医学出版 1979  
 115. 吉沢喜作, 奥山隆, 音谷登, 佐々木勸, 村田克己(著) ヘパリン 講談社サイエンティフィック 1979  
 116. 伊藤真次, 川上正澄(編) 適応と脳ホルモン 理工学社 1979  
 117. 朝比奈一男(編) 日本人の体力と健康 社会保健新報社 1979  
 118. 山本清(著) ホルモンと糖質の代謝 共立出版 1979  
 119. 川畑愛義(編) 体力づくりと運動スポーツ 学校保健研究社 1979  
 120. Itoh, M.(編) Physiology of Mammary Glands. Vol (II) Japan Scientific Societies Press 1979  
 121. Sugi, H and Pollack, G. H(編) Cross-bridge Mechanism in Muscle Contraction Univ. of Tokyo Press 1979  
 122. 銭場武彦(著) 胃・腸管運動の基礎と臨床 真興交易出版 1979  
 123. 伊藤稔(編) 中高年者の有酸素作業能力 一条書店 1979  
 124. 浅野牧茂, 沖野遙(編) 心臓血管系の力学と基礎計測 R. N. Hardy: Temperature and Animal life 講談社 1980  
 125. 佐々木隆(訳) 暑さ寒さと人間 朝倉書店 1980  
 126. 佐々木隆(訳) 温度と動物 朝倉書店 1980  
 127. 鈴木光雄, 松崎茂(編) 甲状腺学—その生理と病態 共立出版 1980

128. 竹内正, 東健彦, 稲垣義明(編) 循環—病態生理・診断・治療 文光堂 1980  
 129. Itoh, M. Tsukahara, N., Kubota, K. and Yagi, K.(編) Physiology of Mammary Glands Vol(III) Japan Scientific Societies Press 1980  
 130. 小林庄一, 日下部陽(訳) スポーツ潜水の科学と実験—スキン・ダイビングとスキューバ・ダイビング— 日本YMCA出版 1981  
 131. 河村洋二郎, 笠原康夫, 森本俊文(訳) J. M. Munford, Toothache and or facial pain 歯と口腔顔面の痛み 医歯薬出版 1981  
 132. 黒島辰汎(著) 環境生理学 理工学社 1981  
 133. 中山昭雄(編) 温熱生理学 理工学社 1981  
 134. 石津和彦(編) 実用SR入門—生命科学へのアプローチ— 講談社サイエンティフィック 1981  
 135. 伊藤真次(編) ホルモンの中樞作用 理工学社 1981  
 136. 鈴木泰三, 星猛, 鈴木裕一(著) 生体膜輸送の基礎 東京化学同人 1982  
 137. 佐々木隆(著) 健康と気象—環境との調和をめざして— 朝倉書店 1982  
 138. 山本清(著) 性と性ホルモン 共立出版 1982  
 139. 山本清(著) ホルモンと脂質の代謝 共立出版 1982  
 140. 鈴木善祐(編) 実験生殖生理学の展開 ソフトサイエンス社 1982  
 141. 斎藤望, 平野実(編) 呼吸・嚙下・発声の制御 篠原出版 1982  
 142. 志賀健(著) 生理化学演習 講談社サイエンティフィック 1982  
 143. 芝山秀太郎, 江橋博(著) 中高年者の体力特性 一条書店 1982  
 144. 中馬一郎, 近藤宗平, 武部啓(編) 環境と人体(I) 東京大学出版 1982  
 145. 今井昭一, 家森幸男, 河合忠一, 竹内享(監訳) 人間の心臓血管系病態生理とその理論的考察 西村書店 1983  
 46. 浅野牧茂, 東健彦, 神谷瞭一(編) 微小循環—医学と理工学との接点— コロナ社 1983  
 47. 松尾理, 大柴進, 河野克彬(訳) 症例—演習による体液と電解質バランス 医学書院 1983  
 48. 東健彦, 神谷瞭一(著) 微小循環 サウンダース 1983  
 49. Shiraki, K., and Matsuoka, S.(著) Hyperbaric Medicine and Underwater Physiology コロナ社 1983  
 50. Matsui H. and Kobayashi, K.(編) Biomechanics Human Binetics Publishers 1983  
 51. 日本比較内分泌学会(編) ホルモンの生物科学 学会出版 1983  
 2. 落合威彦, 榎泰義, 本田良行(訳) 呼吸生理学の基礎 真興交易医書出版 1983

153. 中馬一郎, 近藤宗平, 武部啓(編) 環境と人体(Ⅱ) 東京大学出版 1983
154. 後藤昌義(著) 心臓の生理 南江堂 1984
155. 山下智, 宗正洋二郎, 日高徹(著) 神経と筋肉 共立出版 1984
156. 杉晴夫, 平本幸男(編) 運動生理学—実験生物学講座 丸善 1984
157. 伊藤寛志(著) 医学生のための医用工学入門 菜根出版 1984
158. 佐久間康夫(訳) エストロジェンと脳 西村書店 1984
- 一生殖行動の神経回路
159. 芝山秀太郎, 江橋博(著) 運動と循環呼吸の生理 一条書店 1984
160. 中馬一郎, 江上信雄, 武部啓(編) 環境と人体(Ⅲ) 東大出版 1984
161. Ochiai, K., Arai, V., Takahashi, M. and Shioda, T.(編) Endocrine Correlates of Reproduction Japan Scientific Societies Press 1984
162. Miyagawa, A. K., H. P. Kaepchen and C. Polosa(編) Mechanisms of Blood Pressure Waves Japan Scientific Societies Press, Springer-Verlag. 1984
163. 本田良行(編) 肺と心臓機能の基礎と臨床(Ⅰ) 真興交易医学出版 1985
164. 本田良行(編) 肺と心臓機能の基礎と臨床(Ⅱ) 真興交易医学出版 1985
165. 星猛(著) わかりやすい生体膜とイオン輸送体の知識 メディカルトリビューン社 1985
166. 三好秋馬, 伊藤漸(編) 消化管運動調節剤—基礎と臨床 医薬ジャーナル社 1985
167. 芝山秀太郎, 江橋博, 一木昭男(著) 体力の生理学 一条書店 1985
168. Pollack, G. H. and Sugi, H.(編) Contractile Mechanism in Muscle Plenum, New York 1985
169. Ogawa, H., Lazarus G. S. and Hopsu, V. K.(編) The Biological Role of Proteases and their Inhibitors in skin Univ. Tohyo Press 1985
170. Murakami, H., Yamane, I., Barnes, D. W. Mather, J. P., Hayashi, I. and Sato, G. H.(編) Growth and Differentiation of Cells in Defined Environment Kodansha 1985
171. 渡辺昭, 山本俊一(編) 興奮膜の生理学, 新生理科学大系 第1巻 医学書院 1986
172. 富田忠雄, 杉晴夫(編) 筋肉の生理学, 新生理科学大系 第4巻 医学書院 1986
173. 阪口周吉, 寺尾俊彦, 高田明和(編) 血栓の形成と溶解 メディカルリサーチセンター 1986
174. 大柴進, 松尾理, 松尾武文(監訳) 絵でみる血栓, 止血のメカニズム 医学書院 1986
175. 大島正光, 松田源彦(監訳) 宇宙医学 同文書院 1986
176. 川上正澄, 瀬戸勝男, 根来英雄(編) 人門内分泌学 南山堂 1986
177. 中村嘉男(訳) 痛みへの挑戦 誠信書房 1986
178. 宮村実晴, 矢部京之助(編) 体力トレーニング 真興交易医学出版 1986

179. 体育科学センター(編) スポーツによる健康づくり運動カルテ 講談社 1986
180. Kasuya, Y., Tsuchiya, M., Nagao, F., Matsuo, Y.(編) Gastrointestinal Function-Regulations and Disturbances(Vol.4) Excerpta Medica 1986
181. Yamada, K., Katz, A. M. and Toyama, J.(編) Cardiac Function under Ischemia and Hypoxia University of Nagoya Press 1986
182. Karczmar, A. G., Koketsu, K., & Nishi, S.(編) Transmission Pharmacology Plenum Press 1986

## Ⅳ. 生理学用語集・生理学史・生理学計数

- 林香苗(編) Uchiyama, K. et al. 日本人並に日本産医学実験動物の解剖学及び生理学計数 Japanese Physiology, Present and Past 1965 文京書院 1956
- 箕島高(編) 日本人人体正常数値表 技報堂 1958
- 坪井実(編) 犬の解剖学及び生理学計数表 文京書院 1970
- 浦本政三郎, 内山孝一, 名取禮二, 酒井敏夫(編) 日本生理学教室史 上巻 鶴岡印刷 1983
- 日本生理学会 生理学会用語集(英独和対照) 南山堂 1960
- 生理学用語集 医学書院 1972
- 新版 生理学用語集 南江堂 1984

## Ⅴ. 生理学教室論文集(退官記念論文集)類

- 【A】北海道地区 札幌医科大学生理学教室
- 旭川医大第一生理学教室編 開講10周年記念生理学論文目録
- ある生理学研究室の歩み I (1941~1960) 1960
- 温熱生理学11年— II (1960~1975) 1975
- 北海道大学医学部第二生理学教室論文集 永井寅男教授退任記念業績目録集
- 第1巻 1974 III (1976~1979) 1980
- 第2巻 1974 永井寅男教授停年退任記念
- 第3巻 1974 VI—(1) 1980
- 第4巻 1974 VI—(2) 1980
- 第5巻 1974 札幌医科大学生理学教室
- 第6巻 1978 生理学論文集 III 1956
- 第7巻 1983 " IV 1957
- 加藤正道教授就講十周年記念 " V 1959
- 教室業績集 1984 札幌医科大学生理学教室
- 中村治雄論文集 永井寅男教授停年退任記念
- I 1961 Collected papers in muscle physiology,
- II 1966 Part 1 1980
- III 1968 Part 2 1980
- IV 1971 札幌医科大学生理学第2講座
- V 1975 開講10周年記念研究業績目録 1974
- VI 1976 札幌医大 生理学第2講座
- VII 1981 生理学論文集 I 1968
- VIII 1986 " II, III 1979

[B] 東北地区

弘前大学医学部第二生理学教室  
 論文集 I 1967  
 " II 1968  
 岩手医科大学三田第一生理同門会  
 藤巻延吉(編)  
 佐藤 誠教授就任十周年記念誌 1985  
 東北大学医学部応用生理学教室  
 鈴木泰三教授退官記念研究業績集 1983  
 青木 健先生退任記念  
 生理学ひとすじ四十年 1984  
 横山正松研究業績集  
 (横山正松教授退官記念) 1979

[C] 関東地区

新潟大学医学部生理学第二教室編  
 小林庄一教授追悼業績集(昭和59年) 1984  
 千葉大学医学部第2生理学教室  
 業績集 6(1) 1971~1979  
 " 6(2) 1980~1983  
 群馬大学医学部第二生理学教室  
 高木貞敬教授業績目録 1984  
 横浜市立大学医学部第二生理学教室  
 開講10周年記念誌 1971  
 開講20周年記念誌 1982  
 川上正澄教授追悼業績集 1983  
 埼玉医科大学 林 秀生  
 「創立10年のあゆみ」編集委員会編  
 創立10年のあゆみ 1982  
 東海大学医学部生理学教室教室年報  
 第1巻1974~1980  
 第2巻1981~1984  
 坪井 実(編)  
 東京薬科大学第2薬理学教室(旧生理学教室)  
 研究業績集 第1巻(昭和40~49年) 1977

[D] 東京地区

東京女子医科大学第一生理学教室論文集  
 第1巻 1960  
 第2巻 1961  
 第3巻 1965  
 東京女子医科大学第一生理学教室  
 追想 草地良作先生 1983  
 円谷 豊教授生理学教室業績集 1983

内山孝一(編)

日本大学医学部生理学論文集 (2) 1956  
 " (3) 1959  
 " (4) 1968  
 日本大学医学部第二生理学教室  
 論文集 (1) 1959  
 " (2) 1973  
 東京医科歯科大学歯学部生理学教室編  
 市岡正道教授業績別刷集 1982  
 市岡正道教授退官記念会編  
 市岡正道教授業績目録 1982  
 慶大・生理学教室論文集  
 第1巻—第41巻(大正14年—昭和60年)  
 朝比奈一男教授定年退職記念業績目録 1975  
 日本大学歯学部生理学教室編  
 日本大学歯学部生理学教室  
 開設三十五周年記念集 1970  
 昭和大学医学部第二生理学教室編  
 25年のあゆみ 1983  
 東京慈恵会医科大学第二生理学教室  
 研究業績目録集  
 一酒井敏夫教授退任記念— 1986  
 東京慈恵会医科大学  
 第二生理学教室論文集第6巻 1975  
 " 第7巻 1986

[E] 中部地区

信州大学医学部第1生理学教室論文集  
 一和合卯太郎教授開講15周年記念— 1961  
 信州大学医学部第1生理学教室業績目録  
 一東 健彦教授開講15周年記念— 1981  
 順応生理学部門業績集  
 第1~19巻 1965~1983  
 環境生理学部門業績集  
 第20巻 1984  
 第21巻 1985  
 勝田 諒教授退官記念業績集 1979  
 三重県立医科大学勝田教室論文集 1964

[F] 近畿地区

井上 章教授退官記念会編  
 Topics in General Physiology & Biophysics.  
 Kitami Shobo 1980

京都府立医科大学第一生理学教室論文集

機能と代謝  
 第一巻 1953  
 第二巻 1954  
 第三巻 1957  
 第四巻 1959  
 第五巻 1961  
 第六巻 1964  
 第七巻 1966  
 第八巻 1968  
 第九巻 1970  
 吉村寿人教授定年退職記念業績目録 1970  
 角 忠明教授研究業績目録 1981  
 神戸学院大学栄養学部  
 生理学研究室論文集 I 1968~1980  
 " II 1981~1985  
 神戸学院大学栄養学部論文集  
 I 1966~1969  
 II 1970~1971  
 III 1972~1985  
 中山昭雄(編)  
 大阪大学医学部第二生理学教室業績集  
 1975~1980 1984  
 1981~1984 1984  
 吉井直三郎教授定年退官記念  
 大阪大学医学部第二生理学教室業績集 1974  
 吉井直三郎(編)  
 大阪大学医学部第二生理学教室論文集  
 第一巻(昭和22年~27年) 1953  
 第二巻(昭和28年~33年) 1958  
 第三巻(昭和34年~35年) 1960  
 第四巻(昭和35年~41年) 1967  
 " (英文) ( " ) 1967  
 第五巻(昭和42年~49年) 1980  
 (和文・欧文)  
 腎と体液の研究(藤本 守編)  
 第1巻(1959~1966) 藤本 守論文集 1982  
 第2巻(1967~1973) " 1982  
 第3巻(1974~1979) 大阪医科大学 1982  
 第二生理論文集 1982  
 第4巻(1979~1981) " 1982  
 大阪歯科大学生理学教室  
 論文集 第一集(教室開設周年記念号) 1957  
 " 第二集 1960

論文集 第三集(関根教授開講

十周年記念号) 1961  
 " 第四集(教室開設  
 三十周年記念号) 1977  
 " 第五集 1983  
 大阪歯科大学生理学教室研究論文集 1976  
 大阪高等医学専門学校  
 笹川教室 II 1957  
 加藤幹夫(編)  
 大阪医科大学第二生理学教室論文集  
 第1巻(1960~1964) 1969  
 第2巻(1960~1964) 1969

[G] 中・四国地区

福原 武(編)  
 岡山大学医学部第二生理学教室業績集(1956~1960)  
 (1960~1964)  
 " (1965~1967)  
 " (1968~1969)  
 中山 沃(編)  
 岡山大学医学部第二生理学教室業績集(1970~1975)  
 " (1976~1980)  
 " (1980~1985)  
 岡山大学医学部第1生理学教室編  
 西田 勇教授御栄転記念教室業績目録 1979  
 Report from 2nd Physiology Department  
 Medical School, Hiroshima University 1986  
 川崎医科大学第1生理学教室業績集  
 福原 武(編) 第1巻(1970~1976) 1976  
 松村幹郎(編) 第2巻(1976~1981) 1981  
 愛媛大学医学部生理第二講座業績集  
 第1巻 1985

[H] 九州地区

後藤昌義教授退官記念  
 学士鍋 55 1985  
 熊本大学体質医学研究所  
 生理学研究部論文集  
 第4集(1957~1962) 1963  
 第5集(1963~1967) 1968  
 第6集(1968~1971) 1971  
 第7集(1971~1976) 1977  
 第8集(1977~1981) 1982

緒方維弘教授定年退官記念 業績目録	1971	II (1964~1971)	1970
佐々木隆教授開講十周年の歩み (1971~1981)	1982	III (1971~1977)	1980
額綱教三教授業績集 I (1946~1963)	1970	IV (1978~1980)	1980
		V (1983~1987)	1987
		佐藤 謙助教授退官記念 生体系の高次活動と生体情報	1979

VI. 随筆等に類するもの

生沼曹六 勿忘草	1951	市岡正道, 上原陽子(編)	
東大生理学同窓会編 生体の全機性—橋田邦彦選集—	1977	不空集—山極一三遺文選集— 編集代表 塚田裕三	1971
東大生理学同窓会編 追憶の橋田邦彦 若林 勲(著)	1976	林 謙・木々高太郎先生追悼集 日本科学協会	1970
寺田寅彦と医学, 生物の世界 林 謙(著)	1979	市河三太(著) 三太雑記	1986
昨日の雪	1970	吉村寿人(著) 喜寿回顧	1984
東北大学医学部第一生理学教室同窓会知止会編 自然から不自然へ 不自然から自然へ —佐武安太郎先生生誕百年記念—	1986	須田 勇(著) 随筆(退官記念号)「第二の知」 句集“影”	1981 1977
星 猛 あしあと	1987	俳句入門 松本巨草 日地康武	1983
名取禮二(編) 浦本政三郎教授遺稿集 漸潮先生 随想集	1969 1969	ギムネマ・シルベスター インド2,000年の歴史に息づく秘薬に魅せられて たたら書房	1985
酒井敏夫(著) 慈恵の庭にありて	1986	田原 淳先生生誕100年記念 座談会・論文集	1973
清原富士子(編) 痛みと闘う一付・清原迪夫の思い出	1979	後藤昌義教授退官記念特集号 わくどう 6	1985

VII. 生理学講座(中山書店)(1943~1952)

第1巻 生物の物質的基礎		7. 作用物質	中原和郎
1. 細胞の構造的基礎	合田得輔 藤井 隆	8. 光合成	田宮 博
2. 原形質の物理化学的特性		第2巻 生体電気現象および生体反応	
A. 原形質の物理化学	神谷宜郎	1. 生体電気現象	
B. 原形質の生理化学	石田寿老	A. 電気発生	
3. 溶液論および界面現象	吉村寿人 舟木 広	(1) 生体の発電現象	杉 靖三郎
4. 生体のエネルギー論	本川弘一	網膜の電気現象	間田直幹
5. 生体の量子論的基礎	久保秀雄	脳波—中枢神経の電気現象	内 菌 耕二
6. 酵 素	須田正巳	(2) 人体皮膚の電気分極現象	朴 沢 進
		(3) 精神電流現象	藤 森 開一
		B. 電気の刺激作用	鈴木正夫

2. 刺激と興奮		2. 体育の学習指導	竹之下休蔵
A. 被刺激性と興奮性	坂本 嶋 嶺	3. 成長, 発育と体育 発育刺激としての体育運動	猪飼道夫 前川峯雄
B. 興奮の伝導		4. 体育実験指針	杉本良一 松井三雄 本間茂雄 笠井恵雄 武政喜代次 前川峯雄
(1) 化学的伝導	大谷卓造		
(2) 伝導現象	加藤元一 山田 守		
(3) 活動電位から見た興奮伝導	田崎一二		
(4) 神経興奮伝導の模型的研究	山極一三		
C. 周期的興奮	若林 勲		
D. 原始的運動形態	瀬尾愛三郎	5. 特殊体育	
第3巻 生物生理(上)		A. 盟体育	竹内虚士
1. 生物学実習要項	福井玉夫	B. 盲人の体育	江尻 容
2. 比較形態学		C. 肢体不自由者の訓練	水町四郎
A. 脊椎動物	工藤得安	6. 身体適正(フィジカル・フィッ トネス)	白井伊三郎
B. 無脊椎動物の比較解剖	岡田弥一郎		
3. 発生の生理	元村 勲	第7巻 体育生理(下)	
4. 個体発生附系統発生	竹脇 潔	7. 体育による体格, 体力の形成	勝木新次 石井雄二
5. 比較生理学		8. 疲労判定法	浦本政三郎
A. 総 論	井上清恒	9. 姿 勢 運動性特異体質	猪飼道夫 笹川久吾
B. 筋と神経	田中英彦	10. 運動生理学	東 龍太郎 杉 靖三郎
C. 消化と循環	沼野井春雄		
D. 動物の環境要因	本城市次郎	11. 労働生理	暉峻義等
6. 生物の進化	徳田御稔	12. 運動障害の生理 失行症	林 謙 秋元波留夫 斎藤一男
7. 性と生殖	内田 享	スポーツ障害	
第4巻 生物生理(下)		13. 女子のスポーツ的特性	岩田正道
1. 生理遺伝学		14. オリンピック競技	東 龍太郎
A. 癌の細胞学	牧野佐二郎	第8巻 血液および循環	
B. 遺伝の生理	吉川秀男	I. 血液および造血器	
2. 植物実験生態学	吉井義次	1. 血 液	養島 高
3. 植物生化学	三輪知雄	2. 血液有形成分の病態生理	小宮悦造
4. 無脊椎動物の飼育	岡田弥一郎	3. 血液液状成分の病態生理	加藤勝治 福武勝博
5. 生物学史	上野益三	4. 血液の病的状態	美甘義夫
第5巻 心理と生理		II. 循環系	
1. 教育心理	田中寛一	1. 心臓の生理	福原 武
2. 教育測定と評価	田中寛一	2. 心電図	樫田良精
3. 知学の生理心理学	小保内虎夫	3. 血液循環	木村栄一 福田邦三 長島長節
4. 児童心理	山下俊郎		
5. 環境の心理	桐原葆見		
6. 青年の心理	桂 広介		
7. 学習心理	鈴木 清		
8. 体育心理	松井三雄		
9. 心理学と生理学	林 謙		
第6巻 体育生理(上)		4. 肺臓, 肝臓および脳の循環	島山一平 松田幸次郎
1. 体育の原理	前川峯雄		

5. 毛細管内の体液流	西丸和義
血行における脾臓	銭場武彦
6. 肺循環と冠状循環	前川孫二郎
7. 網内皮系の病態生理	中館久平
第9巻 呼吸, 消化, 栄養, 代謝	
I. 呼吸	
1. 呼吸	高木健太郎
2. ガス交換	柿沼昊作 山川邦夫
3. 組織呼吸	小玉作治
4. 呼吸器障害	大里俊吾
5. 人工呼吸法	中村隆
II. 消化	
1. 消化管運動の生理	福原武
咀嚼運動, 歯の生理	栖原六郎
吸収	簗島高
2. 消化腺	須田勇
[唾液腺の内分泌]	緒方知三郎
3. 消化機能の病態生理	黒川利雄
4. 腸管の閉塞病態生理	斎藤 溟
III. 栄養	
1. 消化化学	吉川春寿
2. 栄養素	吉川春寿
3. ビタミン	藤田秋治
4. 物質およびエネルギー代謝	山添三郎
5. 中間代謝	児玉桂三
6. 肝臓の正常および病態生理	高橋忠雄
膽道の正常および病態生理	高橋忠雄
7. 栄養失調症	大森憲太
8. 食餌療法	新井養老
第10巻 感覚, 運動(神経, 筋)	
I. 感覚	
2. 視覚(前篇)	細谷雄二
同(後篇)	本川弘一
網膜の正常および病態生理	中島実
眼の屈折異常	中村康
3. 聴覚	
耳の構造および聴覚即論	富田恒男
音感, 聴神経, 聴覚中枢	勝木保次
聴覚検査	切替一郎
聴覚器障害	大藤敏三
病的聴覚	西端 駿一
4. 嗅覚および味覚	福田邦三
5. 皮膚感覚	時実利彦

6. 迷路	長谷川高敏
7. 深部感覚	猪飼道夫
II. 中枢神経	
1. 錐体路系, 外路系	林 濂
2. 受容分析路系	林 濂
3. 小脳の生理	須田 勇
4. 大脳皮質	林 濂
5. 脳 幹	林 濂
6. 脊 髄	林 濂
7. ナルコレプシイと睡眠	斎藤十六
III. 末梢神経	
1. 末梢神経	小川鼎三
神経の生理学	杉 靖三郎
2. 自律神経系	沖中重雄
IV. 筋および運動	
1. 骨格筋	
A. 筋の収縮	名取礼二
B. 筋トーン	佐々貫之
筋電図	島本多喜雄
C. 運動と疲労	時実利彦
D. 音声の生理	松岡修吉
2. 心筋および平滑筋	颯田琴次
	藤田康三
	菅原淳夫
	戸塚武彦
	大谷卓造

第11巻 淋巴, 排泄, 内分泌, 生殖, 体温

I. 淋巴	
1. 淋巴	
A. リンパ	緒方大象
B. 水分代謝	山本清
2. 脳脊髄液	勝沼精蔵
3. 浮腫	大島研三
II. 排泄	
1. 腎臓	
A. 腎臓および尿の生成	久保盛徳
B. 病的腎における腎機能	佐々廉平
2. 病尿	市原硬
III. 内分泌	
1. 化学相関	林 濂
胸線と松果体	岡本彰祐
2. 脳下垂体	岡本歌子
3. 副腎皮質の生理	竹脇 潔
副腎髄質の生理	中尾 健
	杉 靖三郎

4. 甲状腺	鳥飼龍生
5. 副甲状腺	林 濂
6. 膵臓と血糖調節	坂口康蔵
7. 泌乳の生理	中山光重
	鶴上三郎
IV. 生殖	
1. A. 繁殖と生殖および遺伝	福田邦三
B. 体質と遺伝	木田文夫
2. A. 男性生殖機能とホルモン	熊谷 洋
B. 性器, 生殖産物および受精	杉 靖三郎
3. 女性性器およびその性週期	
A. 女性生殖器機能と内分泌調節	藤井久四郎
B. 受胎調節	安藤画一
	松本 寛
V. 体温および熱	
1. A. 体温	田坂定孝
B. 発汗	久野 寧
2. 発熱	阿部勝馬

第12巻 実験法, 歴史, その他

1. 実験法	
A. 生理学実験法	浦本政三郎
B. 臨床生化学における簡易微量	児玉桂三
定量法	
C. 薬理学実験法	福田得志
D. 組織学実験法	小川鼎三
	水平敏知
	安澄權八郎
	古武弥正
	野村七録
	福原 武
	杉 靖三郎
	内山孝一
	石原 明
	竹中繁雄
	戸塚武彦
E. 心理学実験法	
F. 動物生理実験の手引	
2. 生理学実習指針	
3. 生理学史	
4. 生理統計法	
5. 総索引	

(日本生理学雑誌編集委員会調べ)

## 大学, 学部, 及び研究機関所在地一覧

大学名・学部名	郵便番号	所在地	電話番号
旭川医科大学	〒078	北海道旭川市西神楽四線五号11	☎ 0166-65-2111
秋田大学医学部	〒010	秋田県秋田市本道1丁目1-1	☎ 0188-33-1166
山形大学医学部	〒990-23	山形県山形市蔵王飯田字西の前	☎ 0236-33-1122
新潟大学医学部	〒951	新潟県新潟市旭町通一番町757	☎ 025-223-6161
自治医科大学医学部	〒329-04	栃木県河内郡南河内町大字薬師寺3311-1	☎ 0285-44-2111
独協医科大学医学部	〒321-02	栃木県下都賀郡壬生町大字北小林880	☎ 0282-86-1111
筑波大学基礎医学系	〒305	茨城県つくば市天王台1丁目1-1	☎ 0298-53-3210
埼玉医科大学医学部	〒350-04	埼玉県入間郡毛呂山町毛呂本郷38	☎ 0492-95-1111
防衛医科大学校医学教育部	〒359	埼玉県所沢市並木3-2	☎ 0429-95-1211
聖マリアンナ医科大学医学部	〒213	神奈川県川崎市宮前区菅生2丁目16-1	☎ 044-977-8111
北里大学医学部	〒228	神奈川県相模原市北里1丁目15-1	☎ 0427-78-8111
東海大学医学部	〒259-11	神奈川県伊勢原市望星台	☎ 0463-93-1121
帝京大学医学部	〒173	東京都板橋区加賀2丁目11-1	☎ 03-964-1211
東京大学医学部	〒113	東京都文京区本郷7丁目3-1	☎ 03-812-2111
杏林大学医学部	〒181	東京都三鷹市新川6丁目20-2	☎ 0422-47-5511
山梨医科大学医学部	〒409-38	山梨県中巨摩郡玉穂町下河東1110	☎ 0552-73-1111
金沢医科大学医学部	〒920-02	石川県河北郡内灘町大字大学1-1	☎ 0762-86-2211
福井医科大学医学部	〒910-11	福井県吉田郡松岡町下合月23	☎ 0776-61-3111
富山医科薬科大学医学部	〒930-01	富山県富山市杉谷2630	☎ 0764-34-2281
岐阜大学医学部	〒500	岐阜県岐阜市司町40	☎ 0582-65-1241
浜松医科大学医学部	〒431-31	静岡県浜松市半田町3600	☎ 0534-35-2111
愛知医科大学医学部	〒480-11	愛知県愛知郡長久手町大字岩作字雁又21	☎ 05616-2-3311
藤田学園保健衛生大学医学部	〒470-11	愛知県豊明市杏掛町田染ヶ窪1-98	☎ 0562-93-2600
滋賀医科大学医学部	〒520-21	滋賀県大津市瀬田月輪町	☎ 0775-48-2111
京都大学医学部脳神経研究施設	〒606	京都府京都市左京区吉田近衛町	☎ 075-753-4300
近畿大学医学部	〒589	大阪府大阪狭山市大野東377-2	☎ 0723-66-0221
兵庫医科大学医学部	〒663	兵庫県西宮市武庫川町1-1	☎ 0798-45-6111
島根医科大学医学部	〒693	島根県出雲市塩冶町89-1	☎ 0853-23-2111
川崎医科大学医学部	〒701-01	岡山県倉敷市松島577	☎ 0864-62-1111
徳島大学医学部	〒770	徳島県徳島市蔵本町3丁目18-15	☎ 0886-31-3111
愛媛大学医学部	〒791-02	愛媛県温泉郡重信町大字志津川	☎ 0899-64-5111
高知医科大学医学部	〒781-51	高知県南国市岡豊町小蓮	☎ 0888-66-5811
香川医科大学医学部	〒761-07	香川県木田郡三木町大字池戸1750-1	☎ 0878-98-5111
産業医科大学医学部	〒807	福岡県北九州市八幡西区医生ヶ丘1-1	☎ 093-603-1611
産業生態科学研究所		〃	〃



大学名・学部名	郵便番号	所在地	電話番号
福岡大学医学部	〒814-01	福岡県福岡市城南区七隈8丁目19-1	☎ 092-871-6631
佐賀医科大学医学部	〒840-01	佐賀県佐賀市鍋島町大字鍋島三本杉	☎ 0952-31-6511
大分医科大学医学部	〒879-56	大分県大分郡狭間町医大ヶ丘1丁目1506	☎ 0975-49-4411
宮崎医科大学医学部	〒889-16	宮崎県宮崎郡清武町大字木原5200	☎ 0985-85-1510
琉球大学医学部	〒903-01	沖縄県中頭郡西原町字上原207	☎ 09889-5-3331
北海道大学歯学部	〒060	北海道札幌市北区北13条西7丁目	☎ 011-716-2111
東日本学園大学歯学部	〒061-02	北海道石狩郡当別町字金沢1757	☎ 01332-3-1211
岩手医科大学歯学部	〒020	岩手県盛岡市中央通1丁目3-27	☎ 0196-51-5111
東北大学歯学部	〒980	宮城県仙台市星陵町4-1	☎ 022-274-1111
東北歯科大学歯学部	〒963	福島県郡山市富田町字三角堂31-1	☎ 0249-32-8931
日本歯科大学新潟歯学部	〒951	新潟県新潟市浜浦町1-8	☎ 025-267-1500
明海大学歯学部	〒350-02	埼玉県坂戸市けやき台1-1	☎ 0492-85-5511
日本大学松戸歯学部	〒271	千葉県松戸市栄町西2丁目870-1	☎ 0473-68-6111
東京歯科大学歯学部	〒260	千葉県千葉市真砂1丁目2-2	☎ 0472-79-2222
鶴見大学歯学部	〒230	神奈川県横浜市鶴見区鶴見2丁目1-3	☎ 045-581-1001
神奈川歯科大学歯学部	〒238	神奈川県横須賀市稲岡町82	☎ 0468-25-1500
東京医科歯科大学歯学部	〒113	東京都文京区湯島1丁目5-45	☎ 03-813-6111
日本歯科大学歯学部	〒102	東京都千代田区富士見1丁目9-20	☎ 03-261-8311
昭和大学歯学部	〒142	東京都品川区旗の台1丁目5-8	☎ 03-784-8000
松本歯科大学歯学部	〒399-07	長野県塩尻市大字広丘字郷原1780	☎ 0263-52-3100
朝日大学歯学部	〒501-02	岐阜県本巣郡穂積町大字穂積1851-1	☎ 05832-6-6131
愛知学院大学歯学部	〒464	愛知県名古屋千種区楠元町1-100	☎ 052-751-2561
大阪歯科大学歯学部	〒540	大阪府大阪市東区京橋1丁目47	☎ 06-943-6521
大阪大学歯学部	〒565	大阪府吹田市山田丘1-8	☎ 06-876-5711
岡山大学歯学部	〒700	岡山県岡山市鹿田町2丁目5-1	☎ 0862-23-7151
広島大学歯学部	〒734	広島県広島市南区霞1丁目2-3	☎ 082-251-1111
徳島大学歯学部	〒770	徳島県徳島市蔵本町3丁目18-15	☎ 0886-31-3111
九州歯科大学歯学部	〒803	福岡県北九州市小倉北区真鶴2丁目6-1	☎ 093-582-1131
九州大学歯学部	〒812	福岡県福岡市東区馬出3丁目1-1	☎ 092-641-1151
福岡歯科大学歯学部	〒814-01	福岡県福岡市早良区大字田700	☎ 092-801-0411
長崎大学歯学部	〒852	長崎県長崎市坂本町7-1	☎ 0958-47-2111
鹿児島大学歯学部	〒980	鹿児島県鹿児島市宇宿町1208-1	☎ 0992-64-2211
筑波大学体育専門学群	〒305	茨城県新治郡桜村天王台1丁目1-1	☎ 0298-53-2111
順天堂大学体育学部	〒270-16	千葉県印旛郡印旛村平賀学園台1-1	☎ 0476-98-1001
横浜市立大学文理学部(体育医学)	〒236	神奈川県横浜市金沢区瀬戸22-2	☎ 045-787-2311
東海大学体育学部	〒259-12	神奈川県平塚市北金目1117	☎ 0463-58-1211

大学名・学部名・研究機関名	郵便番号	所在地	電話番号
東京大学教育学部			
体育学健康教育学科	〒113	東京都文京区本郷7丁目3-1	☎ 03-812-2111
日本体育大学体育学部	〒158	東京都世田谷区深沢7丁目1-1	☎ 03-704-7001
日本女子体育大学体育学部	〒157	東京都世田谷区北島山8丁目19-1	☎ 03-300-2251
東京慈恵会医科大学			
医学部体力医学研究室	〒182	東京都狛江市和泉106	☎ 03-480-1151
東京学芸大学教育学部	〒184	東京都小金井市貫井北町4丁目1-1	☎ 0423-25-2111
杏林大学保健学部	〒192	東京都八王子市宮下町476	☎ 0462-91-0011
名古屋大学			
総合保健体育科学センター	〒464	愛知県名古屋千種区不老町	☎ 052-781-5111
中京大学体育学部	〒470-03	愛知県豊田市貝津町床立101	☎ 0565-45-0971
京都大学教養部	〒606	京都府京都市左京区吉田二本松町1	☎ 075-753-6500
大阪大学健康体育部	〒560	大阪府豊中市待兼山1-1	☎ 06-844-1151
大阪大学基礎工学部		〃	〃
大阪体育大学体育学部	〒567	大阪府茨木市学園町1-1	☎ 0726-34-3141~4
神戸学院大学栄養学部	〒673	兵庫県神戸市西区伊川谷町有瀬518	☎ 078-974-1551
広島大学総合科学部	〒730	広島県広島市中区東千田町1-1-89	☎ 082-241-1221
九州大学健康科学センター	〒816	福岡県春日市春日公園6-1	☎ 092-573-9611
鹿屋体育大学体育学部	〒891-23	鹿児島県鹿屋市白水町1	☎ 0994-46-4111
(財)東京都老人総合研究所	〒173	東京都板橋区栄町35-2	☎ 03-964-1131
(財)東京都神経化学総合研究所	〒183	東京都府中市武蔵野台2-6	☎ 0423-25-3881
三菱化成生命科学研究所	〒194	東京都町田市南大谷11	☎ 0427-26-1211
NHK放送技術研究所	〒157	東京都世田谷区砧1丁目10-11	☎ 03-415-5111
国立公衆衛生院	〒108	東京都港区白金台4丁目6-1	☎ 03-441-7111
国立栄養研究所	〒162	東京都新宿区戸山1丁目23-1	☎ 03-203-5721
(財)明治生命厚生事業団			
体力医学研究所	〒192	東京都八王子市戸吹町150	☎ 0426-91-1163
岡崎国立共同研究機構	〒444	愛知県岡崎市明大寺町西郷中38	☎ 0564-54-1111
愛知県心身障害者コロニー			
(発達障害研究所)	〒480-03	愛知県春日井市神屋町713-8	☎ 0568-88-0811
京都大学霊長類研究所	〒848	愛知県犬山市宇官林	☎ 0568-61-2891
近畿大学高血圧研究所	〒589	大阪府大阪狭山市大野東377-2	☎ 0723-66-0221
国立循環器病センター研究所	〒565	大阪府吹田市藤白台5丁目7-1	☎ 06-833-5012
済生会兵庫県病院			
血栓止血研究神戸プロジェクト	〒651	兵庫県神戸市中央区日暮通5丁目5-17	☎ 078-231-1181
長崎大学熱帯医学研究所	〒852	長崎県長崎市坂本町12-4	☎ 0958-47-2111

## 日本生理学教室史(下巻)編集後記

酒井敏夫

昭和58年4月21日、日本生理学教室史 上巻が刊行されました。その時、編集後記を書いた私は未だ当初の計画は終わっていないと判断、いずれ続巻が編集されねばならないことを日本生理学雑誌に示唆しました。これは、医学部系の生理学教室以外に、歯学部系の口腔生理学、各種研究所に所属する生理学研究室、旧東京教育大学を背景とする筑波大学運動生理学研究室、都政の福祉から発想された東京都関係医療研究所 生理学会の若きパフォーマンスの結晶として生れた岡崎国立共同研究機構生理学研究所、国策の一県一医大構想の新設医科大学並びに医・歯学以外の学部所属の生理学教室等があることを意識したことによります。特に戦後創設の各研究室は年輪は若くても、日本人第一号教授、大沢謙二先生から数えて、日本生理学百年の歴史的延長として把えなければならない人脈であるからです。従って、続巻の編集はこれらの若い生理学研究室所属の会員の手によって行なわれることが最適といえと申しました。

幸い、戦後の新設医科大学の中から、日本生理学会大会の当番幹事として山形大学医学部の望月政司教授が指名されたので、第63回大会を卜して続巻編集の音頭取りを願うことになりました。早速、対象執筆者となる全国の生理学関係者の皆様に発起人となって頂き、望月教授の日本生理学教室史、続巻の編集委員長就任方を依頼することになりました。熱烈なる賛成の声から判断して続巻となるべきものが一巻で完成される可能性の高いことを知り、急ぎ日本生理学教室史、下巻、編集委員会設置を行ない、昭和60年(1985)12月23日の日本生理学会常任幹事会にその旨を報告、改めて昭和61年(1986)4月3日の第63回日本生理学大会・評議委員会並びに総会に諮る手続きがとられました。ここに、望月政司編集委員長を中心とする編集委員会

(菅野義信、酒井敏夫、佐藤昭夫、高比良英輔、竹宮 隆、山岸俊一)が発足し、目的の作業に入ることが出来ました。

編集委員会は、この下巻がさきに刊行された日本生理学教室史、上巻に続くものであることを再確認し、同一編集方針の下でおこなわれるべきであるとし、関係教室・研究室の皆様方に執筆依頼を行ないました。執筆要領の原則は①創設経緯、②教室・研究室の歴史変遷、③教室・研究室の主要人物史、④教室・研究室における主たる研究の流れを骨子とするが、形式は執筆者の自由度を尊重しながら、原稿締め切りを、昭和61年(1986)12月20日としました。

翌、昭和62年(1987)4月の第64回日本生理学会大会の時点での原稿の集まりは芳ばしくはありませんでした。他方、予定通り書かれた諸先生からは、何時初校が出るのかという御手紙を頂き、刊行の促進方を求められました。それ以来、編集委員は、それぞれの担当を分けて、執筆のお願いを精力的に実施し、昭和62年11月1日には最終編集作業を経て、原稿の大半を鶴岡印刷に手渡すことが出来ました。結局、原稿締め切り期日より、約1年の遅れはありましたが、所期の刊行軌道に乗ることができました。これはいうまでもなく、執筆者各位の絶大なる御協力の賜という外はありません。それにしても、度重なる無礼な催促も敢えて行ない、誠に、御迷惑を掛けたことと思います。われわれ、奉仕の熱意の表われととして頂き、他意の無かったことをお許し下さい。

初校は、昭和63年(1988)2月より出はじめ、4月末日には医学部・医科大学系並びに歯学部・歯科大学系の生理学教室、口腔生理学教室を終了することができました。この間、付録の①生理学談話会の歴史的推移(日生誌、46巻11号、12号、1984)、②名著復刻への道(日生誌、

48巻9号、1986)、③日本生理学会教育委員会の歩み(日生誌、49巻4号、1987)、④1956~1986年生理学教科書等出版物一覧を校正し終えました。④を除いてすべて日本生理誌に掲載されたものではありませんが、何れも日本生理学会の歩みの上で貴重な資料となるものと思ひ、本書に収録しました。

本書目次の作製に当たって、旧北京大学医学院生理学教室史を第一順位とし、医学部医大の部、歯学部歯大の部、保健・体育関係並びに研究所関係別に、北から南に位置する配列を採用して纏めました。余白が出て少々見苦しい点がありますが各生理学教室別刷として御利用願える事を考慮しての措置でした。

何れにしても、旧北京大学生理学教室史を以って下巻の巻頭を飾り得ましたことは、わが日本生理学会の歴史の中で慶賀すべきことでもあります。福原 武、横山正松両先生が共に健筆を揮われることによって、先生達が誠意をもって日中友好の絆のために苦闘された姿が再現されました。故浦本政三郎先生(初代日本生理学教室史編集委員長)は、生前福原教授の業績を高く評価され、生理学講義の中で福原先生製作の腹窓法の映画を上映されたことがありました。戦時中のことではありましたが、昨日の如く脳裏に焼きついております。地下の浦本先生は、御自身の計画された生理学教室史がすべて完結出来たことと共に旧北京大学福原教授健在を喜んでおられることをごぞいましょう。

今回、望月政司教授が下巻の編集委員長になられたことにも、浦本政三郎先生と因縁深いものがあるように思えてなりません。浦本先生は、昭和30年代に山形県立衛生研究所長をなさっており、山形県の医学研究助成には事の外尽力されておりました。この間、山形県に医科大学設置という構想を打立てられ行動されていた様に聴いております。その当時の建設企画草案(県立山形大学の設置について 昭和31年12月1日)長文の堂々たる論説が残っております。後日、国策による一県一医大の先陣をきって、山形大学医学部が設置されましたが、もともと

山形県は医学に対する進歩県で、多くの医学生を東京に遊学せしめ、明治12年には医育機関も置く情勢でもありました。その山形大学に望月教授が医学部創設の推進役として赴任されました。浦本先生が、日本生理学百年史の構想を提案されましたのは、昭和33年(1958)でありましたが、この提案の草稿は山形県衛生研究所で書かれたもので、浦本先生一日本生理学教室史一山形の関係が事の外深い事を知り得るでありましょう。

付録についてはすでに述べましたが、この中に1956年以降30年間の生理学会会員による出版物一覧を掲載しました。これについて説明が少々必要かとも思われます。1955年浦本政三郎著「過去半世紀の日本生理学会の回顧と展望」が印刷されました。今もってその掲載誌を知ることができませんが、その別刷の一部に生理学書及び生理学者の出版物という一覧表があります。この別刷を若林 勲先生から頂戴してありましたが、私はこれは日本生理学会にとって貴重な資料であり、誰かの手で追加補充すべきものと思っていました。その後、日本生理学教室史の編集に関わる様になり、さらに「名著復刻への道」などを手がけてみますと、浦本先生の出版一覧を追加補充するのは、編集幹事の職席にある私以外にはないと感じるようになりました。日本生理学雑誌編集委員を通して、全国会員の皆様の御協力を得て付録の如き、1956~1986年、30年間の生理学教科書並びに生理学著編訳書の一覧を作製し、浦本先生著のものと共に本書に掲載する事にしました。何分膨大なもので、数多くの採用漏れがある事と思ひます。思わぬ誤りをしていることかもしれません。日本生理誌編集委員会編とありますが、最終の整理は私とその任に当たったので、責は私一人にあることを申し添え、次の機会に訂正、補筆が願えれば幸いと思っております。

日本生理学教室史の出版に際して、その意義を高く感得された鶴岡印刷株式会社は、社長を陣頭に故石黒慶吉、並びに福山忠利、百瀬金吾、白幡裕子の皆様が文字通りの尽力をされまし

た。上巻以来の御努力に対し心からお礼申し上げます。

追記：日本生理学教室史 上巻には、生理学会発会準備記念写真に続いて、第1回大会(東大)より第60回大会(阪大)に至る記念写真が飾られている。これらの写真は、編集に当たられてきた先生達が苦心して蒐集されたものであった。故浦本政三郎先生は、私が生理学教室に入った頃、自分は生理学会皆勤者だったといっておられ、確かに先生のアルバムには大会写真が完全にそろっていた記憶があり、上記の蒐集写真の印刷に際して欠けているものは、浦本先生のアルバムからお借り出来ました。

さて、この記念写真集の中で大正13年(1924)第3回日本生理学会大会は東北大学で開催されたわけであるが、この写真と次の第4回大会とが入れ代わっている。即ち第4回大会は満州医

大で行なわれ、瀋陽郊外の名所めぐりの写真も掲げられている。会員の皆様、一様にカンカン帽が見える写真と一対の写真は満州医大における記念写真と言えます。この事を故青木 健教授がいち早く発見指摘され、西山明德教授より連絡を受けていました。私は、全く偶然の機会に中国、東北地区を旅する事があり、瀋陽の中国医学院(旧満州医科大学)で講義を行なう経験を持ちました。私達訪問者は日本生理学教室史上巻にある第3回日本生理学大会の写真にある建物の前で記念撮影を行ない、青木教授の御指摘が正しいことをこの目で確認することが出来ました。上巻の第3回と第4回の記念写真は入れ換えを行ない、訂正すべきであるということです。編集者自らの目で確かめられたことは、私達を招いてくれた中国衛生部の厚意によるもので感謝の意を表したい。

昭和63年9月10日

1988年12月21日発行

日本生理学教室史(下巻)

定価 20,000円

編集 日本生理学教室史編集委員会  
 発行所 日 本 生 理 学 会  
 〒113 東京都文京区本郷3-30-10  
 布施ビル  
 印刷所 鶴 岡 印 刷 株 式 会 社  
 〒997 山形県鶴岡市山王町14-24